
コードギアス 猛き獣

リンクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 猛き獣

【NZコード】

N9175P

【作者名】

リンクス

【あらすじ】

強国ブリタニアにおける最強の騎士、ナイトオブワーンには一人の義息子がいた。

彼は身の丈は2m程、体はくまなく鍛えられていた。髪は獅子を思わせるようで、目は猛禽類を彷彿とさせた。その武は義父に並ぶとも称される。まさに、武の申し子であった。ただ、彼には欠点があった。それは……

「今度こそ死ねよや、親父いい！！！」

「10年早い！ そしていい加減に礼儀を覚えんか！ このバカ息

子があ！！」

礼儀が著しく欠けていることだった。

そんな彼のあだ名は「ブリタニアの猛獸」

プロローグ（前書き）

なんとか始まりを書けたので投稿します。コードギアスは色々と難しいので矛盾やおかしな部分が多くあるかもしません。もし気づかれたならご指摘していただければ幸いです。

それではコードギアス 猛き獸をお楽しみください

プロローグ

激しい砂嵐だつた。

砂漠の生物ですら身を隠す砂嵐の中に一つの影があつた。

それは、一人の男だつた。

男の格好は傍目から見ても、立派な物だつた。

白い軍服らしき服に、腰から掛けられた豪奢な剣。

吹き荒れる砂が肌に突き刺さる。まるで、ここから先に進んではいけないと男を止めているようだつた。

しかし、男は引き返す事は無かつた。

男はそのまま砂嵐の中を突き進む。吹き荒れる砂のせいでも1m先も見る事が出来ない。

この砂嵐が止む事はあるのだろうか。

「……そろそろ見える筈なのだが」

顔に突き刺さる砂を無視し、男は一人呟く。どうやら男は何かを探しているようだつた。

そのままじばり歩いていると、彼の目に一つの廃墟が映つた。

男は廃墟を見つけると、その険しい顔に微笑を浮かべた。どうやら、あの廃墟が男の目的なのだろうか？

その廃墟はかろうじて形を保っているような物であり、いつ崩れてもおかしくなった。

男が廃墟の中に入ろうとした。

……カラリ

廃墟の入口付近で何かが落ちる音がした。

男が視線を向けると、そこには小石があるだけだった

「……小石」

男の注意が小石へと向いた瞬間、上から何かが降つて来た。

男は咄嗟に腰の剣を抜き、降つて来た何かを弾く。

男が弾いたのは、一人の少年だった。年は6歳程だろうか。少年は見るからにボロボロのローブを纏つており、その手には真新しい軍用ナイフが握られていた。

「……チツ」

少年は一回舌打ちするとナイフを構え、走りだした。

廃墟内の物を使い、影から影へと動き、少しづつ男に近づいていく。

その動きに無駄は無く、人間というよりも獣のソレに近かつた。

「貴様に一つ聞く！　ここ数日で我が軍の兵士を襲つたのは貴様か？」

「……」

「沈黙は肯定と取る。捕縛させてもいいつやー。」

剣を抜き、正眼に構える。

少年は影から出ずに男の動きを見つめる。

確実に男を仕留められる時を待つかのように。

一体どれほどの時間こいつしていただろうか。
睨みあつてから既に1時間が経過しようとしていた。

このままでは埒が明かない。

男はそう考えたのか敢えて隙を造りだした。

少年はその隙を見逃さず、影から飛び出し、ナイフで襲いかかつた。

「かかった」

男は少年のナイフを弾き、空いた片手で少年の腕を掴み、拘束した。

「くわつ、離しやがれ！」

拘束から逃れようと暴れるが、所詮は子供の力。

大人の、それも鍛えられた軍人の力から逃れる事など出来るはずも
なかつた。

「小僧、貴様は何故ここにいる。親はどうした?」

「知るか!俺はずつと一人だ!親?そんなもん顔も知らねえ
よ!」

「つまり、この技術は全て独自で身につけた、ということか」

「それがどうした!生きる為だ!」

男は感心していた。

この少年は誰かに教えられるでもなく、鍛えられた軍人を襲える
までの技術を自力で身につけたと言つのだ。

この少年を自分が鍛えたらどれほどの戦士、いや騎士になるのだ
ろか。

男の中にそんな考えが浮かんだ。

「小僧、生きたいか?」

「当たり前だろー。じゃなきゃこんな事しねえよー。」

「だが、貴様は私に捕縛された。つまり貴様の命は私が握っている、
とこうことだな」

「チツ。じゃあわざと殺せばいいだろー。」

「『』で貴様を殺してもいいが、一つ提案がある」

「なんだよ」

「小僧、私の下に来い」

「は？」

少年は自分を拘束している男が何を言っているのかが分からなかつた。

「何が目的だよ」

「お前のやのオ、『』で散らすのは惜しい。どうだ？　私の下に来ないか？」

「それはあなたの手下になれって事か？」

「部下ではない。私の息子となれ」

「あんた、頭おかしいのか？」

「なんとも言へ。それで返答は？」

「…………以前」

「む？」

「あなたの名前は？」

「私の名前はスマルク・ヴァルトショタインだ。小僧、貴様の名は？」

「名前なんざねえよ。あなたが付けてくれ、『親父』」

「いいだらう、今日からお前の名は……」

「…………ント。…………ント。いい加減に起きろー セグランント……！」

「…………んお。なんだよ、エディ。人が折角良い気分で寝てたっての」

「」

セグラントと呼ばれた青年は無理やり叩き起こされた事が不満なのか、自らを起こしたエディを睨む。

エディはそんな彼の様子に肩を竦めた。

「折角起こしてやった友に対しても何て言葉だ。時間になつたから起こしてやっただけだつてのに。

とこうか、睨むの止めてくんねえ？ お前に睨まれると心臓がこう、

キュッと縮まつてしまつ

「田つきは生まれつきだ。ほつとけ」

セグラントはドライに軽く返しながらベッドから立ち上がる

身長はおよそ2メートル程、体はほくまなく鍛え抜かれており、目は猛禽類を思い起させる。

彼は寝癖のついた髪を手で軽く後ろにやる。その動作だけで彼の髪は獅子の鬚のよくなつた。

「セグラント、いつも思つんだがお前つて何を食つたらそんなに体力くなるんだ?」

「肉だ、肉を食え。後は適当に頑張れ」

「なんと適当な。……あ、話してる場合じゃなかつた。早くいかねえと訓練が始まつてしまつー!」

「そいつあやべえな! 遅刻なんぞしたつて事が親父に云われば鉄拳が何回降つてくる事になるやら」

「ヴァルトシュタイン卿はおつかなさうだからな」

セグラントとエディはそんな事を言ひながら部屋から出で、全力疾走で駆けて行つた。

プロローグ（後書き）

全然猛獣ではなくてすいません。次回から軍学校編が何話か入ります。セグラントの名前の由来はとある騎士から取りました。ちなみに友のエディはなんとなくつけました。さて、一応軍学校にいるうちに原作キャラと知り合わせておこうと思つております。誰かといいますと、原作の方で一瞬で出番が終わってしまったモニカ嬢です。彼女は一瞬でスザクに落とされてしまったのでどういったキャラか分からぬのでオリジナルな感じになると思います。・・・あ、別にヒロインではないと思いますよ。多分・・・・・

それでは、これからこの作品をよろしくお願ひします。
感想、レビュー、指摘、なんでもお待ちしております。

模擬戦（前書き）

ようやく完成したので投稿いたします。早速感想をくれた皆様、ありがとうございます。やはり感想を頂けると頑張らつといつ気持ちが強くなりますね。

それでは、お楽しみいただければ幸いです。

「セグランント、エーティー！ イリヤリヤ

訓練が始まる前になんとか訓練場にたどり着いたセグランントとエーティを迎えたのは金色の髪を腰辺りまで伸ばした女性だった。

女性の名をモニカ・クルシュフスキーと言った。

「よつす、モニカ。教官は？」

「まだ来てないから大丈夫よ。それよりもいつも遅刻ギリギリに来るのは止めてくれない？

貴方達が遅れると、チームを組んでる私まで怒られるんだから」

「すまんすまん。セグランントの奴が中々起きなくてよ」

エーティは笑いながらセグランントの背中を叩く。

本当なら肩を叩きたいのだが、セグランントとエーティの身長差ではそれは難しいのだ。

「セグラント、お前も謝つとけって」

「わりじ」

セグラントも謝るが、その態度に反省は見えない。

そんな彼の態度にモニカの米神に青筋が浮かぶが、すぐに怒りをしまい溜息をついた。

「セグラントが起きれないのはいつもの事だから、もう慣れたわ」どうやらこの通り取りもいつもの事のようだった。

モニカも最初は怒つたり、色々対策を練っていたのだが、それら全てが徒労と終わった。

例えば、田覚まし時計をセットしても鳴ると同時にセグラントに破壊され、逆に田覚ましが眠りに付く事となつたのだ。

それ以外にも様々な方法を試したが、結局は誰かが声を掛けるのが一番という事が分かつた。

それ以来、彼を起すのはチームメイトであり、ルームメイトであるエディの仕事となつたのだった。

そのまましばらく三人で話していくと、教官がやってきた。

「全員集まっているな。今回の訓練はナイトメア『グラスゴー』による模擬戦を行う。尚、今回のナイトメアはシミュレーターではなく実機にて行つ。また装備を変えたい者は私に言つよ。質問は？」

ナイトメアによる実戦、この言葉にその場にいる訓練生のほとんどが反応した。

何故なら『ナイトメア』すなわち『ナイトメアフレーム』とは体

長約6mの大型ロボット兵器であり、現代の戦争における花形と言える存在であるからだ。

訓練生達は今までシミュレーターでしかナイトメアを動かしていなかつたが、今回は実機である。
彼等が反応するのも分からぬでもない。

実機による訓練、それが意味するのは軍学校を卒業する日が近いところの事である。

「いいで良い成績を残せば、それだけ軍での出世も早くなる。

気合いも入るところなのだ。

「つむ。 それでは訓練を始める。……模擬戦闘の順番はこれまでの成績から判断した。呼ばれたチームから始める。
尚、順番は成績上位チームからだ。まずはBチームとロチームで行う。今呼ばれたチームは前に出る」

セグラント達Bチームとロチームが前に出る。

「セグラント・ヴァルトシュタイン、先に言つておく。壊すなよ？」

「イエス・マイロード」

教官の言葉にセグラントも苦笑して答える。

セグラントはその体格の通り筋力、中でも握力が強く、今までの訓練で幾つかの器物を破壊してしまっているのである。

ちなみに、破壊した器物の中にはシユミリーターの操縦桿なども含まれているため、教官が注意するのも納得というものである。

「信じるからな。それでは総員騎乗！」

セグラント達はナイトメアに乗り込む。

操縦桿の調子を確かめ、機器に不備がないかを確認する。

『セグラント、作戦はどうする?』

『粉碎する。それ以外にあるのか?』

『エディ、聞く相手を間違っているわ』

『ならモニカ、何か良い案でもあるのか?』

『それは……』

『なら、いつも通りに行こう』

『そだな』

『そうね』

セグラント達の通信に突如割り込みが入つて來た。

『セグラント・ヴァルトシュタイン！ 今度こそ勝たせて貰うぞー。』

相手はロチームのリーダーである青年からだつた。

彼は何かとセグラントに勝負を挑んでくるのだ。

ちなみに今までの結果は、今の彼の言葉で分かるだらう。

『またお前かよ、ダン』

『ぬ、私はお前をフルネームで呼んでいるのだ！ お前もフルネームで呼ばんか！』

『めんべくせどよ』

『……教育、問題なじょうなので始めてトナリ』

モニカが教育に模擬戦を始めようつゝ進言する。

『そりか、それでは始め！』

教育もこの通り取りには慣れたもので即座に訓練開始の声をあげる。

『あ、まだ言いたい事があるのでー！』

ダンが何か言っていたが、その場にいる全員がそれを無視し模擬戦を始める。

『それじゃあ始めましちゃつか』

『了解』

『おっ』

モニカの言葉に従い、三人が駆るナイトメアがダン達に接近していく。

セグラントを先頭にモニカ、エディの順番である。

この隊列が彼等のいつも通りである。

すなわち、セグラントがランスで正面から呐喊し敵の連携を崩し、モニカがそれに続きスタン・トンファーで連携の崩れた相手を狩る。そして、一人が討ち漏らした敵をエディがアサルトライフルによる射撃で仕留めるというものだ。

これは各々が最も得意とする戦法を選んだだけだが、それが思いのほか上手くはまつた為、以後使い続けていた。

『いつもと変わらぬ戦法か！ その戦法は最早この私、ダン・モロレルには通用せん！』

ダンは自分のチームメイトに指示を出す。

ダン達は隊列を自ら崩し、セグラント達を各個撃破しうといふ論む。

この戦法は確かに連携を崩す事が出来れば打破することも可能だわ。

『お前、自分達まで連携崩してどうすんだよ……』

『あ

『アホだ、アホがいるぞ』

『「じめんなさいね、ダン。私もそいつ頃つわ』

『う、うるせー！ 勝てばいいのだから勝てばー 全員奮起せよー・
セグラントは俺がやるー』

ダンのヤケクソ混じりの言葉に彼のチームメイトも呆れながらも従う。

少し間抜けな所が目立つが、それでもダン・モロレルという男が優秀であるという事を知つてゐるからである。

『Hティ、モニカ！ ダンは俺がやる。後は任せる』

『なんだかんだ言つて相手してやるのな。フクロにすれば早いのに』

『しょうがないわね』

セグラントの言葉に従い、Hティとモニカも隊列を崩し各個撃破を行つ。

勝負は一瞬でついてしまつた。

ダン率いるロチームはダン以外もそれなりに優秀なのだが相手が悪い。

ダンのチームメイトはトンファーを構えながら急接近してきたモ

一気に反応できず「クピットに直撃を受け、エディの正確な射撃により四肢を破壊され、両機とも大破扱いとなつた。

『セグラント、こりちは終わったわよ』

『わかった。……だそなだが？ ダン』

『ぬうう。まだだ、まだ私がいる！ 私がお前達全員を倒せばいいのだ！』

ダンはそう叫ぶと、ランスを構える。

セグラントもそれに合わせランスを構えた。

両者の距離は約30m。

先に動いたのはダンだった。

『ゆくぞ！ セグラント・ヴァルトシュタイン！ 我が槍を受けて見よ！』

ダンはセグラントの機体の「クピットを狙い、真正面から突撃して来る。

それを見たセグラントはランスを思い切り振りかぶり、ダンに向け、投げた。

『なあ！』

『はっはあ！ 僕が真正直に受けれるかよー。』

ダンは飛来してきたランスを構えていたランスで弾く。

ランスを弾いた事でダンの機体姿勢が崩れ、「クピット部分がガラ空きとなつた。

セグラントはガラ空きとなつた「クピットをナイトメアの拳で思い切り殴つた。

ダンの機体が大破扱いとなり倒れた。

「勝者Bチーム！ 全員降りていいでー！」

教官の声が訓練場に響き、模擬戦は終了となつた。

セグラント達が機体から降りると、教官がやつてきてセグラントを見る。

「あいかわらず荒々しい戦い方だな。だが、今回は何も壊さなかつただけ良しとするべきか」

「はつはつは。俺だつていつも壊す訳じゃねえ……です」

ゴドン。

セグラントがそつ答えると同時に嫌な音が響いた。

その場にいた全員の目が音の出所に向く。

それはセグメントの乗った機体の拳が壊れ、地面に落ちた音だつた。

『…………』

「あれ？」

「あ～、やつぱつな。ただのグラスゴーでんな戦い方すればあるよな」

「また私まで反省文か……」

「……セグメント・ヴァルトショタイン。やはり貴様は訓練の度に何かを壊さると氣が済まんようだな」

「いや、そんな事は……」

「」の『壊し屋』が「」の件は君の保護者にも伝えておへ

「つかつか！ 教官、何でもしますからそれは勘弁して下れこー。」

「な、な、な、なと卒業してくれ……」

教官は心底疲れた顔を浮かべながらそいつに答つた。

ちなみに後日、セグラントの下に父であるビスマルクから手紙が届いた。

手紙には短くこう書かれていた。

『覚悟しておけ』

模擬戦（後書き）

なんだか獣の異名がついて前に別の名前がつっていました。さて、軍学校編はそんなに長くやる予定はないのだとどんどん進められれば、と思います。

今回出てきたダン・モローレル君ですが、フロムな脳を持つている方なら一瞬で元ネタを理解出来ると感じます。

それではまた次回。

感想、レビュー、批判、なんでもお待ちしています。

卒業（前書き）

今日は短いです。いやあやつぱり新しい小説は楽しいんですけど大変ですね。

これから長くしていければと思います。

卒業

どのような場所であれいつでも学校と名のつゝ場所には必ずある行事がある。

そう、卒業式である。

卒業式、それは学ぶべき事を学び、新たな場で羽ばたこうとする若者達を送り出す行事である。

それは此処、ブリタニア軍学校でも変わらない。

ただし、ブリタニア軍学校では卒業と同時にどこかの戦場へと送られる事となるのだが……。

もちろん成績が優秀である者は激戦区へ回される。

卒業する者を何処の戦場に送るか、それを決めるのは教官達である。

彼等は卒業する生徒一人一人の今までの成績を見て、会議で決めていくのである。

「それでは、次の生徒は……。セ、セグラント・ヴァルトシュタンです」

「ああ、つこにコマイツの番か……」

「一番ビックリするべきか悩む生徒が来てしましたね」

「成績は優秀なのだ。ただ戦い方や性格が、な」

「養子とはいえ、ビスマルク卿の子息なのですがね。ここまで親に似ないとは……」

「まあ実力は申し分ないどころか、すぐここでも前線に出れる腕なんだ。ここはEJで良いのでは？」

「……EJか。だが、彼は悪くいえば獸だ。EJの前線指揮官にそのまま押しつけるのはな」

「ならば、こうしたのはビックリしちゃうか」

一人の眼鏡を掛けた教官が立ちあがり、モニターに一人の人物に写真を写します。

そこにはモニカとエディの写真が貼られていた。

「確かこの二人は……」

「はい、セグラント・ヴァルトシュタインのチームメイトです」

「なるほど、彼女等もEJに送り、そのまま彼と組ませるのか」

「その通りです。幸い彼女等も優秀ですから。EJに送つても足手まといにはならないでしょ?」

「確かに。……それでは決議を取りつい。この案に賛成の者は挙手を

結果は満場一致だつた。

この時、モニカとエディが同時にくしゃみをしたのはこの件とはまったく関係がないはずである。

モニカは自室で寝転びながら、小説を読んでいた。

小説の内容は至つて普通の恋愛小説であった。

その小説はかなり読み続けられた物のようで所々に汚れは見えるが、傷は無い事から大事にされている事が窺える。

この小説は彼女が軍学校に入る前に持つてきた唯一の本であり、彼女の数少ない私物である。

軍学校に入つてからも、彼女は暇を見ては幾度となくこの小説を読んでいた。

内容は主人公の女性が一人の男性と恋に落ち、二人で様々な困難を乗り越え、最後には幸せになる。といったありふれた物である。

既に何十回と読んだため内容もほとんど覚えているのだが、それでも彼女は読み続けた。

モニカはこの小説を読みながらいつか自分もいつこつた恋がしてみたいと思っていた。

軍学校に入り、軍人になるとモニカもつい若き乙女だと言う事だ。

モニカは本を閉じ、白馬に乗った王子が自分を迎えて来るシーンを妄想してみる。

「やっぱ、いいわよねえ。私にもいつか出会いがあればいいなあ」

ふと、王子役を自分の周りにいる男性にしてみる。

Hディイ、白馬は似合つてゐるのだが、どこか軽薄そつた感じがするため却下。

ダン、却下。

最後にセグラントの事を思い浮かべた。

するとどうだらう、白馬が巨大な黒馬へと変わり、黒馬に乗ったセグラントが

「我のモノとなれい！」

と言つてきた。

「……強引なのは嫌いじゃないけど、アイツ程王子が似合わないのもいないわね。

とか何であんなイメージが浮かんだんだろ？……？」

乙女モードは頭を抱えながら、夜を過ごしていった。

「セグラント、お前は何で軍に入つたんだ？」

部屋で寛いでいたエディが突如尋ねてきた。

「……親父に入れられた。後は、そうだな……ぶちのめす為にだ」

「ぶちのめす？ 何をだよ」

「決まっている。親父をだ」

セグラントは自身の前に握り拳を作った。

セグラントの顔に獰猛な笑みが浮かぶ。

「親父をぶちのめすってお前の親父さんってナイトオブワンドだろ？」

それって帝国最強になるって事か？」

「最強になるかどうかは知りねえが、それも悪くない」

「つまむ、何この子堂々と親父をぶちのめす宣言してんよ」

エディは軽くセグラントから距離を取る。

しかし、彼の顔にも笑みが浮かんでいた。

「見てろ、俺は必ず親父に勝つてみせる」

「へえへえ、期待せずに見せてもいいとするや」

「ふん、俺が勝った暁にはお前を俺の部下にしてやるぞ」

「マジで？ じゃあ今のうちに恩売つといった方がいいかな」

「言ひてろ」

部屋の中にセグラントヒューディの笑い声が木靈する。

エディは分かっていた。

セグラントは口では親父をぶちのめすと言っているが、本心では父の為ならば命をも捨てられるであろうことを。

まあぶちのめしたいのも本心なのだろうが……。

本当に「マイシは面白」。

「まあ、軍学校を卒業すればバラバラになるだらうからな。お前が
どうなるか楽しみにわせて貰つた」

そして、卒業式の日

セグラント達は軍学校の講堂にて教官や校長の話を聞いていた。

「以上で私の話を終わりにします。オール・ハイル・ブリタニアー！」

『オール・ハイル・ブリタニアー！』

「次は、卒業生の配属先を発表する。クロイツェフ・ゴーダン、エ
リアー、」

次々と卒業生達の赴任先が発表されていく。

」の順番は優秀な者ほど最後にまわされる。

そして、遂に

「セグラント・ヴァルトショタイン、エティ・マクシミコアン、モニカ・クルシェフスキー」

「おい、何で同時に呼ばれるんだ？」

「知るか」

「以上三名はモニカへの配属とする」

教官の言葉にモニカは苦笑を浮かべ、エティは何処か恥ずかしそうだ。

「昨日、あんな事言つちまた矢先にこれかよ」

「なんだか、そんな事になる気がしてたのよね……」

「また三人で組めつて事か」

「まあ、なんだ？ よろしく」

「」「へこむへこむ」

卒業（後書き）

なんかグダグダですいません。はあ、何か参考にした方がよそそう
だ・・・・・

初陣（前書き）

大修正をしました。少しは内容が濃くなつてればいいのですが……。

E.U.へと送られた三人は着任した事を報告するために司令官のいる場所へと向かう。

司令官がいる作戦本部では慌ただしく兵士が動き回っていた。

「失礼します。この度、戦線に配属されたモニカ・クルシェフスキーです！」

モニカが大声で挨拶したが返つて来たのは就任に対する返答ではなく怒号だった。

「第1-8小隊の反応ロスト！ 至急後詰を！」

通信兵の言葉を聞いた髭面の男が叫び返す。

「わかった！ 至急兵を送れ！ ……む、何だお前達？」

「ローディー司令、軍学校を卒業した生徒です」

眼鏡を掛けた副官らしき男が耳打ちする。

司令は眉間によっていた皺を解しながら、溜息をついた。

「まだ子供じやねえかよ。ああ、挨拶が遅れた。私の名はローディアン・ティガだ。

此処、対E.U.西方軍司令をやらせて貰っている。部下は皆ローディ

「司令と呼ぶ。

それで？」ここに派遣されたってことば腕は立つんだよな？」

子供、と言われた事にモニカが顔をしかめたが、ローディーの鋭い眼光に

モニカとローディーは若干気圧された。

セグラントは一人気圧される事なく、一步前に出た。

気圧される事なく前にでたセグラントにローディーは感嘆を覚えた。

ここに配属された新兵は皆、ローディーの威圧に気圧される為である。

「……ほう。お前、名前は？」

「セグラント・ヴァルトシュタイン」

「ヴァルトシュタイン？ ビスマルク・ヴァルトシュタイン卿の縁者か？」

「息子です。義理ですが……」

セグラントの答えを聞いたローディーは厳つい顔に笑みを浮かべた。

「ふむ、義理か。だが、そんな事は関係がない。ここは戦場でお前の父はナイトオブワーンであるということだ。となれば、自然とそれ相応の戦働きが求められる。わかるな？」

ローディーは笑みを浮かべながら語りつてくれるが、その口は笑つておひずじつ言つていた。

『お前は役に立つか?』と。

「田を逸らせなかつた事は評価できる。……ローランド。」

ローディーはセグラント達から視線を放し、部下を呼んだ。すると先程の副官のしき男が前に出てくる。

「はい」

「ここにナイトメアを回せ!」

「分かりました。機体はどれを?」

「サザーランドが格納庫に残つていた筈だ。それでいい」

「分かりました。挨拶が遅れた、私はローディー司令の副官を務めているローランド・ノーザン。

階級は中佐だ。ついて来い。」

「ローランドはセグラント達を格納庫に案内しながら、現在の戦線の説明を始める。

現在、前線は大局的に見れば勝つているのだが、やはり地の利は向こうにあるようだ、所々で戦線に綻びが出来ているらしい。

そして、ローディーが司令を務めるこの地域は最前線ではないが、補給線があるため敗走は許されない、との事だった。

セグラント達は最初に補給線近くの守備隊に回されるようで、そこでの働き次第では最前線に送られる、との事だ。

「ここまで何か質問は？　ないなら説明を続ける。一先ず君達の階級は少尉とされる」

「ちょ、ちょっと待ってください。私達は配属されたばかりの新兵ですよ？」

「いきなり尉官クラスの待遇ですか？」

「それに関しては此処が戦場であると言う事が関係してくる。この地域は最前線程ではなくとも、激しい戦闘が続いている。戦闘の度にある程度の死者が出る為、尉官の数が少ないのだ。それに君たちはナイトメアの操縦ができる。ナイトメアは現在の戦争の花形とは言え、それを操縦できる人間はここでは限られているからな。……理由としては以上だ。疑問はあるか？」

「コーラッドの説明にとりあえずの納得を示したが、モニカなどは戸惑いを隠し切れていない。

「……モニカ・クルシェフスキ少尉、そう深く考えるな。考えすぎると潰れるぞ」

「は、はい」

「うむ。さて、ここが格納庫だ」

三人が格納庫に入ると、そこには数多くのナイトメアが鎮座していた。

中には腕が吹き飛んでいる物や修理されている物もあった。

「一ラッシュは格納庫の奥に鎮座している三機のナイトメアの前で止まる。

「これが、君達に支給されるナイトメア『ザガーランド』だ。武装は基本的にはグラスゴーと変わらんが、それ以外は別物だ。武装に関する変更をしたければ整備班、もしくは博士に言つよう。何か質問は？」

ヒテイが拳手し、尋ねる。

「一ラッシュ中佐。博士とは？」

「一応、ここにいる人物でナイトメア開発に関わっていた人物だが、いよいよなので無理に会う必要はない」

「一ラッシュは博士と呼ばれる人物に余り会わせたくないのか会話を手短に終える。

そんな一ラッシュの様子にヒテイも深く聞く事はしなかった。

「他に質問はないな？……よろしい。では早速だが働いて貰つ。いいな？」

「…………」

三人が配属されたのはコーラッグの通りおり最前線ではなかつた。

セグラント達が配属されたのは司令本部からそう遠くない位置であり、此処にはセグラント達の他にも4機のナイトメアと12両の戦車で編成された小隊が配属されていた。三人は第25小隊として登録されていた。

三人は周囲を警戒しつつ通信で会話をしていた。

「いきなり最前線に行けとか言われなくて良かつたわ

「まったくだ。それでも此処が戦場だって事を実感出来る。さつきから背中に汗をかきっぱなしだからな」

モニカとエディが会話をしている中、セグラントだけ会話に参加していなかつた。

「セグラント？ サッキから静かだけどどうしたの？」

「まさか緊張してんのか？」

「……違つ。何か」ヒツヒツしゃがる

「ピコピコ？」

エディはセグラントが何を言つてこのか理解できずモニカの方を見るがモニカも肩をすくめている。

「この感じはアレだ。親父との喧嘩の時に親父が本気の一撃を出す時と同じ感じだ」

「おい、セグラント？」

セグラントが何かを考え込んでいた時、通信が入った。出所は周囲の警戒に出ていた友軍のナイトメアからだった。

『「ひから第19小隊！ 周囲警戒中EHS軍の奇襲を受けた！ 至急援護を……つ。ああああああ……』』

通信は切れ、何も聞こえなくなった。

通信を聞いた部隊長はその場にいる全員に指示を出す。

「奇襲だと！？ EHSの奴等いつの間に……！ 大至急本部に伝えろ！ 本部からの援軍がたどり着くまでこの場を死守するぞ！」

『イエス・マイローデー』

「隊長！ 敵軍が目視できる距離に入りました！ 目視出来る限り

で敵ナイトメアが12、戦車が20です

「よし、戦車隊、砲準備！ 目標、敵ナイトメア……撃えええ！」

隊長の指示に従い、戦車隊が砲撃を開始した。戦場に砲撃音が響き渡る。

セグラントは自分の手が汗でぬめり始めるのを感じた。

「砲撃止め！ 敵軍は！？」

「ある程度損害は与えられましたが敵ナイトメア8機健在！ どうしますか？」

「ナイトメア隊で行く！ いいか、俺達の役目は援軍が来るまでの間ここを死守することだ。

深追いはするなよ！ 全機、俺に続け！」

部隊長のナイトメアがEIS軍に攻撃を開始する。

それに続き、セグラント達を除いた三機のナイトメアが続く。

セグラントの言葉にエディは即座に対応したが、モニカが動かない。

「モニカ！ エディ！ 倘達も続くぞ！」

「モニカ！ どうした！」

「……ま、待つて。手が震えて……」

モニカは初めての戦場の空気で完全に呑まれていた。

しかし、これはモニカだけでは無かった。

エディの顔からは血の気が消えかけているし、セグラントの手も汗で濡れたままである。

「モニカ！ ジジで動けなければお前は一生戦えない！ 怖いのは俺達も同じだ！」

「同じ……」

「そうだ！ 震えたままでいい、行くぞ！ フォーメーションはいつも通りだ！」

セグラントはモニカを鼓舞し、ランスを構える。

「やれやれ。モニカ、行こうぜ」

エディは無理やりに笑みを浮かべ、アサルトライフルを構える。

軍学校で長く組んできた一人が獲物を構えるのを見て、モニカは一度口の頬を強くはたき、気合いを入れる。手の震えは止まっていた。

「ありがとう。エディ、セグラント

「……行けるわー」

「おおっしゃ！ 行くぜーー！ 田標はーー時方向の敵ナイトメアー！」

「「」「解ーー」」

セグランントが吼え、ランスを構え、田標としたナイトメアに正面から突っ込んでいく。

敵のナイトメアは接近してきたセグランントに気づき、アサルトライフルで撃とうとする。

「やせるかよー！」

敵の射撃が開始される前にヒューティが敵の足元を撃ち、態勢を崩す。これにより照準がずれたのか、敵ナイトメアはセグランントから遠く離れた位置を撃つた。

その間にセグランントがランスが当たる距離にまで即座に移動し、敵のコクピットを串刺しにした。

「まず一機！」

横から別のナイトメアが迫る。

セグランントはその存在に気づいていたが、ランスをコクピットに深く刺してしまった為、抜けない。

「もうひとつだーー！」

「やるねえよー！」

セグランントはランスから手を放し、振り向きそのままに接近してきていた敵ナイトメアを殴る。

殴られた事により、態勢が崩れた隙にモニカがザザーランドに装備されていたスタン・トンファーで「クピットを潰した。

「ナイスだ！ モニカ！」

「当然！」

「隊長達の方はどうなった？」

エティがレーダーを見るが、辺りに機体反応は見えない。

そう、見えないのだ。

敵だけでなく味方も。

その時、レーダーに新たな反応が現れた。

それは本部からの援軍ではなくE.U側の援軍だった。

「お~おい、嘘だろ？」

エティがそう漏らすのも無理はなかつた。

E.Uの援軍は目視で確認できるだけでも、ナイトメアの数は10を超えていた。

しかも後ろから土煙が上がっている事からまだいるのだろう。

「これはピンチかな？」

「それでも諦める訳にはいかんだり」

セグラントはそういつと、突き刺したままのランスを引き抜き構える。

「それもそうね」

モニカも続き、スタントンファーを構えた。

「だよなあ。だけど数は圧倒的にこっちが不利だぜ？ もう少し同じようにはいかねえだろう。どうする？」

エティもアサルトライフルを構えながらセグラントに尋ねる。

すると、返答はセグラントからではなく、通信から返ってきた。

『私達に任せればいい』

「え？」

「む？」

「誰だ？」

『ああ、私はナイトオブナイン、ノネットだ。これからEICO軍の掃討を開始する。お前達も加われ』

「ナイトオブナインー!?」

「豪華な援軍ね」

「それだけ此処は重要なんだろ?。分かりました、これより私達は貴方の指揮下に入ります」

『うん。……全機、敵を駆逐せよー。』

『イエス・マイロードー!』

初陣（後書き）

「どうでじょひか？」やはり戦闘描写と云ふなんと云ふが上手に書くのは難しいですね。

馬鹿と馬鹿が出会った日（前書き）

遅くなりました。投稿します。
今回は戦闘はありません。

馬鹿と馬鹿が出会った日

初陣を終えたセグラント達三人は司令であるロー・ティイーに報告するため、作戦本部へと歩を進めていた。

個々に違いはあるが、三人とも疲れていたが、それを表に出す事はしない。

例え、新兵といえど此処でいかにも疲れました、といった態度をすればこれから先の戦闘で使って貰えるか分からなくなるためだ。

「ここは戦場であり、使えない者に与える軍備など存在しないのだ。

セグラントは扉をノックし、声を掛ける。

「セグラント・ヴァルトシュタイン、モニカ・クルシェフスキ、
エディ・マクシミリアン。

今回の戦闘に関する報告に来ました」

「うむ、入れ」

中からロー・ティイーの許可が下りた為、三人は中に入っていく。

作戦本部には司令であるロー・ティイーの他に、副官の「コーラッド、そして一人の女性がいた。

女性はローディーに「云々何かを言つと、部屋から出でていった。

ローディーはセグラント達の方を向いた。

「初の戦闘」に苦労だつた。既に被害報告やその他の報告は受け取つてゐるが、

諸君等の報告も聞こいつ。様々な立場から報告を受ければそれだけ見える物があるからな」

ローディーはそう言い、セグラント達の報告を聞く。

セグラント達は戦闘で起きた事象を可能な限り全て報告した。

それを聞いたローディーは一度大きく息を吐き、天井を見上げる。視線をセグラント達に戻し、言つた。

「ふむ。私の方に先に上がつてきている報告と大差はない、か。それにしても君達を除く全てのナイトメアが大破か……。手痛いな。コーラッド、一応こちらに新たなナイトメアを回してもらつよう上申しておいてくれ」

「了解しました」

「さて、次に君達の事だが……。初陣で生き残つたという事はある程度は使えるということだらう。

そして、所属する部隊が壊滅してしまつた事を含めて、君達には異動してもらつ。

詳しい事はこの紙に書かれている……以上だ。退出して構わない」

セグラント達が部屋を出ると、先程部屋を出た女性が立つていた。

「よ、お疲れ様。聞いたよ、初陣だったそうじやないか。それだけ戦えてたんだ、

これから期待させてもらひつよ」

目の前で口早に話す女性こそ、先の初陣で援軍として来た人物であり、

皇帝直属騎士ナイトオブランズのナイトオブナイン、ノネット・エニアグラムだった。

「エニアグラム卿、先程は援軍ありがとうございました」

エティが礼を述べ頭を下げるのに追従し、セグラント達も頭を下げる。

「なに、あの場所は戦場の命綱でもある補給線だからな。援軍に行くのは当然だ」

取り敢えず頭を上げる、と言いノネットは話を続ける。

「余り見ていなかつたがお前達は中々に連携が取れているな。それに個々の力量も高い。

……そいいえば名前を聞いてなかつた。名前は?」

ノネットに名前を聞かれ一瞬三人は面食らつたが、名前を名乗った。

「自分はエティ・マクシミリアンです。階級は少尉です」

「私はモニカ・クルシェフスキイです。階級は同じく少尉です」

「セグラント・ヴァルトシュタインだ……です。階級は一人と同じ少尉……です」

三人の名を聞いた後、ノネットはセグラントの方を向いた

「お前がビスマルク卿の息子か！ いやあ、それにしてもデカイな！」

「……」

「うん、それに何処か獅子を彷彿とさせるな」

ノネットの話す内容にモニカとエディも吹きだす。

「そうですね、そう思いますよね」

「俺も最初マイツと同室になつた時は焦つたものです」

「お前ら……」

セグラントの米神に青筋が浮かぶ。

「ふふ。お前達、面白いな。まあ、これからはよく会うだろ？ 最初に言つておくが、これから厳しくなるぞ。ついてこよー！」

ノネットは不敵に笑つた。

「あの、どうこう」とですか？」

「聞いてないのか？ お前達の異動先は私と同じ最前线だ」

サラリと言われた内容にモニカやエーティの顔が蒼白になる。セグラントは一人好戦的な笑み浮かべていた。

「まあなんだ。そつちの紙にも書かれているだろうけど最前線程武勲を立てられる場所はないぞ。
それとこれはアドバイスだが、自分の機体を自分の性に合つよつて力スタムしてもらえ。
整備兵に頼めばやつてもらえるだろうから」

それじゃあな、と言いノネットは手を振りながら去つていった。

残された三人はしばしその場にとどまっていた。

「取り敢えず、格納庫に行くか」

どのような力スタムをして貰おうかと話しながら三人は格納庫にある自分のKMFの前まで行つた。

しかし、やがて一機のザザーランドしかなかった。

無くなっているのはセグラントのザザーランドだった。

「セグラント、貴方のザザーランドは？」

「見事に何もないな」

「俺のザザーランドが……」

セグラントは横を通りうとじていた整備兵を捕まえ、尋ねた。

「俺のザザーランドがないのだが……」

「あ。あのザザーランドのパイロットでしたか。貴方のＫＭＦは先程、その……」

整備兵は言ひ畢ひそひて顔を逸らす。

追及しようとした時だった。

「お前さんのＫＭＦならいいだだ

初老の男性がセグラント達の方に走ってきていた。

初老の男性は身の丈は180程で、年は50代後半ぐらいだらう。くたびれた白衣を着ていた。

「あなたは？」

「俺の名前はクラウン。クラウン・アーキテクトだ。」
「では博士で通ってる。

まあ、俺の事なんてどうでもいい。今はお前さんの機体の事だ」

ついでここ、と告げクラウンは歩き始めた。

セグラント達は顔を見合わせ、取り敢えずついて行くつもりでクラウンを追った。

クラウンは格納庫の奥にある扉に入つていった。

三人が続いて入ると、そこは様々な機器が置かれた広い部屋だった。

奥にはKMFを置く為のハンガーが一個あるが、それには現在黒い布が掛けられており、KMFの姿を見る事が出来ない。だが、布の膨らみ具合からKMFが置かれているのは間違いないかった。

「おい、俺のザザーランドは？」

「来たな。それではお披露目といひつい」

「駄目だコイツ！ 人の話を聞きやがらねえ！」

クラウンはセグラントの叫びを無視し、ハンガーに掛けられていた布を思い切り引っ張った。

布が外れ、ハンガーの中が露わになる。

そこには予想通り一機のザザーランドが鎮座していた。

「なんだ、アレ」

「ザザーランド、よね？」

「俺のザザーランド……」

だが、鎮座していたザザーランドは初陣で使った時とはその様相を大きく変えていた。

全体に追加装甲を取り付けられており、全体的に大きくなっていた。

だが、それよりも目を引くのが腕であった。

腕は装甲を追加したというレベルでは無く別物となっていた。

通常のザザーランドの腕と比べ遙しくなっていた。

何よりも目を引くのが手だろう。

手は従来よりもかなり大きく造られており、爪は獣のソレに似ていた。

「これは……」

「俺は常々思つていた。ＫＭＦ戦で何故手が使われないのか、と

「それは銃火器を手に取つた方が早く敵を倒す事が出来ますし、な

により KMF の手は脆いですから」

「そう！ 銃火器の方が威力は高いし、脆い。しかし銃火器は弾が切れれば撤退して補給に行かなければならぬ。それはいい。だが、孤立している場合はどうなる？ 当然補給になど行けはしない。そこでジ・エンドだ。そこで俺は考えた。武器が無くとも戦えるよう出來ないものか、と。

このままでは拳の強度と攻撃力に問題がある。ならば、と思い造り上げたのがこの腕、『試作型ビーストアーム』だ！」

「ビーストアーム。まんまだな」

「というかこんなに大きな手じや通常の銃火器が持てないんじやないかしき」

エディとモニカが思つた事を口にすると、クラウンはチッチと指を振りながら言つた。

「ビーストアームには手甲部分にアサルトラフルを取り付ける事が可能だ。本来ならば専用の銃器を装備させたいがザザーランドの積載量では無理があるのでな。さて、このビーストアームだが、一番の見どころは敵を『握り潰せる』所にある。ただ殴つて破壊するくらいなら通常の KMF でも可能だからな」

「それで」

「なんだ？」

「何故、俺のザザーランドなんだ？」

セグラントの問ごとにクラウンは簡単な事だと言ひ、説明を始めた。

「お前のザザーランドを見た時に気づいたのだ。コイツのザザーランドは拳で敵KMFを殴った、とな。ザザーランドの手は脆い。なのに拳はそこまで損傷していなかつた。つまり、KMFで殴る事を多用し、慣れていると思つたのだ。その後はお前のザザーランドを此処まで運び、腕をビーストアームに換えたといつ事だ」

「ああ、確かにコイツはよくKMFで殴るからなあ」

「軍学校の模擬戦でも結構やつてたわね」

「やはつやうか…」

「くそ、事実だから何も言えん」

「さて、セグラント君。このビーストアーム使つてくれないか？君が使つのが一番合つてゐる気がするし、私はデータを取り、更にこれを進化させたい。どうだうか？」

クラウンの言葉にセグラントは苦笑しながらこつた。

「答えるまでもねえ。使わせて貰ひ。コンヤブトを聞いてる限り俺の性に合つてるからな。」

「こつかもう取りつけてる癖に聞くんじやねえよ」

「それもそうか。それでは見事ビーストアームを使いこなして見せてくれ。それにしてもコレを

本当に使おうとする馬鹿が現れるとは……」

「鳴鹿は余計だと想つたが？」

「いや、咲良でもなこでしょ」

「やうな。こんな腕使いなれて鳴鹿と喧われても仕方ないわ

「……ひつ」

「セグウント船」

クラウスはセグウントの名を呼び手を玉す。

「何だよ?」

「握手だよ。俺と並んで鳴鹿と並んで鳴鹿が出来た事に

「ふん」

馬鹿と騒鹿が出会った日（後書き）

今日は博士登場！ ロイドじやなくてすんません。
次回はかなり物語を進めようかと思っています。

それでは失礼します。

ヒロインが決まりん……

泡壁、響き渡る時（前書き）

今回で物語が少し進みます。それでは、どうぞ。

クラウンによつて『えられた試作型ビーストアームの性能は凄まじいの一言だつた。

従来の腕よりも大幅に増した耐久力と馬鹿げていると言つても過言ではないパワー。

エディが射撃で援護し、セグラントが吶喊し、モニカがあぶれた敵を討つ。

これまでの戦法と変わりは無いが、相手に与える印象は大きく変わっていた。

ビーストアームにより、コクピット」と握りつぶされる。

普通、KMF戦において戦つていて握りつぶされるとあり得ない。しかし、現に握りつぶされたコクピットを見た相手方の恐怖は計り知れない物だつた。

田の前で戦友が脱出することもなく潰されていく光景を田の端た
りにしたE.Uの兵士は

我先にと戦線を離脱していった。時には仇を討とうと、向かってくる者もいたが、そういった者は連携がなつておらず、結局はビーストアームにより同じ末路をたどる事となつた。

しかし、セグラントとビーストアームの相性が合つていた事も

あり、

セグラントを筆頭にエディ達は最前線で戦果を上げ続けた。

「この活躍により、彼らは階昇進しており、今ではセグラントは少佐。

モニカとエディは大尉の位にまで上がっていた。

セグラント達の戦果を聞いた対EJ西方司令官ローディーはこれを好機と見た。

名前には価値がある。

それは本名ではなく異名などである。

例をあげるならばナイトオブラウンズが良い例である。

ナイトオブラウンズが戦場に出る。

それだけで相手方にある程度の警戒と威圧を与える事が可能なよう

に。

その名を出すだけである程度の効果を望めるように。

このEJ戦ではナイトオブラウンズも参加しているが、彼等は基本的に総司令官の近くで戦っている為、おいそれと援軍には来てくれない。かつてセグラント達を救いに来てくれた時とて、たまたま近くで戦闘を行っていたからに過ぎない。

そこでローディーはセグラントにその役目を担つて貰おうと考えたのだ。

勿論、ナイトオブラウンズ程の効果は期待していない。だが、セグラントの戦い方が独特であり、相手方に恐怖を与えているのもまた事実。

ローティーは副官である「一ラッシュ」と共にこの案を進めようとしていた。

その為、何か良い異名はないかと思索していた時だった。

「司令、特に異名を考える必要はなさうです」

「ん？ どうこういとだ」

ローティーの間に「一ラッシュ」一枚の紙を差し出す。

それはE.Uの通信を傍受したものを書いた紙であり、そこにはある一文が書かれていた。

それを読んだローティーは口角を上げ、笑った。

「ははは、これは良い。なんとも“らしく”名前がついたものだ」

「まつたくです。どうします？」

「当然、流せ。ある程度誇張するのを忘れるな

「了解しました」

「くく、それにしても付いた異名が……」

「ブリタニアの猛獸だあ？ なんだそりや」

セグラントはHトライから自身についていた異名に疑問の声をあげていた。

Hトライはセグラントを指差し、笑いながら答えた。

「そのまんまだろ。誰がつけたのか知らないが良いセンスじゃないか」

「アツよねえ。その髪型とか田つきとか、あげればキリがないわ」

モニカもセグラントの髪を指差しながら囁く。

「いやいや、それも理由らしいが一番の理由は違うや。一番の理由はお前の機体に付いてる腕のせいだよ。あの腕が獣の爪に見えるのと、握りつぶされた跡がまるで獣に喰いちぎられた様に見えるからじこ」

Hトライの説明にセグラントも納得せざるを得なかつた。

「なんの反論も出来ねえ」

「でしょ、うね。それにしても異名かあ。私も欲しいな」

「モニカにい？ 無理無理。だつてお前の戦い方つて地味だし」

「エディ、貴方には言われたくないわ」

エディとモニカはしばし睨みあつていたが、お互に不毛だと思ったのか視線を外す。

その様子を愉快そうにセグラントが見る。

この三人の集まりは傍目からみてもとても仲が良く、見ている方も微笑がつかぶ程だつた。

しばらく談笑を続けると、エディが話を変え、セグラントに聞いた。

「なあセグラント。お前の目的ってなんだ？」

「どうした、いきなり」

「いやな、ちよつと気になつてよ」

そう言いながらエディは頭をかく。

「前にも言つたが、親父をぶちのめすことが目的だ」

「ああ、それは聞いた。俺が聞きたいのはその後だ」

「後？」

「そ、う、ビスマルク卿を越えられたとして、その後はどうするんだ？」

「……考えた事がないな」

「そ、う、か。なら考えとけよ。自分が何をすればいいのか、何をしたいのかをよ」

そう言つたエディの顔は先程までと違い、至極真面目なものだった。

エディは常日頃からセグラントのこいつた所を気にしていた。

今は父であるビスマルクを越える事を目的としているが、それを成した後どうなるのか。
目的を達成したら腑抜けてしまつのではないかと。それが不安だった。

故に、聞いたのだ。後の事を。

そんなエディを疑問に思つたのか、セグラントは尋ねた。

「どうしたんだ、エディ。そんな事を聞くなんてよ」

エディは顔を真面目なものから笑い顔に変え、返した。

「べつに。気になつただけだつて。そうだ、もしやりたい事が

見つかんなかつたらよ、

俺と一緒に何かやろうぜ。うさつはハーレム計画とか、旅行とか、遊びまくろりうぜー。」

「そりゃあ良い。親父を越えたら、やつこつのも良い」

Hディの提案にセグラントは笑いながら賛同する。

「ちょっと、一応ここに女がいるのだからそつこつハーレム計画とか話すの止めてくれない?」

「「え、どこに元気な女がいるの?」」

「よし、そこに正座しろ」

モニカが怒り、セグラントとHディが笑う。

最終的には三人とも笑顔となり、笑い声が格納庫に響く。

その声はどこまでも楽しげで、彼らは一時ここが戦場である事を忘れられた。

E.Uでの戦いも佳境となつたこと。

戦果を上げ続けたセグラント達は最前線にて先陣を任せていた。

セグラント達の部隊編成はセグラント達をいたナイトメアが8機、戦車が20両である。

セグラント達が接敵してから既に三十分が経過している。

E.U側は鹵獲したKMFグラスゴーとサザーランドを中心とした部隊。

「ちつ、中々近づけねえ。近づけなきやビーストアームは使えねえ」

セグラントは「クピットで愚痴りながら射撃を行っていく。

「そつボヤくな、チマチマ削つていきやいいさ」

H.D.Iが返しながら精密な射撃で確実に敵の数を減らしていく。

しかし、敵は減るどころか増えていた。

後方から次々に増援が送られてきているためである。

「ちょっとまた増えたわよ！？　こいつは損害が増えても一方なの

に！」

モニカの言つとおり、既にセグラント達の部隊は半壊していた。

KMFは3機大破し、戦車に至つては半数が大破している。

その時だった。

「うわああ！　コイツら何処から現れやがった！　助けてくれえ！」

突如、右翼から敵KMFが2機出現した。

レーダーに映らないようにエンジンを切っておき、隠すようにため配置していたのだろう。

こういった時、攻める側と防衛する側の差が現れる。

EU側には地の利がある。

そのため、こういった伏兵が可能となる。

右翼から出現した敵にパニックに陥ったのか、辺り構わずアサルトライフルを乱射する。

「ちいっ、Hディあっちの援護に行くな！　援護頼むぞ！」

「おうー！」

セグラントは最高速度を出しながらEUのKMFにビーストアームを振るひ。

横面を思い切り殴られた敵KMFの頭は吹き飛び、地面に倒れる。コクピットも衝撃でほぼ潰れていた。

倒れたのを確認すると、セグラントはすぐに機首をもう一機の方

に向き、接近する。

敵方もアサルトライフルを撃とうとするが、エディの射撃により邪魔される。

そして、コクピットを握りつぶされた。

「おい、大丈夫か！」

「た、助かりました。ありがとうございます」

「礼は正面の敵をなんとかしてからだー！」

「は、はい！」

セグラントは正面の敵に向かおうとする。

その時、エディの目にある物が入った。

それはセグラントが最初に倒した一機だった。

頭を吹き飛ばされ、コクピットは潰れていたのだが中のパイロットはかろうじて生きていたようだ、

「クピットから這いでて、ロケットランチャーを構えていた。

その照準は後ろを向いているセグラントだ。

「エスの……跨りと勝利の為に……」

そして、ロケットランチャーからロケット弾が発射された。

セグラントも気づいたのか機首を後ろに回そうとする。

間に合わない！

エディは咄嗟に機体をセグラントの後ろに動かしていた。

「エディ！？」

そして、ロケット弾はエディの機体のコクピットに直撃し、爆発

セグラントは何が起きたのか理解できなかつた。

ロケット弾が飛んできて、対処しようとしたが間に合わなかつた。

直撃かと思った瞬間にエディが庇つた。

「ハーティー……？」お二、ハーティー。」

エディの名前を呼ぶが、返事は返つてこない。

自身の機体のレーダーにもエディの機体の反応はない。

セグラントが吼えた。

咆哮はその場にいる全ての兵士に聞こえるほどだった。

セグラントの機体が正面にいる敵に最高速度で迫る。

EUの兵士は全員、セグラントの咆哮に呑み込まれていた。

全機の手が一瞬止まる。

「あああああああああ！」

当たるを幸いにセグラントはビーストアームを振るい続ける。

巨大な腕が振るわれる度に敵機が吹き飛んでいく。

握りつぶされ、破壊され、吹き飛ばされていく。

その様にその場にいる全員が恐怖した。

いち早く恐怖から立ち直ったのはモニカだった。

彼女は味方に叫ぶ。

「敵は固まっている！ 全機、攻撃だ！」

その言語に現実に戻った味方はEUに攻撃を再開する。

程なくして敵は全滅した。

その中心にセグラントの機体は敵機の残骸やパイロットの血を浴びて、佇んでいた。

セグラントとモークは戦闘が終りると同時にヒュイの機体の下に走った。

「ヒュイ！ ヒュイ！」

「ヒュイ、目を開けて！」

セグラントとモークはヒュイを「クピットから出し、頭をかけ続ける。

ヒュイの腹には「クピットの破片が突き刺さっており、血が流れ続けていた。

「ヒュイ、バカヤロウ！ なんで庇つた！」

名前を呼びづづかると、ヒュイの目がひつすらと開かれた。

「セグラント……」

「ヒュイ！ 今、衛生兵が来る。死ぬな！」

「無理や……。自分の体だ、無理つてことぐらい分かる」

「そんな事言つな！ 僕が親父を超えたひ、僕と遊び通すんだろ！ 旅に出るんだろー？」

セグラントの瞳から涙が溢れる。

「泣くなよ……。猛獸の名が聞いて……呆れる」

「もうしゃべらないで！ 絶対に助かるからー！」

Hディは一度、大きく息を吸つた。

そしてセグラントの手を握る。

「セグラント、お前は牙になれよ……。親父さんを超えようと超えまいと……、俺たちの国に、大切な物に仇なす全てを噛み碎く牙になれよ……」

「ああ、ああ！ 牙にでも何にでもなつて見せる！ だから……っ

「ああ……、楽しみだ。目が、霞んできた……。セグラント、モニカ、楽しかったよなあ」

Hディの顔から生気が失われていく。

しかし、その顔に浮かんでいるのは笑顔だった。

今までの事を思い出して居るのだろうか。

モニカは首を振りながら、泣いていた。

セグラントもモニカも悟つていた。

友の命は死きてゆつとしていると。

ならば泣いてはいけない。

笑顔でこよひと。

「ああ、最高だった。だから、これからもそんな時間を続けてやる、悔しがつてひ、親友」

「最高の時間だったわ。だから、安心して眠つて、私たちは頑張るから」

セグラントモニーは泣きながら、無理やりに笑顔を作る。

「ああ……、面白かったなあ。最高だったなあ。あばよ、親友達」

ヒーリーの手が地面に落ちた。

「ヒーリー！」

「く、う」

ヒーリー・マクシミリアンはその短い生涯に幕を降ろした。

戦場跡に一つの泣き声が木靈する。

「俺は、お前が願った牙になろう。害なす全てを噛み碎く牙になろう。

だから、安らかに眠ってくれ……、最初にして最高の親友よ

咆哮、響き渡る時（後書き）

エティが死んでしまいました。彼の死を持つてセグラントに目的を
「えようと考えていましたので。父を超える、それだけではつまら
ないですからね。

ここから彼は頑張ります。

それでは、また次回。

ここですり抜けます。

最初、セグラントは親父のようなガチガチの騎士で、機体はスパロ
ボのスレードミルゲルにするつもりでした。この世界を使えばいけ
るかな、と思つたんですが、思いとどまり、現在のセグラントとな
つたんです。どちらのほうがよかつたかは私にもわかりません。

將令書と玉露ご（繪書也）

今日は戦闘はありません。
それではお楽しみください。

指令書と出会い

エディ・マクシミリアンの死。

彼の死によりセグラントとモニカの戦い方に違いが現れた。

セグラントは前のようにただ呐喊するだけでなく機を見ながら動き、
確実に敵機を討つ戦い方に変わり、モニカはセグラントの討ち漏らしを討つのではなく、

セグラントと連携を取りながら、挟撃の形で敵機を確実に狩っていく。

確実に討ち、傷を負わない彼らに味方は希望を、敵は恐怖を見出した。

E.Uとの戦争も佳境に入り、これからが本番になるとこいつ頃の出来事。

セグラントとモニカはローディーに呼び出されていた。

呼び出された要件に関しては直接伝えるとの事で知られていない。

二人は司令室へと続く廊下を歩きながら、話していた。

「急な呼び出しが何だったのかじり

「さあな、お前何かやった?」

「それで呼ばれるなら私ではなく貴方でしょ？ 貴方もそういう思いでしょ、エーテ……」

モニカはエーティに意見を聞ひにきて、止まる。

彼は既にいない。

わかつていた筈なのに。

つい、呼んでしまった。

泣きそうになる彼女の頭に手を乗せ、セグラントは言ひ。

「そんな顔すんなよ。俺たちはアイツが羨む程に楽しくやると決めたじゃねえか。

泣くなよ、泣くのは許されねえ」

モニカは頭に乗せられた手を軽く払い、

「なによ。貴方だつて泣きそうな癖に。それに知ってるのよ、貴方がこの前エーティの機体の前で泣いてたのを」

「なんで知つてんだよ！」

「え、本当だつたの？ 冗談で言つたつもりなのに」

「……知らん。わざと行くぞ」

セグラントは顔を赤く染めながらズンズンと大股で先に進んでい

く。

恥ずかしがる彼を見たモニカはクスリと笑い、彼に付いていく。

エディ、セグラントも私も決して忘れないから。

だから見てて。

私たちが進む姿を。

司令室の前まで来たセグラント達は扉をノックし、告げた。

「セグラント・ヴァルトシュタイン並びにモニカ・クルシェフスキー参りました」

「入ってくれ」

司令室から入室の許可が下りたので一人が入ると、ローディーが腕を組みながら椅子に座つていた。

彼の前には一枚の書類が置かれていた。

「司令、要件とはなんでしょうか」

モニカが尋ねると、ローディーは唸りながら答える。

「皇帝陛下からの命令だ。セグラント・ヴァルトショタイン並びにモニカ・クルシオフスキーア名を本国によこせ、との事だ」

皇帝陛下からの命令。

その言葉にモニカは固まってしまった、額から汗を垂らしながら、尋ねた。

「し、司令。私たち何か問題でも起こしましたか？」

「いや、起にしていない。現在のお前らの戦働きは上々だしな。お前らの活躍がなければ此処、西方の侵攻も遅れていただろう」

ローディーの言葉にモニカは一先ず安堵の息を吐いた。

「それでは、何故本国へと？」

「それなんだが、喜ばしい事にお前らをナイトオブラウンズとする、と書かれている。おめでとう」

「「は？」」「

喜ばしい事に、と言つて居るがローディーの顔は苦虫を噛んだような顔をしていた。

対して、ローディーから告げられた言葉にモニカとセグラントは固まっていた。

ナイトオブラウンズ、それはブリタニア帝国の軍事に携わる者全ての憧れとなる存在。

帝国最強を表す騎士達の集まり。

その名を背負う者に敗北は許されない。

ナイトオブラウンズの名が持つ意味を考えると、背筋に冷たい汗が流れる。

「司令、それは本当ですか？」

「本当だ。なんなら指令書見るか？」

ローディーが指令書をモニカに手渡す。

そこには確かにセグラントとモニカをナイトオブラウンズに任命する為、本国へ来いと書かれていた。

「俺たち、叔父貴……皇帝陛下に知られる程戦果上げたか？」

「今、聞き逃しちゃいけない単語が聞こえた気がするけど今は無視するわ。

そうよね、そこまで戦果を上げた覚えは無いわ。EJの重要な拠点を落とした事も無ければ、

特別な任務をこなした覚えも無いわ

「だよなあ」

「お前ら、自分がどれだけの事をやつているか覚えてないんだな。」「ラッシュ、教えてやれ」

「は。セグラント・ヴァルトショタイン並びにモニカ・クルシェフスキー両名が今まで撃墜したEUのKMFの数、312、EUの兵站基地破壊が8。確かに諸君らは重要拠点は落としていないが、我が西方侵攻軍がここまで速さを持つて侵攻を進められたのには諸君らの活躍が大きい。

この件は総司令官であるシュナイゼル殿下も高く評価している。納得したか？」

モニカは教えられた内容に啞然としていた。

「俺たち、そんなに壊しましたっけ？」

「壊してるんだよ。……お前さんの場合、ロクピットの操縦桿破碎數も

断トツで一位だ。どうやらたらEに派遣されて三ヶ月で5回も壊せるかね、

まあ、それは置いといて、おめでとうー 私もうれしいよ」

ローディーはそういうが、顔は笑っていない。

そんなローディーに「アーラッシュはいい。

「司令、喜ばしことこうなひせめて笑つてください」

「やうはいいが、いかうとして今は、お前たちに抜けられるのは厳しこのだ。

まだ、戦争は続いているのだから。一応、後任というか代わりの人間が派遣されるらしいがな」

ローディーはため息をつきながらそう言った。

ローディーとしても自らの部下からナイトオブブラウンズが一人も出るということを思うと一軍人として嬉しく無い訳がない。

しかし、ローディアン・ティガは一軍人であると同時に西方の侵攻において全ての兵士の命を預っている司令でもある。

その為、ここで西方侵攻において最も戦働きをしている一人が抜けるという事を考へると、兵士の生存率が下がってしまう。この事を考へると、苦虫を噛み潰したような顔になってしまふのも仕方ないと言え、仕方ないのかもしれない。

本国も一応、そこら辺は考へてはいるらしく、優秀な後任を送ると言つてきたのだが、ローディーからすれば役に立つか分からない新入よりも、セグラント達を残してほしいのだろう。

「そうなんですか？」

「ああ。ちなみにお前たちと同じように軍学校から直接送られてくる。名前はジノ・ヴァインベルグと、アーニヤ・アールストレイムだつたか。役に立てばいいんだが……」

ローディーは唸りながらそう言った。

そこまで言つて、ローティーは席から立ち上がり、セグラント達に手を差し出す。

「まあ、愚痴はここまでにしてよ。ここからは司令ではなくローティアン・ティガ個人の言葉だ。セグラント・ヴァルト・ショタイン、モニカ・クルシェフスキー。君たちの事を私は誇りに思う。おめでと！」

「「ありがとうございます」「

司令室を出て廊下を歩いていると、前から一組の男女が歩いて来るのが見えた。

男の方はセグラントと比べると低いが、それなりに長身でモデルの様な雰囲気の金髪の男。

女の方は小柄で、ピンク色の髪を揺らしていた。

二人はセグラント達に気がついたのか、彼らの方にやってきながら

「と言った。

「先輩方、初めまして。先輩方の後任と派遣されましたジノ・ヴァインベルグと言います。
それで、じつちが……」

「アーニャ・アールストレイム」

ジノは明るく挨拶をしてきたのに對し、アーニャは無感情に自身の名のみ告げた。

「ああ、貴方達が。ところで何で先輩なのかしら?」

「なんとなくです。軍学校は別とは言え、先輩方は有名でしたから
ジノの答えにモニカも得心が言つたよつて、なるほど、と呴いて
いた。

二人の会話が続いている中、セグラントが適当に相槌を打つてい
ると下からパシャリといつ音が響いた。

視線を下に向けると、アーニャがカメラをセグラントに向け、写
真を撮っていた。

「保存」

「ああ? いきなり何だ?」

「すいません。アーニャの奴、気になる物があると句でも[写真を撮
つちまうんです」

「……[写真は嘘をつかないから】

そう言つたアーニャの顔には悲しみの表情が浮かんでいた。

そんな彼女の頭に手を乗せ、適当にグシャグシャと撫でる。

「……！？」

「そんな泣きそうな顔すんな。お前の事はよく分からんが、まあなんだ。頑張れ」

「セグラント、なに言つてるので？」

「俺も分からん」

モニカのシッ ハミにセグラントは頭を搔きながら、答えた。

そんな彼の様子にモニカはため息をついた。

「まあ、いいわ。それじゃあ私達は行くわね。二人とも頑張ってね」

「死ぬなよ」

セグラント達はジノとアーニャに激励の様な物を送り、二人と別れた。

「いや、噂通りだつたなあ。セグラント先輩マジで大きい」というか、威圧感あつたなあ。

なあ、アーニャ？」

ジノはアーニャにやがて返つたが、反応は返つてこない。

彼女の方を見れば、アーニャはグシャグシャになつた頭のまま、フリーズしていた。

「アーニャ？　おーい、かえつてーーー！」

それから少しの間、ジノの声が廊下に木霊していた。

指令書と出会い（後書き）

どうでしょうか。エディを失った一人の心をうまく書けていればいいのですが。

そして、セグラント達のナイトオブランズ就任。ナイトオブランズになるための戦果ってこの位でいいのかな？ アニメだとよく分からぬからこの位かな、と思って書きました。なにか、こうすればもっと文章に厚みや面白さが出るのでは？

と思つた事があれば感想にて教えてください。隨時、修正していくつもりです。

それではまた次回。

叙任式（前書き）

近頃、こんなクオリティでいいのか、と不安に思います。

叙任式

新たなるナイトオブラウンズの任命。

この知らせにブリタニア帝国首都ペンドラゴンは賑わっていた。

新たにナイトオブラウンズに任命された二人の内、一人は帝国最強と名高いビスマルク・ヴァルトショタイン卿の子息であると言う事が賑わいに拍車をかけていた。

ナイトオブラウンズ叙任式は首都ペンドラゴンにてその圧倒的存在感を知らしめる宮殿内にある
謁見の間にて行われる。

セグラントとモニカの二人は呼ばれるまで此処で待機しているよう指示されていた。

一人の服装はいつもの軍服ではなく、儀典用の軍服に加えナイトオブラウンズの証とも言えるマントを羽織っていた。ナイトオブラウンズのマントは各々、色が違うためモニカは黄緑色。、セグラントは灰色だった。

二人は呼ばれるまでの間を雑談で過ごしていたのだが、そこで話題が各々のマントの色の話となっていた。

「私が黄緑で貴方が灰色、か。このマントの色って何か意味とかあるのかしら」

「さあな。だが、親父と似た色つてのは何となく嫌だ」

「あら、それはビスマルク卿の様な騎士になれって言ひ皇帝陛下からメッセージじゃない?」

「あの叔父貴がそこまで考へてゐるのかね」

セグラントは肩を竦めながらため息ついた。

そんな彼を見ながらモニカは以前から気になつていた事を聞こうとした時、

「セグラント・ヴァルトシュタイン卿、モニカ・クルシェフスキー

卿。時間です。

どうぞ、こちへ

叙任式の開始を告げに来た侍従に遮られた。

一人は肩を並べ、謁見の間へと入る。

謁見の間には皇帝の他にも錚々たる顔ぶれが並んでいた。

その中には当然の事ながらビスマルク卿の顔もあった。

二人は玉座の前まで礼儀作法に従い進み、跪き、頭を下げる。

玉座から皇帝シャルル・ジ・ブリタニアが立ち上がり、声をかける。

「セグラント・ヴァルトシュタイン、モニカ・クルシェフスキー。

汝ら、ここにて騎士の誓約を立て、
我が騎士として戦う事を願うか？

「「イエス、ユア・マジエスティ」」

「汝ら、私情を捨て、我、シャルル・ジ・ブリタニアの正義を貫く
為の剣となり、盾となる事を望むか？」

「「イエス、ユア・マジエスティ」」

一人は答え、腰にある儀礼用の剣を皇帝に捧げる。

剣を捧げる、すなわち忠誠を誓つという行為を持つて、儀式は終了を迎えた。

「よかろう。これより汝ら、セグラント・ヴァルトシュタインをナイトオブツーに、モニカ・クルシェフスキーナイトオブトゥエルブとしてナイトオブランズを迎える」

皇帝の宣言が終わると同時に謁見の間が大喝采に包まれる。

拍手する中には小さくだが、確かに微笑むスマルク卿の姿もあつた。

叙任式も終わり、謁見の間には皇帝シャルルビスマルク。

そして、セグラントとモニカが残されていた。

「さて、汝らに言つておく事がある。ナイトオブランズは各自専用機を作成する際に専門の

開発チームを用意する。開発チームに何か希望があれば言つが良い

皇帝の言葉に、モニカは全てを任せると言ひ、セグラントは、

「それだつた、でしたら一人呼んでもらいたい人物がいます」

「ほう。その者の名は？」

「クラウン・アーキテクトです」

ビーストアームを開発した自身と馬の合う人物を要求した。

「良かろう。その者をお前の開発チーム主任とする。これで吾からの話は終わりだ。

さて、セグラントよ。やるのか？」

皇帝の問いにモニカは首を捻るが、セグラントは獰猛な笑みを浮かべ、
ビスマルクも笑みを浮かべる。

「当然」

「ふつ、貴様がどの程度になつたか見てやる」

「え、あの？ 皇帝陛下、何が始まるのですか？」

モニカは恐る恐る皇帝に尋ねると、

「单なる余興よ」

イマイチ答えになつていない返答が返ってきた。

しかし、その疑問は直ぐに氷解した。

なぜなら、

「今度こそ死ぬよや、親父いいい！」

「10年早い！ そしていい加減礼儀と私の事を父上と呼ばんか！
馬鹿息子おおおー！」

セグラントとビスマルクの拳が交差した。

両者の拳はお互の頬に突き刺さつており、そこから一歩も動かない。

「え、ええええええ」

「はつはつは。拳がついに互角となつたか」

皇帝に至つては既に観戦モードに入つておつ、止めなれば微塵も無いようだつた。

「皇帝陛下、止めなくてよろしこのですか？」

「止める？ 何を馬鹿な事をいつておるのだ。ただのスキンシップであろうつ？」

「あれがですか！？」

「つむ。既に我にひとつは見慣れた光景よ」

そう言いながらカラカラと笑つ皇帝。

その皇帝の前では殴り合ひを続けるセグラントとビスマルク。

セグラントがボディを狙えば、それより早くビスマルクのジャブが入り、それを邪魔する。

またビスマルクが右ストレートを打てば、セグラントも渾身のストレートを返すといった様子で両者とも一歩も引く気配は無い。

そんな両者を何処か羨ましそうな表情で見ながら、

「それに、あの様に真正面からぶつかり合えば嘘が入る余地などあるまい……」

皇帝の最後の弦はセグラントとビスマルクの叫びでかき消えていった。

両者のスキンシップといつかの殴り合ひは10分程続き、勝者はビスマルクとなつた。

決め手となつたのは、

「まだまだだな！ もっと精進しろ、馬鹿息子」

といつやつつと共に繰り出されたパワー・ボムだった。

スキンシップといつかの殴り合いを終えたビスマルクは、いまだ倒れているセグラントに告げた。

「後日、お前たちの騎士としての力量を世間に知らせる意味も持つた御前試合が行われる。

本来ならば、ナイトオブランズの内、誰かが相手を務めるのだが、あいにく現在のナイトオブランズは私を除けば、ナイトオブフォーとナイトオブナイン、

ナイトオブテンしかいない上、彼らは戦場に送られている。そこで御前試合は異例だが、

お前たちでやつてもいい」

「それは、私とセグラントが戦つといつ事ですか？」

「それ以外に何かあるか？」

ビスマルクから告げられた内容にモニカの額に汗が流れる。

「安心しろ。騎士の力量を示すという意味もあるためコイツの機体に付いている

馬鹿げた腕は通常の物に変更される。存分に戦うといい」

それだけ告げ、ビスマルクは皇帝と共に、消えていった。

残されたモニカはセグラントの顔を見ながら、

「ゴクピットだけは殴り壊さないでね」

叙任式（後書き）

皇帝とかビスマルク卿がなんかおかしな感じだ。

次回は御前試合と再びのマッドです。まあランスロットが登場するまでは専用機が登場することはないんですけど。

それではまた次回。

御前試合と帰ってきた馬鹿（前書き）

今回は御前試合です。戦闘描写って難しいですね。当然ですが。

御前試合と帰ってきた馬鹿

練兵場の横にあるKMF格納庫では現在、数人の整備兵が働いていた。

「くそ、もうすぐ御前試合が始まちまつ」

「ああ、観たかったなあ」

「そー、愚痴をこぼすな！ 恨むなら抽選に外れた自分を恨め！ そら、次だ！」

愚痴を零す整備兵に整備班長の雷が落ち、彼らは慌ただしく手を動かしていく。

彼らの目の前にはセグラントのビーストアームが吊り下げられていた。

「それにしても、この腕。ビーストアームだっだけ？ なんかこう鬼気迫る物を感じるな」

「セグラント卿専用装備だから当然だろう。そういうえば、これEJに派遣された奴から聞いた話なんだけどな。

セグラント卿の武勇伝というか噂なんだが、セグラント卿が先陣を任された時ってのは殆どの兵士は近づかないらしいぜ」

「くえ、そりやまたびひじて」

「怖いのさ」

「怖い？」

「さう、セグラント卿の戦い方がや。」この馴鹿げた腕で敵機を握りつぶすそうだ。

当然、パイロットは脱出出来ない。だから、飛び散るのを「話をするすめる整備兵はそこで一度、言葉を切り、相方を齧かすかのように手を伸ばす。

「飛び散るって、何がだ」

「わかつてゐるだろ？ 敵パイロットの血とかKMFのオイルさ。それが飛び散つて、セグラント卿の機体を朱に染めていくらし」

「ゴクリ、と喉がなる。

「それは、凄いな」

「ほれ、お前の後ろにある赤い跡も……」

興が乗つたのか、さらばに齧かすかの様に後ろを指さしたといふので、

「馬鹿な話をしているんじゃない！」

整備班長の拳骨が落ちた。

「す、すいません。でも、この話は本当ですよ」

「それでも、それは俺たちの為に戦ってくれてるから出来るんだろうが！」

俺たちは感謝しそうれ、恐れるなどあつてはならん！」

整備班長はそれだけ言つと、ビーストアームの装甲を撫でる。

「見てみる、この腕を。パイロットに信頼され、使い込まれた武装つてのはこうも輝くんだ。

覚えとけ、整備兵として働いていもうちにこうしたのに出会えたら、俺たち整備兵は全身全靈を

もって整備しなきやならねえ。そうして、そのパイロットの武功は俺たちの誇りにもなるんだ。

あのパイロットの機体を整備したのは俺たちだ、つてな。勿論、他の整備に手を抜いていいつて訳じやねえからな」

そこまで話し、整備班長は何処か恥ずかしそうに頭を搔きながら、作業再開の声を張り上げる。

練兵場、常ならば兵士達がその技量を磨き、祖国を守らんと鍛錬に励む場であり、いつも熱気に

包まれて居る場であるが、今この時はいつもとは違つた熱気に包まっていた。

練兵場には観客席と豪奢な椅子が置かれており、椅子には現ブリタニア帝国皇帝、シャルル・ジ・ブリタニアが座り、その隣にはビスマルク・ヴァルトシュタインの姿も見える。

即席で作られた観客席には数多くの貴族とメディアがあり、練兵場の周りには兵士の姿が多く見える。

彼らの間にるのは共通して興味。

新たに任命された一人のナイトオブラウンズ。果たしてどちらの力量が上であるのか、に及ぶ。

彼らの視線の先には一機のKMFが互いに向かい合い鎮座しており、その足元には二人の人物、セグラントとモニカの姿が見える。

皇帝の隣に立つビスマルクが一步前に出、

「それではこれよりナイトオブジー、セグラント・ヴァルトシュタインとナイトオブトウエルブ、モニカ・クルシェフスキーの御前試合を行う！」

皇帝陛下、お言葉を」

「つむ。我から言つはただ一言。魅せよ！この場にいる全てに貴様らの技量を魅せてみよ！」

言葉短く告げ、再び椅子に座る。

皇帝の言葉が終わると同時に拍手が起き、場の熱気が最高潮となる。

「それでは両者、騎乗!」

ビスマルクの命令に従い、セグラントとモニカは各自のザザーランドに乗り込む。

両者のザザーランドは御前試合の決まりに従い武装は近接武器とスラッシュハーケンのみ。

当然セグラントのペーストアームも取り外されている。

その為、セグラントの機体の武装はランス一本、モニカの機体は剣を選んだ。

セグラントが騎乗を終えると、通信が入った。

『セグラント、調子はどう?』

『悪くないな。それより遠距離武器がないのに戦えるのか?』

『あら、心配ならいらぬわ。私はオールラウンダーだから。どこの誰かさんと違つてね』

『ふん。なり一點特化の恐ろしさを教えてやる』

『楽しみにしておくわ。それじゃあ、こい勝負にしましょ!』

通信が切れると同時に、

「それでは、始めい！」

開始の合図が出される。

合図と同時にセグラントはランスを構え、真っ直ぐに突き進む。

彼の行動を予測していたのかモニカは慌てる」と無く迎撃の構えを取り、

ランスを弾き、そのまま口クピットを狙つ。

ランスを弾かれると同時にセグラントは急旋回を行い、ランスを突き出す。

一撃、二撃、三撃。

ランスを正面から受け止めれば、剣など簡単に折れてしまうことなど分かつきつている。

受け止めるのではなく逸らす。

金属と金属がぶつかり合い、擦れることで火花が散る。

「はつはあー、どうしたー、逸らすだけか！？」

「そんな訳ないでしょー、脇が隙だらけよー。」

言葉と一緒にスラッシュシュハーケンが射出され、セグラントの機体

の脇をかすめ、
姿勢を崩す。

そのまま剣を頭を斬りつけようとするが、それはランスで弾かれ
る。

しかし、

「ふふ、右腕はもう動かないんじゃない？」

「……ちつ

モニカとて、姿勢を崩した位でセグラントに勝てるとはモロビも
思っていない。

先程のハーケンは勝負を決める為ではなく、片腕を使えなくさせ
る事が狙いだつたのだ。

事実、セグラントの機体は右腕が動かないようでランスを両手で
構える事が出来なくなつていた。

「ランスの威力も半減ね。剣を選んでいればそつはならなかつたで
しそうに」

「確かに、な。だが、コレぐらいで勝つたとか思つてないだらうな」

「当然でしょ。だけどチャンスなのは確か。決めさせてもらひわ」

モニカはそう告げ、セグラントに近づいていく。

しかし、決して油斷はしない。

田の前の男はいい意味でも悪い意味でも予測出来ないのだ。

ランスを封じた程度で何とか出来るなりば組んでいのとせに一一番手を任しましない。

そして、

「でえいつやああああああ…」

掛け声と同時にセグラントはランスを投擲してきた。

「やつぱり投げてきた！」

投擲されたランスにより、一瞬視界が塞がれる。

ランスを弾いた時にはセグラントは田の前にいた。

武器もないのにどう戦つ氣なのか？

彼なりば、殴つてくるだらつ。

そう考へ、剣を「クピットの前で構えた時だった。

それに気づいたのは。

セグラントの左手に何かが握られていた。

それは、動かなくなつた右腕。

彼は右腕をページし、棍棒の様に武器にしていた。

「そんなのアリ！？」

「アリに決まつてんだろ」

直後、コクピットに強い衝撃が与えられ、戦闘不能の警告音が鳴り響いた。

「勝者、セグラント・ヴァルトシュタイン！」

御前試合が終わり、モニカとセグラントは格納庫にいた。

「セグラント、大丈夫？」

「ああ、別に大丈夫だ」

何故、セグラントが心配をされているのか。

それは、御前試合が終わった後、彼はビスマルクに呼ばれていた。

一緒に歩いて行ったモニカが見たのは、

『誰が、あのよつた戦いを見せようと叫んだか、馬鹿息子おおー。』

『勝ったのに何で怒られにやなんねえんだ！』

『もつと騎士らしい戦い方をしようと叫んであるのだあああああー！』

『ぬあああああー』

といつ言葉と共にビスマルクにジャーマンスープレックスを決められたセグラントの姿だった。

「くそ、いつか今までやられた技、全部叩き込んでやる」

「全部ひじりへのかじら？」

「大体30」

「……よく生きてるわね」

「丈夫だからな」

「それだけで済む貴方が時々怖くなるわ。……ところで私たちまつまで此処にいればいいのかしら？」

「 さあ？ なんでも人が来るらしげ」

そんな会話を続いていると、

「 やあやあセグラント君！ 呼んでくれてありがとー。」

格納庫の奥からそんな声が響いた。

その先には、いつもと変わらないくたびれた白衣を着た男。

クラウン・アーキテクトがいた。

「 よおクラウン博士。わざわざありがとよ」

「 何、他ならぬ君の為だ。それに皇帝陛下から勅命も来たしな。
これからは私は君専用の開発チームの主任らしき」

「 まあ、俺が頼んだんだけな」

「 うふうふ。ありがたいね。まあ私が来たからには任せてくれ。
君に合った型だけの機体を造りあげてみせよう」

強く握手をした二人は笑いあつ。

「 といひで、なんで今まで呼ばれたのかしら？」

「 うん？ なんでだるうな。あれかな、君の機体も私が造れつてこ
とかな？」

「 断固拒否します！」

御前試合と帰つて来た馬鹿（後書き）

アーキテクト博士再び登場！ 専用機をはじめとするか……。やはりゾイっぽくするか……。

異端の傑作（前書き）

皆さん、様々なご意見ありがとうございました！ おかげさまで専用機をどうするか妄想が完成いたしましたので投稿します。最初に言つておきます。

今回の専用機、作者厨一病絶賛発動です！

セグラントの専用機を開発するチームの主任として抜擢されたクラウンは、割り当てられた研究室に引き籠もり、日夜どついた機体を造り上げるかを考えていた。

既に彼の目元にはどす黒い隈が出来ており、どれだけ徹夜したか分からぬ。

しかし、彼の顔に疲れは見えず、その顔にあるのは喜びと使命感。今も彼は笑みを浮かべながら机の上にある紙に白らの考えを書き記していく。

クラウン・アーキテクトといつ男の歴史には常に白い目がついてまわった。

彼は幼少の頃から優秀であり、成長し青年となつた時には将来を期待された科学者であつた。

当然の事ながら彼は本国にある研究チームの一つに招待され、その才能を大いに奮つた。

周りにいた同僚もそんな彼の才能を妬みながらも認めていた。

しかし、彼は異端過ぎた。

誰も考える事のなかつた事を考へ、それを開発してしまつからだ

その結果がビーストアームである。

彼の発明品は誰にも見向きされず、期待の眼差しは白い目へと変わつていった。

クラウンはそれを苦とは思わなかつたが、それでも一科学者として悔しいという想いもあつた。

一科学者ならば自身の発明を使ってほし」と思つのは当然の事である。

しかし、誰一人として彼の発明に目を向ける事はなかつた。

何故、誰も自分の発明を、武装を認めないのか。

何故、枠から飛び出さうとしないのか。

何故、自ら革新を起さうとしないのか。

いつしか彼は失意の底に沈み、E.U戦線に半ば左遷の様に飛ばされた。

E.Uの前線ならば、と思つた時もあつたが、結局は彼の発明に陽の目が当たる事はなかつた。

ここも同じか、と考え、一時は自殺を考えた事もある。

そんな時だつた。

セグラント・ヴァルトショタインと出会ったのは。

クラウンは彼の使用した機体を見た時、衝撃が走った。

彼の機体は、KMFでありながら相手を殴った跡があつたのだ。

クラウンは直ぐに、この機体の持ち主について聞いて回り、確信した。

彼は枠に囚われていない！

彼ならば私の作品を使ってくれるのではないか！？

そう思い至ったクラウンは直ぐにセグラントの機体を自身の研究室に運び、

ビーストアームを装備させた。

そして、クラウンは自身の勘は正しかつたのだ、と歓喜した。

彼は、セグラントはビーストアームを振るい戦場の英雄となり、遂にはナイトオブラウンズにまで上り詰めたではないか。

彼の活躍が耳に入る度にクラウンは自身の事の如く喜び、同時に物足りなさを感じていた。

もつと私の発明を使ってほしい。

こいつしか彼の心中はそのような想いが生まれていた。

そんな時だった。

『クラウン・アーキテクトをナイトオブリー、セグラント・ヴァルトシュタイン

専用機開発チーム主任に任命する』

という勅命が届いたのは。

この勅命に彼は歡喜し、直ぐに本国へと戻ってきた。

今の彼の頭の中には数多くの構想がある。

クラウン・アーキテクトの全てを用い、最高傑作を造りあげてみせる。

そして、現在。

彼の目の前には数多くの機体の設計図と武装の構想を書いた紙が置かれている。

クラウンはそれを見ながら、

「私は、私の全てを用いて最高の機体を造りあげて見せる。セグラント君、

君と私の発明が組めば敵は無いところ」とを証明してみせようじやないか」

「つしてクラウン・アーキテクトは徹夜を重ねていく。

クラウンが専用機開発に着手してから六ヶ月程経つたある日。

セグラントはモニカに呼ばれ、ナイトオプトゥエルブに割り当てられた専用格納庫にいた。

「来たわね、セグラント」

「何か用か？ わざわざこんな所まで呼びやがって」

「『めんなさいね。 ただ見て欲しかったのよ。 私の機体を』

「完成したのか？」

「ええ、 大体は」

そう言つモークは格納庫の奥を指差す。

視線をそちらにやると、そこには一体の騎士が鎮座していた。

「あれが私の専用機、名前はフロレント」

「フロレント」と呼ばれた機体はモークのマントの色と同じく黄緑色を基調としており、随所に派手過ぎない装飾が施されている。

「フロレントか。これは直ぐに動けるのか？」

「動くつと思えばね」

「どうこいつだ？」

「今の動力じゃ少しの間しか動けないのよ。私の所の開発主任によれば天才と呼ばれるロイド伯爵が何か新しい動力を開発したとかしてないとか。その情報が開示されればちゃんと動くようになるわ」

「なるほど。だからほぼ完成、か」

「そういう事。……そこには貴方の方はどうなの？」

「クラウンが何かやつてる」

「なんかつて。貴方の要望とか色々あるんじゃないの？」

モークの問にも最もなのだが、セグラントは軽く肩をすくめ、

「俺はクラウンの開発した物なら何でもいい。俺とあいつの感性はそつくりだからな。

アイツが造る機体なら俺はなんの問題もない」

そう言つたセグラントの顔にはクラウンに対する絶対の信頼が伺えた。

「ふーん。まあ完成したら教えてよね。見に行くから」

それだけ言つと、モーカは主任に呼ばれたようだ、ちよつと呼ばれたから行つてくるね、と言い、奥に消えていった。

一人残つたセグラントも此処にいてもじょつがない、と判断したのか立ち去りうとした時、

「セグラント卿！　ここに居られましたか！」

白衣を来た研究者がこちらに息を切らせて走つてきた。

「ん、どうした」

「クラウン博士が呼んでます。専用機を見せたい、と」

「完成したのか？」

「まあ、何と言つますか。詳しく述べ博士に聞いてください」

何故か言葉を濁し、研究者はこちらです、と言つ歩き出しだので

セグラントは疑問に思いながら付いていくこととした。

現在のクラウンの研究室はE-1にあったクラウンの研究室よりも大きく、当然の事ながら機材なども充実していた。そして、部屋の中央には機体を置くスペースがあり、そこには見えないように幕をかけられた機体が鎮座していた。

「クラウン、完成したのか？」

「セグラント君。その通りだ、君の専用機はほぼ完成した。それが『イツだ！』

クラウンはそう言い、幕を思い切り引っ張り機体を露にする。

そこにあつたのは機械で構成された騎士ではなく雄々しく、禍々しい竜。

全身を紅く染められているのが禍々しさを更に感じさせる。

形として一番近い姿を上げるならばティラノサウルスだろうか。

しかし、通常のティラノサウルスと違い腕は細くはなく、ビーストアームに似た武装が

取り付けられており、背中には大型ガトリングガンと何かの吸入ファンが取り付けられている。

そして、最も目を引くのが両後ろ足に取り付けられている橙円型の盾の様な物だろう。

よく見れば、盾の中には巨大な鍔がしまわれている。

正に歩く破壊兵器といつても過言ではないだらう。

「これは……人型ですらないな」

「その通り！ 私は常に考えていた！ 何故、誰もかれも人型という枠に囚われているのか、と！」

人型でなくともいいではないか！ そこで造ったのがこの機体！ 君の専用機、その名も『ブランティブレイカー』。今の私が持つうる全てをかけた傑作。

武装の説明はいるかい？」

「いや、いい。実際に動かせば分かるだろ」

長くなりそうだ、と判断したセグラントはやんわりと断るが、クラウンは聞いてないの
か勝手に説明を始める。

「まあ、見ての通り全身武器だ。腕には試作型ビーストアームを改修したブレイカーアームを。

コレの使い方はビーストアームと変わらない。背中のガトリングは言つまでもなく、近距離以外にも対応出来るようにするためだ。背中にあるファンは気にしないでくれ。アレと連動する武装はまだ作れないんだ。

そして、IJの機体の一番の目玉が両後ろ足に取り付けられた盾、フリーラウンドシールドだ。盾としても優秀だが、

あくまで中に収納されている鍔、ブレイカーコニッシュトが目玉だ。このコニッシュトならKMF如き真っ一つに出来る。

まあ扱いがかなりピーキーなんだが。要は全て君の腕に掛かっている

「

「なるほど。コイツを活かしきるか無駄にするか、全ては俺次第、嫌いじゃないな、IJのついた機体は」

「おお！ やはり君ならば分かつてくれると思つていたよ…いや、私の勘は間違つていなかつた！」

感極まつたのかクラウンは涙ぐんでいる。

「おーおー、泣くほどかよ」

「すまない。だが、今だけは許してくれ。今まで私の開発に真正面から取り組んでくれたのは

君だけだったのだ。そして、その君が遂にはナイトオブクラウンズにまで登つた。

それが嬉しくてな

「そつか。博士、これからも色々頼むぜ」

「ああ、任せてくれ

「とにかく、この機体脱出装置が付いてるよつこは見えないのだが」

「え？ 必要かい？」

「……。それと、この機体もモニカの機体と同じであれか？ 今の動力じゃほんの少ししか動けないのか？」

「ん？ 今の動力じゃコイツは一歩足りとも動けんよ。まあ、私の考案した原子を使う動力ならばなんの問題も無いのだが、許可降りるかな……」

「普通に新しい動力が出来上がるのを待つ事にするわ」

そんな訳でセグラントの専用機は「ラッティーモン」と「ノザウラー」を足して二で割つた感じにしました。うん、なんていうかごめんなさい。

そしてモニカの専用機ですが、名前の由来はアーサー王と敵対したローマ皇帝ルーシアス・アイベリアスの持つていた名剣です。うん、縁起でもないです。

別にモニカが裏切るフラグじゃないですよ？　ただ名前の「ロロ」がかつたので。

それでは、また次回。

いつさらから原作に入らつかな……。

新たな騎士と仮面の男（前書き）

お久しぶりです。近頃リアルが忙しかったので更新出来ずにしてしませんでした。

なんとか完成しましたので投稿します。それではお楽しみください。

新たな騎士と仮面の男

ビスマルクに久々に親子で夕食でもどうだ、と誘われたセグラントはビスマルクの

屋敷の一室にて夕食を共にしていた。カチャカチャと食器の音が響く中、一人は言葉を発する事なく黙々と食事を進めていると、

「機体は完成したか?」

「大体な。詳しく述べてクラウンから上がる報告書に田を通してくれ」

「そうか。……といひでちやんと騎士然とした機体なのだろうな?」

「……」

さつと田を逸らしたセグラントに対し一つため息を付きながらビスマルクは話を続ける。

「まあ機体に関しても言いたいことはあるが、それは今はいい。いいか、セグラント。お前も今では栄えあるナイトオブ・ラウンズの一員だ。その事を夢々忘れるな。
我らナイトオブ・ラウンズに……」「敗北は無い、だろ?」「む、言葉を取るでない」「その言葉は決して忘れる事はねえよ。俺はあなたの、親父の息子だぜ?」

俺が見てきた背中は誰のかを忘れたか？

「ふつ。生意氣を言つておる」

嬉しい事と言つてくれる。

セグラントの言葉に内心で喜ぶがそれを顔に出さないようにする。

「そういえば親父。」「返すぜ」

セグラントはそう言つて、床に置いていた紙袋を渡した。

「おお、どうだつた。中々面白かつただらう」

「ああ。燃える話多かつた。特にウォーマンが蘇る所とかな」

セグラントが渡したのはエリアーにて人気を誇つていた娯楽漫画の一つ、

『キン肉野郎』だった。

「あのシーンか。確かに燃えたな。だが、一番はロビンマスカーだ
るわ」

「いやいや親父、一番はネプチューに決まつてんだらう」

「何を言つか！ ロビンマスカ こそが一番に決まつておるわ！」

「こればっかりは譲れねえな！ ネプチューが一番だ！」

二人は席から同時に立ち上がり、拳を鳴らしながら近づいていき、

殴り合いが始まった。

「おらあつ！」

「ふんつー。」

ちなみに周りにいる使人達はその光景に何ら動じる事なくいつもどおりの光景に目を細めている。まあ、一部ではどちらが勝つかの賭けも行っているが。

「ふははは！ セグラントよ、私が新たに習得した技を喰らうが良い！」

「52の関節技が一つ、キラウェアストレッチだ！」

「ぬおおお！ 抜けだせねええ！ というか物凄く痛い！」

「ふははは、降参せい！ そして認めるのだ！ ロビンマスカ こそが一番だと！」

「み、認める訳にはいかねえ……つ。一番の名はネプチューンにこそ相応しいんだっ！」

「ならばこのまま締め上げるのみ！」

ビスマルクがトドメに入らうとした時、部屋の扉が開き、使用人の一人が部屋に入ってきた。。

「失礼します。旦那様」

「どうした、セバス」

「は、皇帝陛下からのご連絡が御座いまして、一日後に新たなナイトオブラウンズの

叙任を行うとの事です」

「何、新たなナイトオブラウンズだと？ つい半年ほど前にこの馬鹿息子が叙任されたばかりではないか」

「左様で。坊っちゃんが叙任された時はこのセバス、涙で前が見えませんでした。

あの暴れん坊がよくそこここまで育つてくださった、と

「おい、セバス。その坊っちゃんの命が今、父によつて奪われそうになつてるぞ！」

HELP！ HELP！

「それでは私は失礼します」

「うむ、ご苦労であつた」

セバスは優雅に礼をし、部屋から出て行つた。

「セバ――――ス！ この薄情者！」

その後、屋敷に悲鳴が響き渡ることとなつたが、使用人の誰もが気にすることはない。

謁見の間に集められたセグラント達は新たなナイトオブラウンズに任命された一人が入つてくるのを待つていた。そのまましばらく待つていると、謁見の間の扉が開いた。

入つてきたのは金髪の男と桃色の髪をした少女だった。

「セグラント、あの二人つて」

「ああ、アイツらだな」

入つてきた二人はEU戦線においてセグラント達の後任として派遣されてきた

ジノとアーニャであった。

二人はそれぞれダークグリーンとピンクのマントを羽織っている。

その後はセグラント達の時と同じように皇帝による騎士任命が滞りなく行われ、

叙任式は終了した。謁見の間から有力貴族達が退出し、残ったのはナイトオブラウンズとわずかな近衛兵となり、セグラント等も退出しようとしたところ、「先輩方、これから飯でも一緒にビーフですか?」「どうする? モニカ」「いいんじゃない。私たちの機体はほぼ完成しているんだし」「それもそうか。なら行こうぜ」

ブリタニア帝国の中でも上位に入るレストランの個室にて四人は食事を取りながら、様々な話をしていた。

セグラント等が抜けた後のEJ戦線の話、セグラントの軍学校時代の逸話など。

話のネタに困ることはなかった。

「いやあ、それにしてもあの逸話の殆どが実話だったのか。凄いな

「実話なのよ。悲しいことに。連帶責任で何度も私たちまで反省文を書かされたことか」

「軍学校で最も設備を破壊した男……。「記録」

「だから、いきなり写真を撮るんじゃねえよ」

年も近い事もあり会話が止むことはなく、店から出る頃には辺りは真っ暗になつており、

「ずいぶん話し込んだな」

「そうねえ。でも久々に楽しかったわ」

「そう言つていただけだと嬉しいです。また来ましょ」

「今日来たこと記録」

アーニャがセグラント等三人を写真に撮ろうとしたところで、彼女の体が持ち上がり、何事かと思い視線を向けるとセグラントがアーニャの首の辺りを

掴み上げ、自身の太い腕に乗せながら笑っていた。

「お前も写れよ。それ、セルフも出来るんだろ?」

「……出来る」

「なら、写れ

セグラントはそのままアーニャを下ろすとするが、

「……このままこい」

アーニャがそのまま良いといったのでそのまま腕に乗せておくことにした。

写真に写るアーニャの顔には僅かだが微笑が浮かんでいた。

ビスマルクの屋敷からは今日も今日とて破碎音と悲鳴が響き渡る。

本日の喧嘩の内容は肉はレアかミディアムか、であった。結果はミディアム派のビスマルクの勝利で終わり、セグラントは床に沈んでいた。

「ふつ。決まったな。セバス、今日の肉はミディアムだ」

「かしこまりました。旦那様」

セバスは敬々しく礼をし、部屋を出ていきセグラントが復活を果たし、

親子で食事を取っている頃だった。

「し、失礼します！ ビスマルク卿、セグラント卿！」

顔を真っ青にしながら飛び込んできた兵士を見た瞬間に、ビスマルクとセグラントは

食事の手を止め、その顔を戦士のソレへと変える。

「落ち着け。何があった」

「は、はつ！ そ、それがエリアー！においてクロヴィス殿下が殺害されました…！」

神聖ブリタニア帝国第3皇子クロヴィス・ラ・ブリタニア殿下、殺害される。

「」の報は直ぐに神聖ブリタニア帝国に届いた。

報を聞いた、皇帝シャルルは直ぐに本国にいるナイトオブラウンズを招集した。

「皆、既に知つておるだろうが先日エリアーにおいて総督を務めさせていた

クロヴィス殿下が何者かに殺害された。

下手人に関しての情報だが、この様な映像が出まわっていたそうだ」

ビスマルクはそう告げると、モニターに映像を流した。

そこには黒い衣装に仮面を着けた男が映つており、

『我が名はゼロ！ クロヴィスを殺したのは私だ！』

そう高らかに宣言した。

「……ゼロの格好、正体を隠す為なんだろ？ カッ」「悪いわね」

「というか、体の線細つ！ あんなんで戦えるのか？」

「」の格好、面白い。記録

「……簡単に折れそうだな。鍛えてねえのか？」

「セグランントと比較するのは間違いでしょうけど確かに細いわね。女性としては羨ましいけど」

セグランントとモーカ、ジノ、アーニャが小声でゼロに関する感想を述べていると、ビスマルクの目が彼らの方を見たので口を閉じる。

「話を続ける。クロヴィス殿下殺害において当初はまったく別の人間が容疑者として逮捕され、処刑されようとしていた。その時の映像がこれだ」として映像が切り替わり、そこでは車の上にゼロが立ちながら、声高に叫んでいた。

『私たちを全力で見逃せ！　ここに男もだ！』

たったそれだけの言葉で彼らを取り囲んでいた兵士やKMFが動きを止め、

悠々と進んでいくゼロを止めようとしない。

「ああ？　どうなつてやがる。全員が動かなくなつちまつたじゃねえか」

「そうね。まるで、彼の指示に従順に従つていいよくな……。気味が悪いわ」

モーカの感想は最もであった。

ゼロの言葉が全てであるかのように動きを止め、従う兵士の姿はどこかおだましさを感じさせる。そんな中、ビスマルクと皇帝の二人は何かを考え込ん

でいるよつで、

眉間に皺を寄せていた。

そのまましばらく時間が経つと皇帝が立ち上がり、
「この事件に伴い、新たな総督として私はコーネリアを
送る事とした。そして、ゼロという男を確実に捕らえる為、ナイト
オブランズ
を一人派遣することを決めた」

ナイトオブランズの派遣。

その言葉にその場にいる全員の表情に緊張がはしる。

皇帝が派遣することと決めたのは、

「我が騎士セグラント。お主に行つてもいい」
「おう。いえ、承知しました。しかし、俺、私の機体はまだ動きま
せんが?」

「問題はない。現在エリア11にいる特派が新たな動力を開発した
そうだ。

向こうに着き次第、向こうからそれが回されるように手配しておく」
「承知しました。セグラント・ヴァルトシュタイン、機体の最終調
整が終わり次第、

エリア11へと向かいます」

セグラントはゼロにちがいない動きで恭しく頭を下げた。

セグラントが機体の搬送準備を進めていると、

「セグラント」

「モニカか。どうした?」

「ん、別に。エリア11に行く前に一言挨拶しておこうかな、と思

「らしくねえな。明日は雨か?」

からかうよつた言葉にモー力は微笑を浮かべ、ただ一言。

「絶対に帰つてくるわよね?」

……当たり前だ。アイツと、Hディと約束したからな。俺は帝国

新編 金瓶梅

機体で歯み碎いとおれや一はれ二

任せとけ

セグランストとモーカは拳を突き出し、「ジン」と一回ぶつけた。

「馬鹿息子」「なんだよ、親父」

機体の搬送が終わり、セグラントも輸送機に乗り込もうとした時、

ビスマルクに呼び止められた。

「貴様の心配は大してしておらんが、一言言つておく」

「なんだ？」

「ゼロの言葉や田を直接聞くな、見るな」

「なんだそりや？」

「……私からのアドバイスだと思え」

ビスマルクの奇妙なアドバイスにセグラントは首を捻りながら輸送機へと乗り込んでいった。

「安心しろよ、親父。俺はアンタのナイトオブワンの息子だ。どんな奴が相手でもすべて噛み碎いてやるさ。それと、アドバイスは忘れねえぜ」

セグラントは手を軽く振り、エリアーへと向かっていった。

「ビスマルクよ。言わざにはおれんかったか？」

「……これは弱きと申しつべきでしようか」

「良いのではないか？ お主も一人の親という事だ

「は、ありがとうございます。陛下」

新たな騎士と仮面の男（後書き）

これにてセグランントは次回からエリアーへと向かいます。そして次回はゼロや紅蓮となるナリタ連山導入編。さて、ゼロ等にトラウマを与えるか、それともスザク君にイイトコ取りさせるか。

一度目の初陣（前書き）

今回から本格的な原作介入となります。それではお楽しみください。

一度目の初陣

「セグラント卿、間もなくエリアー総督府に到着します」

輸送機のパイロットの呼びかけにセグラントは体を起します。

「（）苦労さん。ようやく到着か。クラウン、まずはどこへ向かえばいいんだ？」

「取り敢えずは総督である「一ネリア殿下に挨拶に行けばいいんじやないか」

「……そつするか」

クラウンとの会話をしばりの間続いていると輸送機は総督府のヘリポートに

降り立ち、扉が開かれた。

セグラントとクラウンが降りると、目の前には十数人の兵と皇族服をその身に纏った

女性と後ろに立つ女性と良く似た未だ何処か幼さの残る少女。

皇族服を纏った女性の両隣に立つ一人の騎士が彼らを迎えた。

「よく来た。私がエリアー総督を務めている「一ネリア・リ・ブリタニアだ。

貴君はナイトオブツー、セグラント・ヴァルト・ショタイン卿で間違いないか？」

「ああ。その通りだ、です」

セグラントのたどたどしい敬語に後ろに立つ少女がクスリと笑み

をこぼし、

眼鏡をかけた騎士は眉をひそませる。

「報告書の通りだな。貴君は父上、皇帝陛下の騎士だ。公の場では無理だが、

私的な場であるならば無理に敬語を使う必要はない」

「それは助かります。それで？ 僕はこれから何をすれば？」

「まずは総督室へと向かおう。話はそこでしようではないか」

「イエス、コアハイネス」

エリア11 総督室。

そこにいるのはコーネリアと少女、そして一人の騎士に加え、セグランントとクラウン

がいた。位置としては総督の机にコーネリアが座り、その両隣を騎士が、応対の為の

ソファーに少女が座り、セグランント等はコーネリアの前に立つといった様子である。

「再度、紹介といこう。私は先程言つたからな。まずは……」

コーネリアの言葉にいち早く反応したのは右に立つ眼鏡をかけた男だった。

「姫様、まずは私が。お初にお目にかかります。私はギルバート・G・P・ギルフォード。

僭越ながらコーネリア姫様の親衛隊隊長と直属の騎士を務めています。

セグラント卿の噂は聞いております。これからよろしく

ギルバートは軽く自己紹介をし、セグラントに対し会釈をする。

「次は私が。私の名はアンドレアス・ダールトン。將軍を務めている。

貴君と戦える事を楽しみにしている」

厳つい顔に笑みを浮かべ、ダールトンは手を差し出してきたのでセグラントはそれを

軽く握り返す。その時、軽く力を込められたのでこちらも力を少しだけ入れ返すと、

ダールトンは笑みを深くする。

何処か親父と同じ匂いがするな。この男もまた生粋の武人ということか。

「最後は私ですね。初めまして、セグラント卿。私の名前はユーフェニア。

ユーフェニア・リ・ブリタニアです。非才の身ですけど一応副総督を務めています。

仲良くしてくださいね」

ソファーから立ち上がった少女は花の様と言つて相応しく可憐に微笑んだ。

「リ・ブリタニア?」

「あ、私と姉さまは母が同じなんです」

ユーフェニアの説明に得心がいったのか頷く。

「さて、セグラント卿。卿には早速だが一仕事してもらいたい」
そう切り出した「コーネリアに対し、悪びれた様子は全く無く答えた。

「あ〜、俺の機体はまだ動きません。一応その事も報告書と同封して送られてる筈ですが?」

その言葉にコーネリアは少しだけ口角を上げた。

「そう、卿の初仕事は卿の機体を動けるように整備することだ。本国から既に聞き及んで

いる通り、特派の連中が新たな動力を開発したらしい。卿等はまず特派の下に向かい、新動力を受領してきてもらいたい」

「こっちから出向くのか?」

セグラントの疑問も最もであり、それに答えたのはギルバートであつた。

「……本来ならばアチラから出向かせるのだが良くも悪くもアソコは特別でな。あそここの後ろ盾はシユナイゼル殿下なのだ。故に姫様は余り強くは言えないのだ」

その答えに完全に納得はしていないが、取り敢えず了承の意を伝え、セグラントとクラウンは部屋から退出していった。

特別派遣嚮導技術部、略称『特派』。

神聖ブリタニア帝国宰相シユナイゼルが管轄する組織の一つであり、主にKMF関連の

開発を行うチームであり、所属する人員も全てがその道のスペシャ

リストである。

この特派の中心を担つてゐる人物の名をロイド・アスブルンドと言つた。

そして現在、彼、ロイドはその顔を不機嫌な色に染めていた。

「まつたく、折角僕のラムスロットが完成してデヴァイサーも見つかつたつて言うのに
出番が『えられないなんて。暇だからスザク君にシミュレーション
でもさせようかな』」

愚痴を零す彼に対し、椅子に座っていた女性が振り返り、

「そつ愚痴ばかり零さないで下さい。それにスザク君は今は学校ですよ。
それよりも引渡しの準備が完了しましたよ」

「セシル君。引渡しつて何をだい？」

セシルと呼ばれた女性は頭を軽く抱え、

「こんな大事な事を忘れないでください。今日は本国からセグラン
ト卿、

ナイトオブツーがやつてくるんですよ。

今日は彼の機体を動かすために大出力のコアルミニナスを引き渡す予
定です」

セシルの言葉でよつやく思い出したのかロイドは懶どらしく手を
ポンと叩き、

「ああ、そうだつたねえ。でもそんなの適当に済ませて
ランスロットを弄つていいなあ」

「ロ・イ・ドさん？」

「な、なんて嘘だよ。それでいつ来るんだい？」

「間もなく、の予定ですが……」

セシルが時計に視線を向けると、通信機器が鳴った。

「あ、来たようですね。ロイドさん。くれぐれも、いいですか？
くれぐれも

失礼の無い様にお願いしますね

「はいはい。分かつてますよ」

セグラント等が技術者に案内された部屋に入ると、眼鏡をかけた
いかにも研究者然と
した男と一人の女性が彼らを迎えた。

「セグラント卿、ようこそ特派へ。私はセシル・クルーミーです。
そしてこちらが

「ロイド・アスブルンドだわい？ 知っているわ。よく知つてる
顔さ」

そう言つたのはクラウンであり、その顔には悪戯が成功した子供
のような笑みを
浮かべていた。それとは対照的にロイドの方は笑顔が引きつっていた。

「久しいな。ロイ坊」

「クラウン、知り合いだったのか？」

「なあに。私がまだ追い出される前にちいと面倒を見てやつてたの
さ。なあロイ坊？」

ロイドはダラダラと脂汗を流しながら、何も答えない。

「セセセ、セシル君？ 君はクラウン博士も来るつてことを言つて
たつけ？」

「いえ、お知り合いだとは思わなかつたので。……苦手なんですか

？」

「……君は僕の事をどう認識してる?」

急なロイドの質問にセシルは首を傾げながら、

「何處か人間性が抜けてはいますが天才だと思つていますが」「僕がクラウン博士に抱いているのがソレだよ。まあ頭に異端がつくけどね」

ロイドを持つて天才と言わせるクラウンにセシルは目を見開き、クラウンを凝視する。

当のクラウンは彼らの視線を無視し、奥に鎮座しているKMFに視線を向けていた。

「ロイ坊、これがお前の作品か?」

「その通りですよ。名前はランスロット。中々でしょ?」

ロイドは玩具を自慢するかのように胸を張るのに対し、

「足らんな」

「はい?」

クラウンの反応はどこか冷めていた。

「足らん、と言つてこむ。確かにスペックには目を見張るものがあるが、

机から飛び出しておらん。これでは詰まらないではないか

「貴方の考えが異端なんですよ。なんと言われようとも僕はランスロットに絶対の

自信を持つていま

「生意気を言つようになつたものだ」

「それほどでも」

クラウンとロイドは奥の方で久々に会つた事もあるのだろうが、

技術関連の話に華を

咲かせセグラント等の事を忘れているようであった。

その様子にセシルは頭を抱え、ため息をついた。

「申し訳ありません。セグラント卿。ロイド博士には後で言つておきますので」

「いや、別に良い。クラウンも楽しそうだからな。それよりも、コアルミナス搬送準備を

進めておいてくれ。外に置いてあるトレーラーに積んでおいてくれ

「了解しました」

「ああ、それとクラウンに言つておいてくれ。俺は先に戻っている、と。

どう考へても長くなりそうだからな」

セグラントは肩を竦める。

セシルも同じ意見なのか何も言わずに苦笑いを浮かべるばかりであった。

「コアルミナスが搬送され、幾日か経つたある日セグラントはコーネリアに
総督室に来るよつて言われていた。
「ナイトオブツー参上しました」

呼ばれた内容の頭に任務と付いていれば馬鹿でも公的な要件だと分かる。
流石にこの時には敬語を使つていた。

部屋に入ると、中にはコーネリアとギルバート、ダールトン。

そしてコーフンニアがいた。

「よく来てくれた。実は」」ヒリアーに残る最大反抗勢力組織、『日本解放戦線』

の本拠地が判明した。よつて我々はこれに攻撃を仕掛ける事とした

「へえ。それで自分を呼んだということは出撃でしょうか?」

セグラントの言葉にコーネリアは口角を上げる。

「その闘志心強いな。だが、今回は見物をしていてもらいたい。我が部隊の練度と強さをな」

そう言つたコーネリアの目には確かに自信があった。

「なるほど。今回自分を呼んだのは出撃命令ではなく、出撃しないで欲しいという事か。

だが、忘れていませんか? 僕は叔父、皇帝陛下の騎士です。貴方に命令権は無い」

「その通りだ。故にこれはお願ひだ」

「……わあつた。わかりましたよ。いいでしょ。今回の戦に僕は顔を出しませんよ」

「感謝する。ギルバート、ダールトン。作戦会議だ」

「イエス・コアハイネス」

戦いにすらなつてねえ。

セグラントはコーネリア指揮下の下繰り広げられる日本解放戦線との戦いは

「の言葉こそが相応しかった。隨時送られてくる戦況報告とモニターを見ながら思つ。

日本解放戦線もエリアー1最大の組織といつだけはあり、装備や兵士の練度は中々に高いようではあるが、それでも及ぶことはない。

田の前のモニターでは次々と日本解放戦線の機体を表すマーカーが消えていき、徐々に後退を始めていた。この様子ならば後2時間もあれば制圧出来るだろつ。

だが、

「なんだ？ この嫌な感じは」

セグラントの胸中には先程から感じる違和感があった。

「何かがある？ いや、上手く行き過ぎてんのか？」
後少しで制圧が出来る事に疑問は感じ無い。

だが、まるで第三者の掌の上で動いているような気がしてならないのだ。

「だからだ？ …… じつ感じ始めたのはいつからだ？」

セグラントが思考に沈もうとした時、田の前で山が崩れた。

セグラントは近くに座るオペレーターの肩を掴んだ。

「何が起きた！」

「土石流です！ 突如山が崩れ土石流が我が軍に！ そ、それと…

…

「なんだ!? セツセツと聞え!」

「ぐ、黒の騎士団が現れました!」

「黒の騎士団だあ? ちつ、こんな時に! いや、こんな時だからこそか?」

「コーネリア殿に連絡をいれる!」

「そ、それが先程の土石流の影響か繋がりません。ビ、ビツしましょう!?」

オペレーターは軽いパニックに陥つてこのみで涙田でじりじりを見てくる。

セグラントは田を開じ、深呼吸をする。

「！」の場にいる全員に告げる。俺は今から殿下救出の為に出撃する。

お前らは通信の回復と生き残った友軍の回収を最優先にしろ!」

「イ、イエス・マイロード!」

返事を聞くと同時にセグラントは司令室から飛び出し、クラウンに連絡を取る。

この時、後ろの方でロイドの声が聞こえた気がしたが無視した。

「クラウン、状況は聞いてたな? 出るぞ!」

「任せろ。既に準備は完了している」

「さすがだ」

セグラントが専用のトレーラーに着くと、そこには笑みを浮かべたクラウンと
ブラッティ・ブレイカーが待っていた。

「待つていたよ。『イイツとの戦場は初めてだろ?』。気分は初陣かな?」

「かもな。まあ、ブラッティ・ブレイカー。全て噛み砕くぞ!」

土石流により友軍を流され、孤立した「一ネリアの前には十数機の無頼に加え、

一機のカスタム無頼と見たことの無い紅いKMFがいる。

カスタム無頼から聞こえてくる声はゼロの物だった。

『お久し振りですね、「一ネリア総督。再会の挨拶といきたいところですが、今日は大人しく捕まつて貰いましょうか。貴君には聞きたい事もあるしな。』

勝利を確信しているかのようなゼロの声に「一ネリアは下唇を噛む。

状況は圧倒的不利だな。だが、目の前の紅い奴を討てば活路は開ける。

覚悟を決め、紅いKMFに半ば不意打ちの如く仕掛けるが、目の前のその性能は

今までのKMFを否定するかのような馬鹿げた機動性を誇っていた。

紅いKMFは「一ネリアの一撃を難なく避け、一ネリアのグロースターを地面に叩き伏せる。

『さて、氣は済んだかな？ それでは今度こそ我々に捕まっていた

だきましょ'う』

ゼロの横から数機の無頼が出て、コーネリアを取り囲む。

『ここまでかっ！

「コーネリアが諦めかけたその時。

横の大岩が吹き飛び、一機のKMFが乱入し、自身を組み伏せて
いた
KMFを吹き飛ばした。

「なんだ、あれは……」

それは誰が漏らしたのか。

それはKMFと呼んでもいいのだろうか？

今、自分を組み伏せている紅いKMFと同じ紅い装甲。
しかし、何処か禍々しさを感じさせる。

なにより、それは人型ではなかった。

例えるならば竜。図鑑などでしか見たことのない古の霸者『T—R
EX』そのものだった。

駆動系が軋む音がまるで獣の唸り声の様に聞こえる。

『「コーネリア殿下。無事でなにより』

「その声、セグラント卿か？ その機体は……」

『俺の専用機ブラッディ・ブレイカーです。殿下はお下がりを』

「私に引けと言うのか！？」

『いや、そうではありません。見物していく欲しいんですよ。俺の牙を』

通信機ごしに聞こえてくるセグラントの声に「一ネリアは自身の背に冷や汗が流れるのを感じた。

『初陣だ！ ブラッディ・ブレイカー！ 仇なす者全てを噛み砕くぞ！』

一一度目の初陣（後書き）

コーネリア殿下、丸くしすぎたかな。もっと礼儀作法に厳しくしたほうがいいでしょうか？後、クラウンとロイドの関係は師弟？みたいにしました。年的にもそんな感じですし。二人ともマッドですし。すいません石を投げないでください。

さて、感想にてブラッディ・ブレイカーの機体データを書いて欲しいというありがたいお言葉を頂きましたので、この場を借りて書かせていただきます。

機体名 ブラッディ・ブレイカー

操縦者 セグラント・ヴァルトシュタイン

形式番号 RZA 002BB

分類 ナイトオブランズ専用KMF

製造 神聖ブリタニア帝国

生産形態 ナイトオブツー専用機

全高 4 . 6 m

全長 6 . 4 m

全備重量 12 . 2 t

推進機関 ランドスピナー

武装 ブレイカーアーム×2

フリーラウンドシールド×2

ブレイカーコニット×2

ガトリングガン×1（名前はまだ考え中です）

現在の武装はここまでです。物語が進めば追加されるかと思います。
詳細 ナイトオブツー。セグラントの為に異端クラウン・アーキテクトによって作成されたKMFと呼んでいいのか甚だ疑問な機体。カラーは紅を基調としている。

どんな状況であろうと敵機を粉碎する事を重視しているため突破力は他の機体と比べても群を抜いている。武装は基本的に至近距離が主なので搭乗者には相応の力量と肝っ玉が要求される。殲滅戦、真正面からの勝負に適した機体である。

名前と機体はゾイドのジエノブレイカーから。

次回にまわしてすいません。これで次回はジエノ無双！！

III. 場所（前書き）

遅くなってしまってすみません。ようやく完成しましたので投稿します。

目指す場所

ナリタ連山にて完璧な奇襲を敢行した黒の騎士団は数多の反抗組織が集つた組織であり

その中核を成すのは扇グループと呼ばれる小さな組織だった。彼らはそれこそ他の反抗組

織からみても蟻の如き、小さな組織だった。そんな彼らがこうして成長を遂げる事が出来

たのは一人の人物の影があつた。その人物はどこからともなく現れ、ゼロと名乗り、他に

類を見ない知謀で彼等に勝利をもたらして來た。この勝利は絶望しかけていた、中小組織

に希望を与える、いつしか扇グループは黒の騎士団という一大組織に成長していった。

黒の騎士団に所属する日本人達は 命を惜しんだ事は無かつた。自殺願望があるわけではない。ただ、知つてしまつたのだ。

勝利の味を。

希望の色を。

彼等はゼロに希望を見出していた。

彼について行けば日本を取り戻せるのでは。
故に彼等はゼロに付き従つ。

どのような策謀であるうとも、付いていく。

しかし、当然の事ながら黒の騎士団の中には未だゼロに懷疑的な者が多数存在する。

ゼロはそんな彼等を完全に付き従える為に此度の無茶とも取れる作戦を敢行した。

神聖ブリタニア帝国第一皇女コーネリア・リ・ブリタニア率いる精

銳部隊への奇襲。

ゼロはこれを持つて、黒の騎士団を完全に掌握したのだった。

しかし、全てが計算通りとなることは無かった。

「なんなのだ！ アレは！」

ゼロ、ルルーシュは無頼のコクピットを強く叩いた。

彼は勝利を確信していた。自分は「コーネリアを自らの策謀で孤立させていたはずだ。

有利に立っていたのはこちらの筈だった。

だといつのに田の前に広がる光景はなんだ。

突如現れた紅い竜はその両の腕で「コーネリアを囲んでいた無頼を掴み、

宙に持ち上げる。

「な、なんなんだ！ テメエは！ 離しやがれ！」

掴まれた無頼のパイロットが掴まれながらも竜に対し、アサルトライフルを乱射する。

それに呼応するかの「」とく、周りの無頼も射撃を始めるが、竜の装甲を貫く事は叶わず、

竜は無頼を掴んでいる腕に力を込める。それに伴い辺りに響く駆動音があるで、飢えた獣の唸り声に聞こえる。

無頼の装甲が悲鳴を上げ、ひしゃげていく。

ブラッディブレイカーに捕まつた無頼のパイロットの名を鴻上と言った。

彼は下は他の中小組織の一員であり、最近になり黒の騎士団に合流

した一人だった。

日本を解放する事を夢見て、戦つてきた。

当然、命は惜しい。

だが、それでも日本を取り戻したかった。

日本を取り戻してみせる一心で戦つてきた。

しかし、現状はどうだ。

突如として現れた謎の機体に掴まれ、アサルトライフルも通用しない。

周りの仲間が何かを言っている。

「鴻上！ 早く脱出しき！」

鴻上は何度も、何度も緊急脱出装置のボタンを押す。

しかし、画面に表示されるのは脱出不可能の文字。

「ひ、ひい！ 脱出装置が起動しない！？ なんで！？ ゼロ、助けて下さい！」

ゼロ、助け……」

鴻上の言葉は最後まで続くことは無かつた。

彼は機体と共に握りつぶされた。

KMFのオイルと人の血がブラッディブレイカーに降り注ぐ。

セグラントは新たな獲物を求め、ブラッディブレイカーの緑色に輝く眼光を自身を取り囲む

無頼に向ける。ルルーシュが萎縮した団員に指示を出そうとした時、横の林が吹き飛び、

新たな機影が現れた。それは、白金の鎧を持つ騎士。名をランスロットと言った。

「白兜まで現れただと！？」

「ゼ、ゼロ！ 撤退しよう！」

扇がルルーシュに進言する。ルルーシュもそれには同意だが、目の前の二機がそれを許すかどうかが問題であった。すると、二機に動きがあった。

「なんだ、あの機体？」

セグラントはクラウンと共にロイドを尋ねた際にランスロットを見ている筈なのだが、

彼の記憶からはさっぱり消えているようだつた。

「あれは、特派の機体か」

「コーネリア殿下。ご存知なので？」

「ああ。セグラント卿、あれは一応味方だ。通信を入れてくれ」

ランスロットを駆るスザクに通信が入る。通信は自身の前にいる異形の

KMFからだつた。

「お前、特派のパイロットか？」

「はい、そうです！ 貴方は？」

「ナイトオブツー、セグラント・ヴァルトシュタインだ。丁度いい、

お前殿下を安全な所

まで連れていけ

「ナ、ナイトオブツー！？ 申し遅れました！ 自分は枢木スザクと言います！ それと、

殿下の撤退支援の件ですが、敵の数も多いのです。ここは自分も残り共同であるべきではないでしょうか？」

スザクは相手がナイトオブツーと知り、緊張するが、それでも提案できる辺り肝つ玉

の太さはセグラントと同等なのかもしない。

セグラントはスザクの提案に対し、

「いらねえよ。というか邪魔だ。さつさと殿下を連れていけ」

「……」

「どこからこ」までの自信が湧き出るのだろうか。

「それに……。ナイトオブランズに敗北はない」

そう言つて笑うセグラントにスザクは己の手指す場所の高さを再認識した。

「というわけで。「一ネリア殿下。ひとまずの撤退を」

「まったく。今が非常時でなければ不敬罪に問われても致しか無い会話だつたぞ。

まあいい。セグラント卿、私からのオーダーは一つだ。凱旋してこい」

「イエス・コアハイネス」

ランスロットが「一ネリアの乗るグロースターを護衛しながら撤退していく姿を尻目に

セグラントはブラッディブレイカーを一步前に進ませる。

「さあ。前に出てこい！ 反抗したんだ。殺られる覚悟ぐらいあるだろう！」

かかってこい！」

セグラントの咆哮に彼を取り囲む二十機の無頼は一步下がる。

一步下がった彼等に対し、セグラントは歯を剥き出したながら笑い、

「来ねえのか？ なら噛み碎いてやるよ！」

ブラッディブレイカーは己の持つ武装を全解放した。

そこから始まつたのは戦闘ではなく、殲滅戦。

ブレイカーアームがその巨大な腕を振るい、すぐ横の無頬を掴み、地面に叩きつけ、伏した相手をその足で踏み碎く。

正面に布陣した三機の無頬からアサルトライフルによる一斉射撃は両後ろ足に装備され

ているフリー・ラウンドシールドが防ぎ、射撃を完全に防御した。半ばパニック状態に陥つ

た三機の無頬は弾倉が空になるまで撃ち続け、銃口から弾丸が出なくなつても狂つたかの

よつに引き金を引き続ける。そんな彼等をあざ笑うかのようにブレイブディブレイカーの顎が大きく開かれ、まず真ん中の一機に噛み付き、天高く持ち上げ、そのまま噛み碎いた。

噛み碎かれた無頬だつた物が轟音を立てながら地に落ちていく。その様子に残る一機の

動きが完全に止まつてしまつ。セグラントがその隙を見逃す筈がなく、彼は横に展開して

いたフリーラウンドシールドからブレイカーコニットを出現させる。現れたブレイカーコニットの形は例えるならば鍔だろう。刃の部分は似ても似つかないほどに凶悪な物である

が。

展開されたブレイカーコニットを見て、

『なんだよ、それ……』

誰が言つたのだろうか、それは分からぬが現れたブレイカーコニットによつて残された黒の騎士団の士氣は完全に破壊された。

最初に背を向けたのは誰だつたか。

一人がプラッティブレイカーに対し背を向け、逃走を計り始めた瞬間にその場に残る殆どの無頼は我先にと逃げ始めた。

しかし、

『誰が逃がすなんて言った！』

セグラントの咆哮が響き渡り、二つのブレイカーコニットが一機の無頼をその鋏に捕らえ、持ち上げ、切断した。

ブレイカーコニットで捕らえる事が出来なかつた無頼は背中に装備されているガトリングガンにより、後ろから撃ちぬかれ蜂の巣となつた。

数分後にはコネリアを囮んでいた無頼二十機も残るは四機のみとなつており、破壊された無頼達により地は赤く染まつていた。残つたのは黒の騎士団の内でも核を成している扇グループ位の物だつた。

『ゼ、ゼロ！ どうすんだよ！？』

「少し、静かにしていろ！」

玉城が半ば悲鳴を上げながら、ルルーシュに尋ねる。

既にルルーシュの中からは勝利の一文字は消え去り、あるのは如何に損害を少なく撤退を行つて移っていた。思考を続ける彼に一つの通信が入る。

『ゼロ、殿は私がやります』

それはカレンだつた。

カレンの駆るKMF紅蓮は新型であり、性能も高く、またパイロットの技能も多い。

本来ならばカレンに任せ、撤退を行うのだが、彼にはカレンが目の前の化物に勝てると

は思えない。ここでカレンを失うのは余りにも大きな損害。しかし彼女以外にこの場で

殿を務められる人物はいない。

『ゼロ、いかせてください！』

「……すまん。カレン、殿を頼む！ ただし必ず帰つてこい！ お

前は黒の騎士団の

エースなのだからな！」

『はい！ 紅月カレン、いきます！』

カレンの駆る紅蓮がブラッディブレイカーに向かっていく。

「よし、アレはカレンに任せ、我等は撤退する」

『待てよ、カレンを見捨てるのか！？』

玉城が再び叫ぶが、

「ならばお前が殿を務めるか？」

というルルーシュの言葉で静かになった。

セグラントは自身に迫つてくる紅蓮に密かに感心していた。

「単騎か！ 上等だ！」

紅蓮は装備しているアサルトライフルを狙いを付けること無く乱射する。アサルトライフルがブラッディブレイカーに通用しない事は分かつている為、撃乱に使つてきたのだ。

カレンの狙いはただ一つ。

紅蓮の右腕に装備されている武装『輻射波動機構』による一撃粉砕。紅蓮に搭乗したのはこれが初めてではあるが、この武装があれば並大抵の敵には負けはし

ない、と考えていた。事実、コーネリアの親衛隊もこの武装で何機かは撃破してきたのだ

。仮に倒せなくとも損傷を与える事は出来る。そうすれば撤退が簡単になる。カレンはそう判断を下し、ブラッディブレイカーに特攻を敢行した。

弾倉のもつ限り弾を撃ち続け、視界を奪い、距離を詰めていく。ブラッディブレイカーはフリー ラウンドシールドを広げ、その射撃を防ぐ。そして、遂に

カレンは輻射波動の射程内に踏み入った。

『貰った！』

カレンは勝ちを確信し、輻射波動のスイッチを入れる。
しかし、何も起きない。目の前の敵に対し、輻射波動が打ち込まれないのだ。

『どうして!? なんで輻射波動が……!』

戸惑う彼女の耳に通信に入る。

『狙いは良かつた。だが、分り易すぎだ』

通信の相手は目の前の機体からだった。

通信は音声のみで顔は表示されていない。

カレンが視線を上に向ければ、そこには紅蓮の右腕をブレイカー ユニットで切り取り、

挟んでいるブラッディブレイカーの姿があった。

『嘘……』

切り取られた輻射波動機構がついた右腕が地面に落ちる。

「ここまでだな。よく戦った、とだけ言っておこう」

セグラントはそう言い、ブレイカーアームを紅蓮に向ける。

『ごめんなさい。ゼロ……』

目を瞑り、覚悟を決めた時だった。後方からアサルトライフルの弾が飛んできた。

ブラッディブレイカーはそれをフリー ラウンドシールドで防御するが、その動作により、

一瞬だがセグラントの意識が射撃の飛んできた方に移る。その隙にカレンは紅蓮を驅り、後方に退いていく。

『無事か！ カレン！』

射撃を行つたのはルルーシュの駆る無頼だった。

「ゼロ！」

紅蓮は無頼の横に付くと、セグラントの方を警戒しながら撤退を開始した。

当然セグラントは追うつもりであつたが、モニターに目を移せばエナジーフィラーが切れ

かけていた。

「ちつ、動けるようになつてもまだこの程度か。クラウンに頼んで予備動力も積むとするか？」

彼はそういうと、切り取つた紅蓮の右腕を顎に咥え、本陣へと帰陣した。

本部に帰還したセグラントを迎えたのはクラウンの満面の笑みと不満そうな顔をしたロイドだった。

「見ろ、ロイ坊。お前じつは機体は役にたたず、私のブランディ

ブレイカーの独壇場

「だつたではないか」

「もつと早く許可が下りていれば結果は逆でしたよ」

「小僧が言いおる」

「そろそろ小僧を卒業したいのです。スザク君、もつと頑張ろつか
え、あ。すいません、ロイドさん。でも、セグラント卿のご命令
もありましたし」

スザクがロイドに対しモーモーピーの尻目にセグラントは紅蓮
から切り取った腕を

クラウンに引き渡し、確認をとつていた。

「クラウン。この腕はなんだ？ 取り敢えず拾つてきたんだが」

「これは、何処かで見たような……。何処だったかな」

クラウンはこめかみに指をやり、考え始める。

こうなると彼は思考の海に沈んでしまうのは分かつてるので、セ
グラントは適当に休憩
でもとうとした時だった。

「すいません！」

振り返ると、そこにはスザクが立っていた。

「なんだよ？」

「一つ教えていただきたい事があるのですが」

そう言つた彼は真っ直ぐにセグラントの目を見つめ、

「貴方が目指す物はなんですか？」

そう尋ねた。

「なんでそんな事を聞く」

「知りたいからです。僕には大きな夢、望みがあります。その為に」

「……。俺が目指す場所は……」

セグラントは一度空を見上げ、目を伏せる。

その姿はまるで既にいなくなってしまった誰かを思い出しているよ
うに見えた。

セグラントはそのままスザクに背を向け、歩き出す。

「セグラント卿」

「榎木。俺が目指すのは帝国最強だ」

そう言って手をヒラヒラと振り、彼は自身のトレーラーへと向かっていった。

去っていく彼の背をスザクは見続けた。

スザクとはしばらく何ともいえない関係が続くと思います。そしてつい紅蓮の腕を拾つてしまつた。まあ使はうことはないでしょうが。ジエノ無双は出来てたか、それだけが不安です。それではまた次回。

後始末（前書き）

めだか194様の許可を頂いたのでこの作品の標語はイエス、ジエノ無双！となりました。すいません、どうでもいいですね。

どのような軍事行動であれ、起こしたからには後始末といつもの
が存在する。

今回のナリタ連山では黒の騎士団といつ第三者の介入により、数
多くの犠牲者が出でし
まつた。生き残った者達は亡くなつた戦友達を弔うために土砂と向
かい合つ。

その中には特派の榎木スザクの姿があつた。

苦渋を浮かべながらも一心に土砂を掘り続ける彼にこの場にそぐ
わない暢気な声がかけ
られた。

「スザク君。死体発掘は順調かい？」

「ロイドさん！ そういう言い方は不謹慎ですよ」

セシルが注意をするがロイドは何故不謹慎なのか分からぬのか、
首を傾げる。

「どうしてだい？」

「教えてあげましょうか？」

ロイドに微笑を浮かべながら近づくセシル。

その影には鬼が見えた。

スザクは一人のやりとりに苦笑を浮かべながらもその手を休める
事はない。

何もせずにいたら、行きどけるの無い怒りで大声を上げてしまいそ
うだった。

手を動かす彼の視界に一人の大男が映つた。

「セグラント卿」

セグラントはその手に巨大なスコップ というかKMFの装甲
に鉄棒を組み合わせた何

かを持ち、土砂を掘っていた。

「ん。特派のパイロットか。何か用か？」

「い、いえ、ナイトオブラウンズの方がいることに驚いただけです」「ナイトオブラウンズとはいえ俺も一人の戦士だ。面識は殆ど無かつたとは言え、同じ国

を守る戦友達だ。そのままにしておくのは忍びないと思つてな」

セグラントはスコップを動かし続ける。

そんな彼にスザクは聞いてみたかった事を聞くこととした。

「ロイドさん、セグラント卿。ゼロは、黒の騎士団は何をしたいのでしょう？ こんな犠

牲の上に何が出来ると思つているんでしょうか？」

「そりやあ正義じゃない？ 正義の味方だって自分で言つてたんだから

ロイドは軽くわざと答へ、セグラントは一回手を止め、顔を仰ぎ見ながら、

「知らん」

端的に答えた。

「セグラント卿。自分は眞面目に聞いてるのですが……」

「眞面目に答えていいさ。知らん物は知らん。ゼロとか黒の騎士団が何を考えているのか

そんなことは知らん。分かるのは、ただ俺に、ブリタニアに牙を剥いたつて事だ。牙を剥

いたからには俺は誰であろうと噛み碎く。それだけだ」

それだけ言つと彼は再びスコップを動かし始める。

スザクはセグラントの答へに一瞬呆け、直ぐに自身も手を動かすのを再開する。

再開された作業は一つの声によつて中断される事となる。

「セグラント卿！ ここに居られましたか」

「どうした？」

「はっ！ 「一ネリア殿下がお呼びです。急ぎベースにお戻りください」

「分かつた。じゃあな枢木。ああ、そうだ。お前俺の代わりに」「この土砂掘ってくれ」

セグラントは自身を呼びに来た兵士に巨大なスコップを渡し、去つていった。

残されたのはいきなり巨大なスコップを渡され、重そうにしている兵士とスザク達だった。

残されたスザクは取り敢えず口々口口している兵士に

「スコップ交換しましょつか？」

とだけ言った。

「ナイトオブツー、参上しました」

「うむ。入つてくれ」

許可が出たことで部屋の中に入ると中には「一ネリアとコーフェニア」。

そしてギルバート、ダールトンがいた。

「一ネリアは席から立ち、セグラントに一礼をする。

「セグラント卿。まずは感謝を。貴君の活躍で私はこの通り五体満足で帰還できた。

感謝する。……さて、早速だが本題に入らせてもらおう。ギルバー

「は。今回の作戦においての目的は日本解放戦線の殲滅でしたが、

黒の騎士団の介入によ

り日本解放戦線における一部の上層部の逃走を許してしまいました。

その中には頭である

片瀬と藤堂とその部下四名も含まれています。ここで彼等の逃走を許せば再び我等の前に

立ち塞がるは必定。その為、急ぎ片瀬並びに藤堂等を捕縛する必要があります

「あ～、そいつらの逃げる先とかは分かんのか？」

「問題ありません。既に陸路は抑えてありますので彼奴等が逃げるには海路しかありません。現在、周囲一帯の港を搜索していますので直ぐに捕捉出来るでしょう」

ギルバートは一旦言葉を切り、コーネリアに視線を向ける。

「コーネリアは頷き、

「ついてはセグラント卿。再び貴君の力を貸していただきたい。今回の黒の騎士団の卑劣

極まりない行動で我が軍は少なくない損害を負ってしまった。しかし、この機会を逃す訳にはいかない。そこで貴君の名を使わせてもらひ」

「つまり、下がった士気を上げるための看板になれ、と？」
「その通りだ。頼めるか？」

セグラントは腕を組み考える素振りを見せるが直ぐにそれを止め、「了解しました。看板の任受けましょっ

「すまんな」

「構いません。一応自分の機体も持つて行きます」

「ああ、頼む。それでは解散だ」

「待つてください」

セグラントが部屋から出ると、後ろから声がかかる。

「ユーフュニア殿下。なんでしょうか？」

「いえ、お礼を」

「礼？」

「はい、お姉さまを助けていただきありがとうございました」

「深々と礼をするゴーフュニアにセグラントはどうしたものか、と思うが此處は素直に礼

を受け取る事とした。

「頭を上げてください。殿下。今回ゴーネリア殿下救出には特派のパイロットの活躍があつてこそ。その特派に出動命令を下されたのは殿下自身。殿下が俺、自分に礼をする必要などありません」

「それでもです」「それでもです」

ゴーフュニアはそう言つて再び頭を下げる。
どうにも居心地が悪くなつたと感じたセグラントは一晩三晩会話をし、その場を後にした。

「クラウン。調子はどうだ?」

専用のトレーラーに行くと、セグラントが持つて帰つてきた紅蓮の腕を見ながら何かを考えているクラウンがいた。

「おー、クラウン!」

「ん。おお、セグラント君。すまないね、少し考え方をしていた。どうしたんだい?」

「いや、ずっとその腕の前で唸つてるからよ。何か分かったか?」

「……分かったといつよい思い出したが正しいね。この腕どこかで見たことがあると思つ

たら昔、ロイ坊と一緒に研究室にいた奴がこんなのを開発してたな、と思つて出しだね」

クラウンはどこか懐かしむようにソラジリと呟つた。

「へえ、そいつの名前は？」

「ラクシャータ。ラクシャータ・チャウラー、彼女もまた天才だつた。私がラク嬢と呼ぶ

と嫌そうな顔をしていたがね」

「ふーん。そのラクシャータって奴の発明を敵方が持つてるのは……」

「恐らくは黒の騎士団にいるんだろうね。彼女も自身の発明を使つてくれるなら相手は問

わない性質だつたからね」

「ブリタニアじゃ駄目なのか？」

「ブリタニアにはロイ坊がいるからな。あの一人は仲が悪くてね。

見ている分には楽しい

のだがね。まあ元氣でいるといつことが分かつただけ良しとしよう

「まあいつか会えるだろうよ」

「それが処刑の時でなければいいんだがね」

「そればっかりは分からねえな」

「そうだねえ。ああ、話を変えるけれどブラッディ・ブレイカーはどうだつた？」

「悪くないどころか最高だ。まあ稼働時間が短いのがネックだが……」

セグラントの感想にクラウンは笑う。

「やつぱりそこか。でも安心してくれ。既に新型動力の構造は大体理解した。もうしばし待つてくれ。追加武装となるがエネルギー・パックの様な物を造る予定だ。そして、

もう一つ武装の開発を並行して行つている。こつちはまだ秘密だ」「気になるじゃねえか。まあいや。信頼してるぜ、博士」「任せておけ」

片瀬等が潜伏しているタンカーの居場所が判明した、と連絡が入ったのはそれからしばしの日にちが経つてからだつた。

セグラントはブラッディ・ブレイカーを載せたトレーラーでコーネリアの軍の後ろに待機していた。コーネリアは全軍に通信を入れる。

『勇敢なる騎士達よ。これより我々は日本解放戦線の首領片瀬、並びにその部下を捕縛する。何があるうとも恐れるな！ 後ろにはナイトオブツー、セグラント卿が控えている！

現地に到着したならば事前に説明した通りに展開しろ。そして私の合図で行動を開始するようだ。分かつたか！』

『イエス、コア・ハイネス！』

港に到着したコーネリアの軍は精銳の名に恥じぬ速度と練度を持つて部隊を展開し、

後はコーネリアの合図を待つのみとなつた。

コーネリアの駆るグロースターがサッと手を上げ、振り下ろした。部隊が片瀬のタンカーを拿捕せんと、飛び出していく。それに伴い、何機かの無頼が気づき迎撃に当たる。そこかしこで銃撃戦が繰り広げられる。

『片瀬を逃がすな！』

コーネリアの号令の下、タンカーに接近しようとするが、無頼がそれを阻む。

そうしている間に片瀬を乗せたタンカーが出航を始める。

『マズイ！ このままでは逃げられるぞ！ 逃がすな！』

ギルバートが叫ぶが、既にタンカーは沖に出てしまった。
しかし、次の瞬間。

片瀬を乗せたタンカーが光り、爆発した。

突如大爆発を起こしたタンカーにその場にいる全員の動きが一瞬止まる。

その一瞬が命取りとなつた。

大爆発を起こしたタンカーにより津波が引き起こされたのだ。
津波は敵味方関係なく飲み込み、流していく。
助かつたのは一瞬の内に何が起きたのか理解した者達だけだった。
「まさか、自害するとは……！ 態勢を立て直せ！」
ギルバートの叱咤が飛ぶ。

しかし、悪い事というのは重なる物である。

『見ろ！ ブリタニア軍の足並みは乱れたぞ！ 黒の騎士団よ、ブ
リタニアに鉄槌を！』

「黒の騎士団だと！？ こんな時に！」

横合いから現れた黒の騎士団に乱れていた足並みが更に乱れる。
コーネリアは何とか立てなおそうとするが、横から黒の騎士団による猛攻を受けては立て直すのにも時間がかかる。

後方からそれを確認していたセグラントはクラウンに声をかける。

「クラウン、出られるか？」

「勿論。稼働時間に気をつけてくれ」

「ああ、往つてくる」

黒の騎士団の猛攻は足並みの乱れたコーネリア達の戦力を少しづつだが削っていく。

ギルバートやダールトンといった猛者は攻撃を上手く凌いでいるが、彼等の部下はそうではない。

『死ねえ！ ブリキ野郎！』

黒の騎士団の無頼が振るうスタントンファードがコクピットに直撃せんとし、兵士は田を

瞑るが、いつまで経つても衝撃は来ない。

恐る恐る田を開くと、そこには自身を狩ろうとした無頼の姿はなく、

いたのは一機の異形。

異形は無頼を咥え、噛み砕いていた。

『セ、セグラント卿！ 助かりました！』

「おひ。さつさと戦友を拾つて下がれ」

『イエス、マイロード！』

『ゼ、ゼロ！ 奴だ！ 魔竜が出てきた！』

玉城の悲鳴混じりの声を聞きながらルルーシュは仮面の中で苛立ちを露にする。

「（くつ、奴が現れる前に何とかして藤堂等を連れて行きたかったのだが……っ）

全員に告げる！ 魔竜とは戦うな！ 撤退だ！」

ルルーシュは指示を飛ばしながら、田の前のブラッディ・ブレイカーに通信を入れる。

『初めまして、私の名はゼロ。貴様は一体何者だ？』

画面の奥の男は歯を剥きながら笑った。

「初めましてだ、ゼロ。俺はナイトオブラウンズが一席。ナイトオブツー、

セグラント・ヴァルトシュタインだ。ここでお前を噛み砕けば全て

は終わる

『（ヴァルトシュタインだと……？）それは困るな。私にはまだやることがあるのだ。

今日はここで失礼をせてもらおう』

ルルーシュはせつ無い、無頼を反転させ、その場から立ち去る。

セグラントは去っていく黒の騎士団を見ながら、『クピットでぼやいた。

「あー、本来なら追いたい所だが、今の『イッじゃ追う距離にも限界があるからな。

クラウンに早いと『Hネルギーパックを造つてもらわなくては

後始末（後書き）

最後はゼロとの会話でした。これからどう展開をさせてこいつかな…
…。

帰還命令（前書き）

遅くなりましたが投稿いたします。

帰還命令

日本解放戦線のリーダーであつた片瀬の死亡。そして実質的に日本解放戦線を率いていた藤堂とその配下四聖剣の捕縛。

コーネリアはこの一つのニコースをエリア1-1中に流した。

何故、情報を流したのか。

それはこの一つのニコースを使い、エリア1-1に残る反抗勢力の動きを抑えようと考えたからである。

藤堂等はチヨウフ基地へと投獄され、近いうちに処刑されるらしい。

この時の死刑執行人はコーネリアの指示によりスザクが任命された事となつた。

世間が騒がしくなる中、セグラントの下に父、ビスマルクからの直通通信が入つた。

『久しいな、セグラント。お前の活躍は聞いている。一先ずは良くやつたと言つておく』

「親父に褒められるなんていつぶりだ？ 明日は槍でもふるんじゃあないのか？」

『ふ。安心しろ、これから説教する所だ。まあ、なんだあの戦い方は！ 騎士どころか

ただの獣の様な戦い方ではないか！ 私は常日頃から言つているだろう。騎士たれ、と。

それだというのにお前ときたら、何時まで経つても……』

まさかこの親父は説教をするためだけに直通通信を使用しているのだろうか。

親父ならあり得るな、と思いながらもセグラントは取り敢えず会

話を逸らしてみる事に

した。

「親父、説教は帰つてから受ける。何か用があつたんじゃないのか？」

『む。そつだつたな。お前の顔を見るといつこ説教をしたくなつてしまつから困り物だ。』

セグラント、皇帝陛下からのお言葉だ。一度本国に戻つてここ』

「今、戻るのか？」

『そうだ。至急戻つてここ』

「分かつた。コーネリア殿下とかに挨拶をしたらそちに戻る」

セグラントはそつ言い、通信を切ろうとしたところで、

『帰つてきたら説教の続きだ。お前が帰つたら受けると言つたのだから逃げるなよ』

と言い残し通信は切れた。

「……帰りたくねえ～～」

帰れば説教といつ名のファイトが始める事を知つたセグラントは重い足取りで

コーネリアのいる総督室へと向かつていた。

「コーネリア殿下。セグラントです」

「……入れ」

部屋に入ると中ではコーネリアが眉間に皺を寄せていた。

「どうかしたので？」

「セグラント卿か。何先の一戦において何故こいつも黒の騎士団に裏をかかれたのかを考えていたのでな」

「ああ、確かに。黒の騎士団は的確に俺達の作戦を読んで配置してきましたからね」

「その通りだ。セグラント卿、貴君はこの事をどう考へる？」

「コーネリアの質問にセグラントは軽く腕を組みながらい

「まあ単純に考へるならば内通者がいるんじゃないですかね」

「おやつはおやつで、おやつ以外のことは何でもないのか。」

に車を洗うぞ。

準備を進めておいてくれ」

イエス二万・バイオレット

リナ・ルーラーは部屋に残ったアガラシトに向かい、

ニハリ一ノ三品處に列、かせハヨシニニヨガリ

よつことの命令を

受けた。貴君が訪ねてきた理由もそれだろう?」

ええ、まあ。既に話が通つてゐるなら早いですね。自分は撤収準備

儀を絶え次第本国へと

をうか、と言ふ。「ニネリアは席を立ち、敬礼をする。

「アグランチ殿、貴重の今までの助力に感謝する」

セグラントもたどたどしいながら答礼をし、部屋を後にした

総督室に行く前に撤収準備をクラウンに頼んでいたので、部屋を後にした頃には既に

時の彼の反応は、

「本當か!?」いや、良かつた。こここの設備では新装備を開発できそうになかったんだ。

ロイ坊の所に行けば出来るだらうが、なんとなく癪でね

と書いており、エリアー自身に未練はまったく無いようであつ

た。

プラッディ・ブレイカーを積んだ大型輸送機の下に着くと、そこにはダールトンが立っていた。

「ダールトン将軍。どうしたんだ？」

「別れの挨拶でも、と思いましてね」

彼はそう言って手を差し出してくる。

ダールトンの意図を理解したのかセグラントは笑みを浮かべながらその手を握り、

お互に力をいた。

「ぬうううううううう」

「ふん」

彼等の手の骨が悲鳴を上げる。

先に力を抜いたのはダールトンだった。

「やはりお強いですな。最初にお会いした時は手加減をされていたのですな」

「ふん。それはダールトン将軍も同じだろ。それにしてもナイトオブラウンズ相手に

無言で握力勝負を仕掛けるとは。俺じゃなかつたらアウトだ」

「ふ。分かつてやつたのです。そして貴方はやはりお強い。これからブリタニアを

支えるのはやはり貴方のような若者だ。……セグラント卿、短い間ではあつたが貴君と

共に戦えた事誇りに思う。貴方の事は息子達にも伝えます

「息子がいたのか？」

「まあ実の息子ではないのですがね。ドイツもコイツも愛しい馬鹿息子ですよ」

そう言つて笑うダールトンの顔はビスマルクの笑顔と何処か似ていた。

本国へと戻ったセグラントはすぐに皇帝とビスマルクが待っているであろう謁見の間へと向かつ。

「ナイトオブツー、セグラント・ヴァルトショタイン。只今エリア
11から帰還いたし

ました」

「うむ、ご苦労。楽にしてよい」

皇帝の言葉でセグラントは真っ直ぐ伸びていた背筋を少し丸めた、瞬間。

「いきなり姿勢を崩すな！」この馬鹿息子があー。」

だ。

「こきなり何しやがる！ 粪親父！ 叔父貴が姿勢を崩していいつ
て言つてから崩つて」

んだろうが！

「それでも崩さぬのが騎士だ！」やはり貴様には一度徹底的に礼儀

۴۷

の骨をゴキゴキと鳴らしながら、ついでベビスマルクに対し

て

皇帝が姿勢を直す為に椅子の上で本を

という音がゴーング

となつた。

「今田こそ勝たせてもらうぜ！」
親父いいいいいい！」

ફોન્ડેશન આર્કિવ્

両者は手と手、頭と頭をぶつけ合いその場で動かなくなる。

端から見て何をしているのかは分かりづらいが、彼等の足元に視

線を移すと強大な

力と力のぶつかり合いにより床が悲鳴を上げているのが分かる。

そのまましばらく拮抗が続くかのように思えたが、セグラントが一度頭を引き、

ヘッドバットをかます事で状況が動いた。

「はつはあ！ 僕の方が頭蓋骨が硬いのは3年前で判明してるからな！」

「ぐ、ぬ。調子に乗るでない！」

ビスマルクは敗けじと膝頭をセグラントの水月に叩き込む。

「ふん！ 腹筋の鍛えが足らんようだな！」

「急所を狙つておきながら何を言つてやがる！ この技ならどうだ

！ 地獄丸固め！」

セグラントの複雑怪奇な関節技は見事に極まり、ビスマルクの表情に苦悶が浮かぶ。

しかし、これしきで倒れる漢であればナイトオブワーンは務まらない。

ビスマルクは唯一動く片腕でセグラントの指を掴み、折ろうとする。

セグラントは余りの痛みに関節技を解いてしまった。

「クソ！ 決められなかつた！」

「まだまだ。これからよ！」

両者が再び向かいあつた時、謁見の間の扉が開き、一人の女性が乱入してきた。

「皇帝陛下！ 何事です……か？」

乱入してきたのはモニカだった。

モニカは謁見の間に入るや否や視界に飛び込んできた光景に固まってしまう。

何故なら、謁見の間で喧嘩を繰り広げる親子など見たことが無かつたからである。

「セグラントにビスマルク卿！ 何をしてるんですか！？ という

か皇帝陛下、止めなくていいんですか！？」

「ふむ。技のビスマルクと力のセグラント。両者の実力は拮抗してきたな。

む。我が騎士モニカではないか。びついたのだ？」

「いえ、止めなくていいのですか？」

「……。そうであるな。そろそろ止めるといひや。両者一、そこまで！」

皇帝の一喝が謁見の間に響き渡り、セグラントとビスマルク両者は再び取つ組み合つ

直前で止まつた。

「皇帝陛下！ 申し訳ありません！ つい熱くなつてしましました

！ いかような罰も

お受けいたしますのでお許しを！ お前も謝らんか！」

「痛え！ 腹を殴るな！ といつか親父が先に仕掛けてきたんだろ
！ まあいいや。

叔父貴、済まなかつた」

一人は揃つて頭を下げる。

その息の合いようは血が繋がつていなくとも確かに親子なのだな、
とモニカは感じた。

そんな二人のいつもの光景に皇帝の口角が僅かだが上がる。

「ビスマルクよ、良い。我が樂にせよ」と言つたのだ

「しかし、陛下…」

「叔父貴が良いつて言つてんだからいいじゃねえかよ

「お前は少しばかり反省しろ…」

「だから痛えつての。叔父貴、何で俺を呼び戻したんだ？ あのま
ま残つてれば

エリアーは平定出来たぜ」

「つむ。実はE.Uの戦線で奇妙な動きがあるのだ。念のためといつ
こともあり貴様を

呼び戻したのだ。我が騎士セグラントに新たな命を『』
ント、貴様はこれより

モニカ・クルシェフスキー並びにアーニャ・アールストレイムと共に
にEJへと向かえ

「私もですか！？」

突然の指名にモニカが素つ頓狂な声を上げる。

「つむ。安心しろ。我的護衛は現在EJにいるラウンズとジノに任
せる。つまりは交代だ」

「……いつ出ればいい」

「機体のメンテナンスを終え次第だ。良いな」

「あいよ、叔父貴。いや、イエス、コア・マジエスティ」

セグラントは礼をし、謁見の間から出て行つた。

「あ、ちょっとセグラント！ 待ちなさい」

モニカもセグラントを追うようにして出て行つた。

残されたビスマルクはセグラント達が完全に出て行つたのを見届
けてから、床に

膝を着く。

「成長していたか？」

「は。後少しども技量が身につけば超えられるでしょうな。一人の
騎士としては悔しい

ですが、一人の親としては嬉しいです」

「そうか。良い親子をしておるな」

「ありがたきお言葉です」

セグラントは本国にある自身の部屋へと向かう途中の廊下でアーニヤとすれ違つた。

「おう、アーニヤ。聞いたか、お前俺と一緒にEJだつてよ」

「そりなんだ。ふふ、楽しみだわ」

こつものアーニャからぬ発言にセグラントの顔が険しい物へと変わる。

「どうしたの、セグラント。そんなに険しい顔をしちやつて」

「お前、誰だ……？」

「ひどいわね。私はアーニャよ」

「いや、違う。よくわからねえけどお前はアーニャじゃねえ。もつ一度聞く。」

「お前、誰だ？」

セグラントは構えをとろいとするが、

「やつぱりバレるわよねえ。でも口調を変えるのが難しいのよ。貴方もそう思わない？」

セグラント。それにしてもあの小娘な子供がこんなに逞しくなるなんてねえ。

時が進むのは速いわ。あの子にも貴方の万分为一でも遅しさがあればねえ」

そう言つて頬に手を当てる誰か。

その仕草にセグラントの膝が自然と震える。

「その物言い、仕草。お、まままままままをか……ッ。お、叔母御ー？」

帰還命令（後書き）

次回、セグラントの天敵登場！
ダーレトン將軍かつこいいよ。

お楽しみに！

■ 伸びのエコ（福井県）

毎月更新出来ずにおつ、すこせんでした。

それでなお楽しみください。

再びのECHO

セグラントの膝がガクガク震える中、叔母御と呼ばれた人物は顎に当てていた手を離し、そのまま握り拳を作り、

「ふんっ！」

思いつきりセグラントの水舟に叩き込んだ。

「げふうつ！ 叔母御、いきなり何しやがる！？」

「何しやがる？ 叔母御？」

小首を傾げるが、その米神に青筋が浮かんでいる事に気がつく。

「あ、いや。何をしやがるんでしょうか、マリアンヌ様」

言い直した言葉に一先ず満足が言ったのか、マリアンヌは一つ頷き、

「うん。よろしい。ところで今私は何処から見てもピッチピッチのうり若き少女よ？」

そんな人物相手に叔母御はあんまりじゃない？」

とてもいい笑顔でそう言つた。

「ピッチピッチって思いつきり死語じやねえか。叔母御でいい氣がするぜ……」

セグラントは顔を逸らし小声で呟くが、

「何か言つたかしら？」

耳聴いマリアンヌに聞き取られそうになつた為、急いで話題を変える。

「何でもねえですよ！ それよりも何故叔母御が此処にっていうか

アーニャの姿で

いやがるんでしょうか？ 貴方は死んだ筈ですが？」

マリアンヌ・ヴィ・ブリタニア。

出身は庶民でありながら、KMF開発計画において多大な功績を

残した為、騎士侯と

なった人物であり、現役時代には『閃光のマコアンヌ』の異名を持つていた。

その高いKMF操縦技術は今でも多くの騎士の憧れとなっている。そして現在の神聖ブリタニア帝国皇帝シャルル・ジ・ブリタニアの皇妃となつた

人物である。

しかし、彼女は7年前にテロリストにより“殺害”された筈の人

物である。

「そうねえ。これは言つてもいいのか迷うわね。強いて言つならある夢と世界の為と
いつた所かしらね」

「答えになつてねえんですが……」

「うふふ。いつか知ることになるからその時を楽しみにしていいなさい。

……ん、そろそろ限界ね。セグラント、そろそろ私は一日消えるけど、

いい？ 私の事は他言無用よ。もしも喋れば……」

「喋れば？」

「うふふふふふふふふふふふふふ

マリアンヌはセグラントの疑問に答えること無くただ笑う。

「怖つ。分かつた、誰にも喋らねえよー。それでいいだろー?」

「そう、イイコね」

そんな軽い言葉を残し、マリアンヌの気配が消えてこいつとする寸前、

「叔母御！ 一つ聞かせてくれ。あんたのやつをしてこむ事は誰かが泣いたりする事はないのか？」

「当然よ。私の目的に涙はいらぬもの」

彼女が消えると同時にアーニャが目を覚まし、辺りを見回す。

「ここは。……セグラント?」

「お、おう。アーニャ」

「私、何でここに? また勝手に……」

彼女は携帯を取り出し、色々な写真を見始める。

しばらくの間、写真を見た後、

「セグラント。私はどうしてここにいるの? 私は何をしていたの?」

不安気な瞳でセグラントに詰め寄る。

その瞳には涙が浮かんでいた。

それはそうだろう。

誰も自身の中にもう一人いるだなんて信用しない。

しかも、自身の体を勝手に動かしているのだ。

その間の記憶がないのだから彼女が不安になるのも無理はない。

ここでセグラントがマリアンヌの事を話せればいいのだが、彼もマリアンヌに口止め

されているため、話す事は出来ない。

どうしたものか、と考えたすえに彼の取つた行動は、

「ようと」

アーニャを持ち上げる事だった。

「セグラント?」

「あー、あれだ。アーニャ。お前さんは色々不安だろうが、なにも悪い事は起きてねえ。

安心しろってのは無理だろうが、あんまり気にすんな。つて気にすんなってのも無理か。

どうしたもんだろうなあ。(何が誰も泣かない、だ。既に一人泣かしてんじゃねえか。

叔母御よお)」

EU戦線。

ブリタニアの猛攻によりEUの八割は陥落したのだが、残る一割に各地に散らばって

いた残存勢力が集まりブリタニアの猛攻を上手くしのいでいる。

そのEUだが、近頃不穏な動きが多くなっていた。

EUは戦力を小出しにし、ブリタニアの陣容、戦力を確認するだけにしており、

一度ブリタニアの猛攻が始まると、抵抗を殆どせずに撤退をしていくのである。

「ローディー司令！ 交代のナイトオブランズ方々が参られました！」

「……お通ししろ」

部屋に入ったセグラント達を迎えたのは懐かしい髭面の男、ローディーだった。

「ローディー司令。お久しぶりです」

モニカが真っ先に挨拶をし、それに追従しアーニャ、セグラントも挨拶をする。

「お久しぶりです。クルシェフスキーワーク、ヴァルトシュタイン」「司令、敬語なんて使わないでくれよ。あんたに敬語を使われると背中が痒くなる」

「……そうか？ まあ天下のナイトオブリーから許可が出たんだ。敬語は止めさせて

もらおう」

「止めるの速いわね」

モニカのツッコミが入り、その場にいる全員の顔に笑みが浮かぶ。

ひとしきり笑った後、ローディーは顔を引き締め、

「さて、ここからは眞面目な話だ。現在我々はEU攻略の最終段階

にいる。本来ならば

このまま一気呵成に攻め込みたい所なのだが……

「攻めればいいじゃねえか」

「それが出来ればいいんだがな。どうにもきな臭いのだ」

「どういう事でしょうか？」

モニカの質問に顎の鬚をいじりながら、

「誘われている。そう思えてならんのだ」

「その根拠は？」

「既に相手方の土地は殆ど残つていない。だとこゝのに撤退が早すぎるのだ。

なにより戦力を小出しにしてきている」

「その事を総司令には？」

「当然伝えている。しかし、今の総司令は何と言つか……」

ローディーは言い辛そうに口をモゴモゴと動かす。

「君たちがいた頃の総司令はショナ・ナイゼル殿下だったのだが殿下は八割を攻略した時点で

本国へと帰還してしまい、代わりに来たのが今の総司令なのが……。

「……。その、思慮が足らんのだ。一言田には誇りだの突撃だの、で。正直に言つと相手の動き

よりも総司令の方が怖い」

ローディーの顔は苦渋に満ちており、その事から彼の今までの苦労が推し量れる。

モニカに至つては、ビニからか取り出した白いハンカチで涙を拭つていた。

「……司令。次の作戦行動はいつだ？」

「補給物資が届く時。予定通りならば一週間後だ。次の作戦行動ではお前た全員に出撃

してもらいたい。理由は言わないでもいいだろ？」「

「威嚇と士気向上」

アーニャはポツリと呟くとローディーはその答えに満足したのか頷く。

「その通りだ。特にナイトオブツー、セグラント卿の異名はEJISHIでは特に有名

だからな。……なにせ猛獸のあだ名が生まれたのはEJISHIだからな

「……猛獸」

「ああ。アーニャはセグラントの戦い方を映像や資料でしか知らないよね。彼の戦い方は色んな意味で凄いわよ」

モニカは苦笑を浮かべながらも言つ。

「だが、その戦いは確実に相手の士氣を下げ、EJISHIの士氣を上げる。

頼りにさせてもらひうぞ」「

「任せておいてくれ」

セグラントとローディーは固く握手を交わした。

ローディーは握手を解き、

「この後、何の予定もないのであれば食事でも共にどうだ？」

そう、誘ってきた。

特に予定も入っていない三人はそれを了承しようとした時だった。

司令室の通信機が鳴った。

「……どうした？」

「ローディー司令っ。補給物資の一部が盗難に！」

「なんだと！？ 警備は何をしていた！ 盗まれた物資は何だ！」

「そ、それがKMFの廃材と流体サクラダイトです」

被害報告をする兵士の答えるにローディーの顔に疑問が浮かぶ。

「流体サクラダイトは分かるが、KMFの廃材だと？ 何が目的なのか分からんな。

監視カメラには何か映つてはいなかつたのか？」

「それが、カメラには白衣しか映つておらず、顔が分からないのです。

ただ、背丈から判断するにそれなりに歳は取つてていると思われるのですが……」

受け答えをする兵士の言葉にセグラントの脳裏に一人の人物の顔が浮かび、額に汗を流し始める。

隣をチラリと見ればモニカも同じ答えに辿りついたのか、彼の方を見ている。

彼女はセグラントの横腹はつつき、

「（ねえ、犯人ってあの人じゃないの？）」

「（多分な。いや、だがまだ確定したわけじゃあ……）」

セグラントが否定しようとした時だった。

彼の携帯が鳴る。

ディスプレイに表示された名前はクラウン。

セグラントの額に流れる冷や汗の量が増えていく。

恐る恐ると通話ボタンを押す。

「セグラントだ」

「やあ。今大丈夫かい？ なに、新装備というかバックパックが完成したからな。

見に来て欲しい」

「クラウン。そっちに行く前に一つ聞いておきたい。その素材をどこからか調達してきた？」

「うん？ 大体は自前だけど途中で少し足りなくなつてな。ここにあつたKMFの廃材と

流体サクラダイトを少し頂戴したよ」

その答えを聞いたセグラントは額に手を当てる。

その動作で察したモニカがやつぱりね、と呟いていた。

「クラウン。今少し取り込んでいる。まああと少ししたらそれから

向かう

「分かつた。待っている」

通信を切つたセグラントは未だ通信機の向こうにいる兵士と会話をしているローディーに声をかける。

「ローディー 司令」

「なんだ？ 食事はすまんが後にしてくれ。やるべき事が出来た」「いや、その事なんだが……。犯人が分かつた」

「なに？」

セグラントはモゴモゴと口を動かし、犯人の名前を告げる。
「司令もよく知る人物。俺の専用機を開発した、クラウンだ」
その名前を口にした途端、ローディーは顔をしかめ、
「ああ……」
それだけを呴いた。

再びのECC（後書き）

はい、天敵こと叔母御、マリアンヌ様！」登場です。そしてアーニャとのフラグ。

いえ、まだヒロイン迷っているんですけどね。

何と、逆お気に入り数が450を突破し、456となりました。皆さん、ありがとうございます。とても励みになります。なにか一発ネタでもやつたほうがいいんでしょうかね？ そんなこんなで少し見てみたい一発ネタを募集いたします。まあ、他の連載もありますので一つのみですが、ぜひご意見をください。皆さん、ありがとうございます！

総司令の資質（前書き）

スパロボが面白くて止まらない今日このごろです。

総司令の資質

資材を盗んだ犯人がナイトオブラウンズ専属の技術者である事が分かつた事により、

資材泥棒の件は一先ず解決したといつてもいいのだろう。

ローディーとしては犯人が害の無いとは決して言えないが、自國に損害を齎す人物で

ある事に安堵したが、物資が盗まれたなどという事を外部に、特に敵方に知られる訳には

いかないので、クラウンが盗んだ物資で開発したセグラント専用機の装備を彼等と共に見に行くこととした。

装備の詳細を知り、あの物資は予めその為に運ばれてきたものであるとするためだ。

格納庫へと続く道を歩きながら、ローディーはため息をつく。

「まったく。あの博士は……。持つて行きたいのならば何か一言でも言つてくれれば

良い物を。そうすればここまで騒がれる事は無かつたといつに」

…。セグラント、

君からもあの博士に言つておいてくれ

「なんつーか、すんません」

「ようやく來たか。遅かったじゃないか

「遅くなつたのはお前のせいでもあるんだがな……」

セグラントの咳きは聞こえなかつたのかクラウンは先に格納庫の奥に歩いて行く。

奥には例の如く黒い布を被せられた機体が鎮座していた。

「また黒い布か……」

「当然だ。これは一種の儀礼の様な物だからな。科学者たるものこのういった心を忘れては

ならない、というのが私の持論だ」

「お前の持論かよ」

握りこぶしを作りながらそう熱弁する彼に対する周囲の反応は様々なものだった。

モニカは少しひき、アーニャはそんなクラウンを写真に収め、ローディーは額に手をやっていた。

セグラントもクラウンには慣れた物で余り気にする事なく話を進めるように促す。

「おお、そうだった。まあ見てくれ！　これが私が作り上げた新兵装！」

クラウンは宣言し、黒い布を剥ぐ。

現れたのはセグラントにとっての愛機にして相棒のブラッディ・ブレイカー。

しかし、細部が彼の知るブラッディ・ブレイカーとは違っていた。背部に取り付けられていたガトリングが外され、代わりにバックパックが

取り付けられていた。

バックパックからは一本のチューブがあり、それぞれがブラッディ・ブレイカーに接続されている。

「ガトリングの位置が変わったな……」

「まあ背部は取り敢えずだつたからな。だが、移すだけの価値があるバックパックはある」

クラウンの顔には自身が開発した物に対する絶対の自信が浮かんでいた。

その顔は自慢の玩具を紹介する子供の様でもあった。

彼は白衣から一本の棒を取り出し、ブラッティ・ブレイカーを指しながら語る。

「今までのブラッティ・ブレイカーの一番の弱点は稼働時間の短さだ。

これでは如何なる戦場でも勝利を得る事が出来る機体には程遠い。そこで作ったのがこの装備だ。これの中にはエナジーフィラーが詰められている。これを横にしている

チューブを用い循環させる事により、動力であるコグドラシルドライブの稼働時間を大幅に伸ばす事が出来たのだ。これはまだ計算でしかないがこの装備ならば

ブラッティ・ブレイカーの稼働時間は今までの4倍！　どうだね、凄いだろ？！」

手を大きく広げ、感想を求める。

周りは彼の高いテンションについていくことが出来ずただ呆けるばかりである。

一番最初に感想を送ったのはやはり、といつべきだらうかセグラントであった。

「クラウン！　ありがとよ！」

「おお、やはり君ならば分かつてくれると思ったっていた！　さあ、早速動かそうじゃあ

ないか。そして私たちに敵は無い、ということを証明しようではないか！」

クラウンは感極まつたのか目尻に涙を浮かべながらセグラントと肩を組み、

夕陽に向かつて叫ぶ。

ローディーは夕陽に向かつて叫ぶ彼等にただ一言告げる。

「……せめて出撃命令が出るまでは待ってくれよ」

クラウンの開発騒動から一週間経つた今でもそれは変わらず、現在の戦線はお互いに

様子見といった所である。

ブリタニア側は大攻勢に向けての物資の調達、機体の整備などで動かず、E.U.側は

基本は自ら動こうとしない為、戦場であるE.U.には一時の平和があった。

この平和が打ち破られたのは、それから更に一週間が経過してからの事であった。

セグラント達は総司令に呼ばれ、総司令の下に向かっていた。

総司令室までの廊下は他の場所と違い、戦場とは思えない程の華美な調度品や

芸術品が並んでいた。

セグラントは調度品の一つである壺を指で軽く弾く。

「ここは戦場の筈なんだがな。なんだ、この壺やら絵画は……」

「総司令の趣味でしょ。それにしてもここにある物、どれも見たことのある物ばかりよ。

貴方が今触った壺もブリタニアのサラリーマンの平均年収十数年分は必要なはずよ」

モニカの言葉にセグラントは眉間に皺を寄せた。

「そんな高価な物、持つてくんないよ。……で、アーニャ。お前はさつきから何をしてる

「……撮影？」

「いや、首を傾げながら言われてもよ」

話しながら廊下を進むと、総司令室の扉と警備の軍人の姿が見えた。

軍人はセグラント等の姿を確認すると敬礼をする。

「ヴァルトシュタイン卿、クルシェフスキー卿、アールストレイム卿ですね。

総司令室がお待ちです。どうぞ中へ」

軍人は敬礼を解き、扉を開ける。

三人はその軍人に適当に礼を言い、中に入る。

「おお、よくぞ来てくださった。初めまして、ダイアン・フォノリックです」

挨拶をしてきた人物は大きくお腹を揺らしながら三人の方に向かい、手を差し出す。

「お、おお。よろしく頼む。あんたが総司令でいいんだよな?」

「ええ、そうですとも! シュナイゼル殿下に言われましてね、こうして総司令を

やらせていただいております」

ダイアンは笑いながら、顎をさする。

傍目から見ても分かる程の贅肉に包まれた体からは軍人の雰囲気は一切感じられない。

セグラント達は何故彼が総司令を任せているのかが分からなかつた。

「失礼ですが、フォノリック卿。貴官は何故、このEU戦線の総司令として任命されたのでしょうか?」

「うか?」

モニカの質問に対し、ダイアンは

「さあ? 非才なこの身ではシュナイゼル殿下のお考えを察する事など出来ませんな。

ただ分かるのは任されたからには神聖ブリタニア帝国の誇りを持つて敵を打倒するべき

だという事のみです。まあ、私には一片の武才も無いのですがな」

そう言って笑うダイアン。

「……。フォノリック卿、私たちを呼んだ理由はなんでしょうか?」

「おお、その事なのですがな。特に理由は無いのですよ、ナイトオブランズの方々と

話をしてみたかったというのと、次回の戦場ではぜひ頑張っていた
だきたいのでその激励

といった所でしょうか。どうですか、この後一緒に食事でも」
「いや、すまねえが先にローディー司令に誘われてるんでな。また
の機会に頼む」

「おや、そうでしたか。それは残念。それではまたの機会に。ああ、
用は済みましたので

退出していただいて結構です」

ダイアンはそう言いつと腹を揺らしながら再び席に戻つていく。
これ以上此処にいても仕方がない、と判断した三人もまた部屋から退出した。

「よく分からんオッサンだつたな。なんであれが総司令なんだ?」

「……分からない。でも、すごいお腹だつた」

「やうだな。アレほどの腹は見た事がねえ。……とにかくモニカ、
さつきから

何を考えてんだ?」

セグラントは部屋を出てから一言も喋らないモニカの方を向く。
彼女はずつと何かを考えており、整った顎に手をやり、唸ついたかと思えば、

「思い出した!」

「そう叫んだ。

「いきなり叫ぶな。何を思い出したってんだよ」

「御免。あのフォノリック卿の事よ。どこかで聞いた事があると思
つたら、彼は確か

武才は無いけど土地経営、とか治政においては相当な切れ者だ
つた筈よ」

「本当か? あのオッサンが?」

セグラントは疑問を浮かべるが、横にいたアーニヤが携帯で調べ

た結果を見せた。

「……ダイアン・フォノリック辺境伯。確かに彼の土地の治安はブリタニアでも

五指に入る位に良い」

「つまりなんだ。あのオッサンは戦争では役に立たんが、その後の治政で凄えと？」

「おそらくね。シユナイゼル殿下が後釜に置く人物だから何があるとは思つてたけど。

まさか、勝つた後の事を考えての人選だつたなんて……」

「色々と早すぎねえか？」

「多分、シユナイゼル殿下の考えだとE.I戦は直ぐに終わる予定だったのでしょうか。

それがE.I側の不可解な動きで予定が狂つたんじゃないかしら？」

モニカの考えに納得したのか、セグラントは頷きながら

「つまり、さつさと戦いを終わらせろ、と？」

歯を剥き出しにしながら笑った。

モニカはそんな彼を見て苦笑いを浮かべる。

「そういう事ね。アーニャ、良く見とくのよ。これが猛獸たる所以よ

「……記録」

総司令の資質（後書き）

なんだかグダつてすいません。もっと物語にメリハリを持たせられるよう頑張ります。

闇話 愛する祖国の為に（前書き）

久しぶりの更新となります。

最初に謝らせて下さい。近頃またくと書いていいほど文章が書けず、ようやく完成したこの話も凄く短くなってしまいました。次回は長くあるつもりです。

それではお楽しみ下さい。

閑話 愛する祖国の為に

EU戦線、西地区。

EUとの戦いが最も激しい地区であるこの場所は常に火薬の匂いと何かが燃える匂いが絶える事がない。

そして、今また新たに一つの黒煙が爆発と共に起きた。

爆発の起きた方向に目を向ければ、そこには異形のKMF。ブラッディ・ブレイカーの姿がそこにあった。ブラッディ・ブレイカーは両後ろ足に取り付けられた武装、ブレイカーユニットを操り、自身の周りに展開している敵機を破壊していく。

「おらっ！ 邪魔だ！」

セグラントは今、また一機のKMFをその腕に捕らえ、持ち上げる。

持ち上げられたKMFは拘束から逃れようと、暴れ回るが、強靭な鍔に完全に捕らわれ、抜け出す事が出来ないでいた。

「くそつ、放せ、放せ！」

暴れるKMFに対し、セグラントは何かを言つでもなく、ブレイカーユニットの出力を上げていく。

出力が上がる事により、捕らわれたKMFの装甲が悲鳴を上げる。

装甲に鱗が入り、四肢が壊れていき、そして、切断された。

切断されたKMFが地面に落話し、戦場に土煙を上げる。

この時、周囲にいたEJ軍は味方を助けようとしていたが、それが叶う事はなかつた。

何故なら、彼等もまた危機に陥つてゐるためだ。

彼等の前には一機のKMF。

一機は黄緑色を基調とした騎士然とした機体。
ナイトオブシックス、アーニャの機体モルドレッド。

そして、もう一機。

赤紫を基調とし、全身を分厚い装甲で覆われた機体。
ナイトオブシックス、アーニャの機体モルドレッド。

この二機が彼等の前に立ちふさがつていた。

彼女等は重装甲であり、防御に優れているモルドレッドを前に出す形を取つていた。

EJ側の攻撃はその殆どがモルドレッドによつて防がれ、その隙に後ろに立つフロント
がアサルトライフルによる銃撃で敵機を狩りとつていく。

敵機がモニカの銃撃により、一箇所に固まつた所でアーニャはすかさず自身の

モルドレッドの両肩装甲を取り外し、巨大な砲門 四連ハドロン

砲を造り上げる。

「……チャージ完了。撃つ」

アーニャの眩きに反応し、前に出ていた味方機が下がる。
その動きを見たE.U側もまた散開しようとするが、

「……遅い」

ハドロン砲が発射された。

砲門から発射されたエネルギーの奔流は射線上にある全てを削り、
破壊していった。

後に残されたのは、K.M.F.であつた残骸だけだった。

時に大胆に、時に纖細に。

モニカとアーニャの即席コンビは多大な成果をあげていた。

E.U側のK.M.F.が半分程に減つた所でE.U側の動きに変化があつた。

彼等は突如として退却を始めたのである。

当然の事ながらセグラント達はそれを追撃しようとするが、相手には地の利がある事もあり、追撃は失敗に終わる事となつた。

追撃に失敗した事に加え、エナジーフィラーが心もとなくなつて
きた為、セグラント達は一度基地へと帰還していた。

ナイトオブランズの機体は優先的に整備されるといえ、それ
である程度の時間は

空いてしまう。

その間に彼等は格納庫の隅で互いに感じた事を話していた。

「急に逃げ出したな。これがローディー司令の言つてた不可解な動きつて奴か。

確かに奇妙だつたな」

「ええ。まるである時刻、いえ、部隊が一定数に減つたら撤退を始めた感じだつたわ」

モニカの言葉にアーニャは自身の携帯を操作し、ローディーに送つてもらつた

資料を出す。

「それ、正解かも。……」

そこには今までのE.I.I軍の動きがレポートされており、いずれもが自軍の半分を損耗した

所で撤退をしていた。

それもただの撤退ではなく、倒れた味方に脇田も振らずに一直線に退却していくのだ。

まるで、そうしなければいけないかのよう。

「だあああ、訳が分からん。E.I.Iは一体何を考えてんだ！？」

セグラントは頭をガシガシと搔きながら吼える。

彼の言葉にモニカ達も頷くが、いくら考えても答えが出る事は無かつた。

「ナイトオブラウンズの方々！ 整備完了しました！ いつでも出られます」

整備兵の言葉を聞き、思考を一旦中止し、

「まあ、考えても分からねえなら今はひたすらに戦えばいいだけだよな」

そう言つた。

セグラントのその言葉に一人は苦笑いをしながら、それしかないか、と言い、

彼等は自身の機体へと向かう。

その心中に得も知れぬ不安を抱えながら。

E.U軍に残る数少ない軍事基地の一つに存在する司令部には三人の人物がいた。

彼等は全員が軍服を来ており、その胸には多くの勲章がついている事から三人は

いずれもが高官である事が判断出来る。

「中将、戦線は？」

「敗北寸前といった所ですね。やはり、ブリタニアと我が軍の間ではKMFの性能に差がありすぎます。さらには、ナイトオブラウンズの存在が大きいですね」

中将と呼ばれた男は淡々と事実のみを語つていく。

その発言に感情は感じることは出来ない。

「やはり、戦力の差はどうともならんか。参謀長、アレの準備は？」
「八割の設置が終わっています。しかし、元帥、本当にやるつもりですか？」

今更ですが、私は今一度考え方を進言いたします

「……分かつてている。だが、最早我が軍には新たな作戦を考える程の余裕は無いのだ。

ならば、行うしかあるまい」

元帥は一度言葉を切り、深呼吸を行い、一人を見つめる。

「私がやろうとしているのは最低の行動だ。だが、E.Uを、祖国を、誇りを護りたいという

想いに偽りは無い。貴官等はどうだ？」

「愚問です、元帥」

「その通りです。先程の考え方直すべきであるといつ発言も參謀長としての言葉であり、

「私個人の想いは元帥と変わりません」

「すまない。私と共に大罪人となつてくれ。全ては……」

「全ては」

「全ては」

「「「愛する国の為に」「」」

誇り故に（前書き）

遅くなりました。これにてE-H戦線は終了となります。
それでは、どうぞ

誇り故に

ブリタニアによるEHO侵攻もブリタニアの勝利といつ形で幕を閉じようとしていた。

EHO側に残されたのは僅かな領土と全盛期の三分の一にまでなってしまった兵团、

そして決死の覚悟であった。

背水の陣の如く布陣し、ブリタニアの軍勢と正面から向き合ひ。セグラントはそんなEHOの様子を望遠カメラで見ていた。

「決死の覚悟が見えるな。これは、一筋縄じゃあいきそうにねえな」彼の横にいるモニカやアーネも同様の感想だったのか、彼の言葉に同意した。

「それでも、私達ナイトオブランズが戦場に出る以上ブリタニアに敗北は許されないわ。

分かつてるとどう?」

モニカはセグラントの言葉を弱氣と取ったのか、軽く諫めるような口調で注意を促す。

「分かつてらあ。俺達に敗北は許されず、あつてはならない、だろ。さあ、始めようか!」

「いや、開戦はまだだから」

モニカがセグラントの言葉に突っ込みを入れる。

その時だった。

「ナイトオブランズの方々! 出撃をお願いします!」

「……だつて」

「うう。突っ込んだ私が馬鹿みたいじゃない」

モニカは頬を軽く赤く染めながら、一番に出撃していく。

そんな彼女の様子にセグラントは肩を竦め、自身も愛機に乗り、戦場へと向かう。

戦場ではありとあらゆる声がそこかしこで飛んでいた。

それは怒声であり、悲鳴であり、味方を鼓舞する声、様々だつた。EU側とブリタニアのKMFではやはり性能差があり、EJ側は徐々に圧され始めていた。

しかし、それでも彼等が退く事は無く、逆に呐喊を敢行してくる。EU側のKMFの一機がブリタニアのKMFに取り付く。

そして、

爆発した。

爆発は取り付いた一機だけではなく、その周囲にいた一機を巻き込む程の爆発だつた。

何が起きたのか分からなかつた。

自軍の機体が敵に取り付かれたかと思えば、敵が爆発し、吹き飛んだ。

その事を理解した彼等から一斉に悲鳴が上がる。

「爆発した！？ 全機、下がれ！ 取りつかれるな！」

部隊の指揮官である兵が叫ぶが、時既に遅く、彼の前にはEJの機体。

『ユーロ・ユーバースに栄光あれ！』

オープンチャンネルで響くEJ兵士の言葉を最後に指揮官機は爆散した。

EJの前で自分たちの指揮官が爆死したのを見た部隊の兵士達は一歩後退する。

既に勝ち戦と思っていた戦い。

だというのに、今日の前で起きたのは何だ？

指揮官が敵に取り付かれたかと思えば、爆発し、死んだ。

足が止まる兵士達。

勝ち戦にあつた兵士であつたがゆえの停滞。

そこをE.IIが見逃す筈が無く、足を止めた機体から討たれていく。

浮き足立つ自軍を見たセグラントはこの場にいる全員へと叫ぶ。

「何をボサつとしてやがる！ 気合をいれろ！ ロイシラは死兵だ
！ 足を止めれば死ぬ

ぞ！ 死にたくねえなら止まるな！ 嘘らい尽くせ！」

セグラントの一喝に浮き足だつていたブリタニア軍はとうやく立ち直り、銃を構える。

『そうだ、落ち着け。総員、こちうに呐喊してくる機体を率先して撃て！

必ず複数で当たれ！』

落ち着きを取り戻した副指揮官の言葉にブリタニア軍の動きに精彩が戻る。

しかし、E.II側も大した物であり、爆発する機体を特定させない為か、常に複数で動く。

どの機体が爆発するのか、それとも全ての機体が爆発するのか。見えない、分からぬ。

これらの恐怖は少しづつ、しかし確実にブリタニア軍の精神を削つていく。

『セグラント！ こままじゃ戦線が崩れるわ

モニカの言葉にセグラントはどうしたものか、と考える。

このままでは戦線が崩れ、一時撤退をせざるを得なくなるだろ？ そうなれば敵に再び軍備を整える時間を作ってしまいます。

セグラントは下唇を噛む。

どうする、どうすればいい。

考えて、考えて、考えて。

彼は考えるのをやめた。

「モニカ！ アーニャ！ 前に出るぞー。」

「え、えええ！？」

「……無謀」

「うつせええ！ 考えたって分かんねえんだ！ だったら行動で示すしかないだろ！」

セグラントはそう叫ぶと、自身の愛機を前へと駆り出す。
「どけどナビケ！ デイツもコイツも噛み碎くぞ！ ジラあああああ！」

ああ！

咆哮が木靈する。

モニカとアーニャは通信画面越しに顔を見合わせる。

『あんなんだから猛獸って呼ばれるんでしょうな』

『……。私たちもいく』

『やうね。アイツにばっかりいい格好はさせらんないわね』

前に出たセグラントは味方に自身の戦いを見せるかのように暴れ回る。

しかし、彼の機体は至近距離に重きを置いている為、近づいてくる機体をそのまま破壊すれば彼も巻き込まれてしまつ。

その為、セグラントの戦い方は腕で掴んで投げ、ガトリングで撃ちぬく、といった物に制限されていた。

EU側もナイトオブラウンズを墮とせば戦局が傾くと理解し、狙いをセグラントに絞る。

『全機、あの竜を狙え！ 奴を墮とせー。』

『殺れるもんなら殺つてみやがれ！』

セグラントの叫びに呼応するかのようにブランティ・ブレイカー

の機体が唸る。

竜の咆哮とも呼べる唸り。

EUの機体が殺到してくるなか、セグラントはガトリングを構えるが、それと同時に背後から銃撃が飛んでくる。

「おせえぞ！」

『貴方が早いのよ。といつも至近距離が主な癖になんで挑発しているのよ。死ぬ気？』

『……少しは自重して』

「死ぬ気は毛頭無えよ。それに、お前らが来てくれるしな。ナイトオブラウンズが三人も

揃うんだ。負ける筈がねえ」

『まったく調子が良いんだから』

『でも、セグラントの意図とおり。……敗北は無い』

『それもそうね』

彼等は話しながらもその機体を止める事なく、各々が持つ技量を奮い、戦場を支配していく。世界にその名を轟かせるナイトオブラウンズの肩書きに恥じない動きだった。

そんな彼等の姿を見たブリタニア軍の兵士達の士氣も高まる。

『ナイトオブラウンズの方々のみに戦果を上げさせるな！ 全機、奮起せよ！』

『イエス・マイローダー！』

結果から言つならば、ブリタニアの勝利で戦いは幕を閉じた。

その後、ブリタニア軍は見事な連携を取り、EU軍の死兵を討ち取つていった。

しかし、戦闘を終えた彼等の心には歓喜はなく、只々安堵がその

胸中を占めていた。

思い出されるのは、討ち取られる間際まで叫び続けたE.I.、ヨーロ・ユニバースの兵士達の魂の叫び。

『ユーロ・ユニバースに栄光を!』

『祖国に我が魂を捧げよう!』

『ユーロ・ユニバースに勝利を!』

彼等の叫びは真にその場にいる兵士達の心に残つた。

それはセグラント達にも同様の事であり、彼等は今、基地の制圧にいくことなく、後方にいて、待機していた。

「……強かつた。技量以上に心が」

「そうね。彼等は強かつたわ」

「……記録は出来ない。でも、忘れる事はできそうにない」

三人は思い思いの言葉を口にして、黙る。

彼等の視線は戦場に向けられている。

「これでE.U.戦線も終結か。この後はどうなるのかね」「とりあえずE.U.はエリアになるでしょうね」

「E.U.の事じやねえ。俺たちが、だ」

「……分からぬ。でもまた何処かの戦場に行くアーニャの言葉にセグラントは頷く。

そして彼等の間に言葉は再び無くなつた。

セグラント達が話しているのと同時刻、ブリタニア軍はE.U.最後の砦内に残る軍の掃討、捕縛を行おうとしていた。

先に捕縛した兵士によれば、此処に展開されていたE.U.軍の指導者は、

グライン・マキシム元帥、ブラッド・ダラス中将、ウォリア・フ

オルクス参謀長の二人

であり、いずれも高潔な軍人として名を馳せる人物だった。

そして、その彼等は現在何処かに逃亡を図るでもなく、ただ何かを待つかのように司令部にいた。

「マキシム元帥。我等の敗けです」

ブラッドの言葉にグラインはその眉間に深く皺を寄せ、ただ一回頷いた。

「ブリタニアは強い。強すぎた。そして、我等は弱かつた。それだけの事だ。

そう、たったそれだけの事」

そう呟くグラインの瞳から一筋の涙が溢れる。

「……元帥。しかし、我等にはまだやるべき事。最後の仕事が残っています」

「分かっている。最後に確認しておく。貴官らまで付き合つ必要は無かつたのだぞ？」

良いのか？」

グラインの確認に、ブラッドは笑みを、ウォリアは眼鏡を外し、また掛ける。

「何を今更。それに既に脱出の時は有りはしません」

「まったくです。我等の祖国はコーコ・ヨーバースであり、ブリタニアに占領された後に

残るエリアではありません」

二人の言葉にグラインは深く頭を下げる。

そして、司令部にある簡易冷蔵庫から一本のワインと二つのグラスを取り出した。

グラインはワインを注ぎ、全員に回す。

グラスが全員に回ると同時に、司令部の扉が乱暴に開け放たれる。

「両手を上げる！ 少しでも抵抗を見せれば射殺する」

指揮官らしきブリタニア兵士が銃を構える。

しかし、三人は両手を上げるどころか、その手に持つグラスを下ろす事もしなかった。

「聞こえているのか！ 両手を上げろ、と言っている！」

怒鳴る指揮官。

それに対しても、グラインの返答は。

「……既に我等の敗けは確定している。その上で一つ聞きたい。何、

冥土の土産とでも

思つて聞かせてくれ。此処には、この基地には如何ほどの軍が集結しているのかね？」

「…………。E.U.侵攻部隊の6割だ。さあ、立て」

指揮官の答えにグラインが、ブラッドが、ウォリアが笑みを浮かべる。

「諸君、私たちの最後の仕事だ」

「ええ、6割ならば十分でしょう」

「では、元帥」

「ああ、ユーロ・ヨーニバースに栄光あれ」

三人はグラスを合わせ、ワインを一口に飲み干した。

「貴様ら！ 何をしている！ さつさと動……け

指揮官の言葉は最後まで続く事は無かつた。

何故なら、グラインがいつの間にか手に握っていたソレが目に入つた為である。

それは何かのスイッチのようだった。

直感と言つても良かつた。

「全員、アレを押させるな！ 撃て！」

「遅いよ、若造」

スイッチは押された。

スイッチが押された事により基地の各所に仕掛けられた爆薬が爆

発する。

その周りに配置された大量の流体サクラダイトの入った容器と共に。

基地は一瞬にして、爆炎に包まれる。

それはEUという国の最後の抵抗。

基地に入ったブリタニア軍全てを巻き込んだ大爆発。

爆音が上ると同時に、セグラント達の目は基地に注がれる。

遠くで基地が崩れしていく。

爆炎によって生じた風に頬が叩かれる。

「……自爆」

「まさか、基地ごとだなんて」

「……執念、違う、誇り故にか」

自軍の大半が巻き込まれたこの爆発にナイトオブラウンズとして、軍の頂点に立つ者と

しては怒らなければ、自軍の心配をしなければならないだろう。だが、それを行うよりも先に。

セグラントは自然と立ち上がり背筋を伸ばし、基地に向かい敬礼をしていた。

「貴官等の誇りに敬意を払う。あんたらの事は忘れはしねえ」
セグラントの咳きは小さく、隣にいた二人にのみ聞こえた。

この日、EU戦線は完全にその幕を下ろした。ブリタニアにも多大な被害を齎して。

誇り故に（後書き）

ええーと。多くの方が予想はついていたでしょけど死兵、そして自爆でした。

三人の高官はできればもう少し活躍させたかった……。

さて、次回はユーフェニア回になるのかな？ もしくは……。

既に構成はあるので後は書くだけです。

それではまた次回。

乱心（前書き）

今回でコーフンニアの話を終わらせようと思ったのですが前後編となってしまいました。今回は前編です。それではどうぞ。

乱心

神聖ブリタニア帝国第三皇女ユーフェミア・リ・ブリタニアには夢がある。

それは世界の人々全てが幸せになれる世界。

子供の理想と笑う大人もいるだろう。

所詮は絵空事と相手にされることもあるだろう。

だが、それでも彼女はこの純粹な想いを捨てる事は無かつた。

ユーフェミアの根本にして、彼女を彼女足らしめる優しさがこの願いを消す事なく、持たせ続けてきた。

そして今、彼女はある人物と共に願いの第一歩となるやもしれな
い事案を進めていた。

事案の名を『行政特区日本』と言った。

これはブリタニアによってエリア11となつた日本を一部地域で
はあるが解放し、

エリア11ではなく日本として認めるという物だった。

この事案は彼女の姉であるコーネリア等に反対されたが、彼女は
それで止まる事なく、

遂にはその働きを認めさせる所まできていた。

行政特区日本への参加に特別な資格は必要なく、申請さえすれば
誰でも日本人の名を

取り戻す事が出来るといつこの事案を誰よりも喜んだのは言つまでもなくエリア11に
いる元日本人達だった。

行政特区日本の噂がエリア11中に広まる頃には諦めが殆どを占
めていた彼等の心に

清風がそよいでいた。日本人に戻れる、イレブンでは無くなる、と

いう思いで彼等の目

からは諦めは消え、輝きを取り戻しつつあった。

ユーフェミアが行政特区日本を造る上で協力を申し込んだのは今ではブリタニアで

知らぬ者はいないであろうテロリスト集団『黒の騎士団』だった。彼女が黒の騎士団に協力を申し込んだのには当然の事ながら理由がある。

それは黒の騎士団のリーダーである仮面の男ゼロだった。

ゼロの正体は誰も知らない。それが世間の認識である中、彼女の

みは確信に近い形で

ゼロの正体に気がついていた。

ゼロの正体は幼き頃と共に話し、遊んだルルーシュであると確信していた。

なにか証拠がある訳ではない。

だが、彼女は確信していた。ゼロはルルーシュである、と。

そして彼女は彼に接触し、自身の願いを彼に打ち明け、彼の協力を得る事に成功した
のである。この一人の接触は行政特区日本を造る上で大きな意味を持つた。

黒の騎士団は今ではエリア11では英雄視されることも少なくはない組織であり、

エリア11においての影響力は計り知れない。

そして、ユーフェミアの方は第三皇女としてブリタニア側に大きな影響力を持つ。

こうして行政特区日本の事案は異例の速さで進んでいったのである。

ユーフェミアの願った優しい、幸せな世界への第一歩。行政特区日本の設立は大々的

に報道される。

誰もが一度は夢見る平和で幸せな世界。そんな世界が後少しさで見える。

EU戦線から本国へ戻る途中にあつたセグラント達もまた注目していた。

移動用の輸送機に揺られ、本国へと帰還しようとする彼等は中継映像に視線を向け、

これから始まるコーフェニアの演説を待っていた。

「あのお姫様、結構やるのね」

「ああ、ビックリするぜ。まさか、弱肉強食を国是とするブリタニアの、しかも、

第三皇女がこんな事案を進めるとは思ってな

「でも、悪くは無いと思つてしまつのは皇帝陛下の騎士として失格かしら」

「さあな。思うだけならいいんじゃねえの？」

思うだけならば良い。だが、口に出してはいけない。

セグラント達はブリタニアの軍事の頂点に立つナイトオブリウンズなのだ。

つまりはブリタニアの看板である。その看板が色を、思想を変えなければいけない。

彼等は弱肉強食思想の体現者神聖ブリタニア帝国皇帝の騎士なのだから。

「……スピーチ始まるみたい」

アーニャの眩きで彼等の視線は再びモニターに向く。

行政特区日本の完成を祝うセレモニーを行う会場は人で埋め尽くされていた。

そんな中に行政特区日本の立役者であるゴーフュニアが歩み出でくる。

その場にいる全員が彼女の言葉を待つ。

「日本人皆さん、こんにちは。今日は良く来てくれました。そして……」

一度言葉を切り、晴れやかに。

いつもの彼女と何ら変わりの無い優しい声で。

濁りのない瞳で、先を見ながら。

優しい笑顔のまま告げる。

「死んでください」

ゴーフュニアが何を言っているのかが分からなかった。

それはこの報道を見ている者、実際に会場にいる者、全員に共通したものだった。

しかし、分からなくともそれは起こった。

ゴーフュニアはアサルトライフルを構え、近くにいるイレブン、

日本人を撃つた。

「日本人は皆殺しです！」

会場に悲鳴が木靈する。

会場に集まつていた日本人達は我先にと逃げ出しが、ユーフェニアはそんな彼等を後ろから撃つ、撃つ、撃つ。

呆然としていたブリタニア兵士等は我に返つた者からユーフェニアを取り押さえようと

するが、ユーフェニアは彼等を振り払い銃を乱射する。

兵士達が振り払われていく中、ダールトンは一人ユーフェニアを押さえ続ける。

「ユーフェニア皇女殿下、どうか落ち着いてください！ 御身に何が起きたのですか！？」

「放しなさい！ 私は日本人を殺さなければならぬのです！ 放しなさい！」

ユーフェニアはダールトンを振り払おうと暴れ続ける。そして、一発の銃弾がダールトンの腹部を貫く。

「ぐうっ。皇女、殿……下あああ」

ダールトンは腹を押さえながらもユーフェニアに手を伸ばす。しかし、彼の手が彼女に届く事は無かつた。

ユーフェミアもまた自らが撃つたダートンの事を省みることは無かつた。

「日本人は皆殺しです」

壊れた玩具の様に同じ言葉を唱えながら、笑顔で。

「どうなつてやがる！？　どうして姫さんが！」

「分からぬわよ！　セグラント、貴方はユーフェミア様に会つたことあるのよね？」

「こんな事をするような方だつた？」

「んな訳がねえ！　姫さんはこついう事、殺しあはやらない人間にしか見えなかつた！」

ユーフェミアの身に何が起きたのか分からぬセグラント達。その間にも中継映像ではユーフェミアが笑いながら日本人を撃ち抜いていく。

悲鳴を上げるだけだつた日本人達の間を一人の男、ゼロが歩いて来る。

『ユーフェミア！　やめるんだ！　君はこんなことをする人間ではないだろつー！』

ゼロは叫ぶ。

その声には後悔の響きがあつた。

その声には怒りの響きがあつた。

その後悔は、怒りは誰に向けた物なのか。

「日本人は皆殺しです！」

『ぐつ、ゴーフュニア。すまない』

ゼロは懐から拳銃を取り出し、構える。

ゴーフュニアはゼロの構えた拳銃は目に入っていないのか、アサルトライフルを撃ち続ける。そして、ゼロの持つ拳銃から放たれた弾丸に撃ち貫かれた。

「おい！ この輸送機は今何処にいる…？」

「現在はヒリアーー上空です。それが何か？」

「俺だけでいい。ヒリアーーで降ろせー！」

セグラン特は歯を剥きながら、輸送機の機長に告げる。
彼の顔には焦りと困惑があった。

そんな彼の脇腹をアーニャがつつぐ。

「……セグラン。私たちは本国に戻らなくちゃいけない。私たち
は……」

「分かっている！ 僕たちは叔父貴の騎士だつて事は！ だが、僕
は姫さん達を知ってるんだよ！ あんな事をする奴じやねえって知つてんだよ！ くそ、
俺は何を言つてる
んだ！」

頭をガシガシと搔き、荒く息を漏らす。

「セグラント一回落ち着いて。確かに私たちは皇帝陛下の騎士よ。でも、それと同時に私たちはブリタニアの騎士なのよ。ブリタニアの皇族に変事があつたのならば許可さえとれば動いてもいいはずよ」

モニカはナイトオブランズに支給される専用の緊急用通信機を操作し、本国に繋ぐ。
通信は直ぐにシャルルに回された。

『我が騎士クルシュフスキー。どうしたのだ?』

「は。皇帝陛下も既にご覧になられているかと思いますがエリア1にて第三皇女、ユーフェニア殿下に変事が起きたようとして、丁度我々はエリア1上空にいるため様子を見にいきたいのですが」

シャルルは通信機の向こうで顎に手をやつ、何かを考えているのか目を瞑る。

『ふむ。放つておけ、と言いたいところだが様子を見に行く事を許可しよう!』

「よろしいのですか?』

『構わん』

シャルルはそれだけ言つと通信を切つた。

「ですって。良かったわね、セグラント」

モニカはセグラントの方を向き、微笑む。セグラントはバツの悪い顔を浮かべる。

「……世話かけたな」

「何を今更。貴方の支援なんてそれこそどれだけやつてると想つてるの。せ、行きましょ」

「ああ」

セグラントは機長に指示を出し、Hリアーへと向かう。

この時、機内にいる誰もが気が付いていなかつた。

アーニャが自身の手を顎に当てていたのを。

乱心（後書き）

そんな訳で前編は殆ど原作と変わりませんでした。じゃあ書くなんよ、と思いますが、容赦を。それではまた次回。

どうでもいいのですが昨日、小田和正さんのコンサートに行つてきました。

感動しました。皆さんにも是非、聞いて欲しいです。

歪められた忠義（前書き）

遅くなりすいません。投稿いたします。

歪められた忠義

「コーフハニアによつて腹部を撃ちぬかれたダーレトンはその場にいた兵士に連れられ、

会場の端にて衛生兵による治療をうけていた。

「将軍、しつかりして下さい。幸い、銃弾は重要な内臓を傷つけておりません。

これならばすぐに動けるようになるでしょう」

「私の事はどうでもいい！ それよりもコーフハニア皇女殿下はどうなつた!?」

「ゼロは！？ 会場はビックリしたのだ！」

腹部の痛みなど忘れたかのように叫ぶダーレトン。しかし彼が叫ぶ度に腹部から血が吹き出していた。重要な内臓を傷つけているとは言え、腹部を撃ちぬかれているのだ。

その様子を見た衛生兵はダーレトンに落ち着く様に叫ぶ。

「将軍、落ち着いてください！ 状況ならば私が見えてきますから、どうか安静に！」

「こんな時に姫様のお側にいけど何が騎士だ！ どけ！」

ダーレトンは衛生兵を押しのけ、立ち上がりうつとするが、血を流しそぎたのか上手く立ち上がれずにいた。それでも尚立ち上がりうつとする彼の姿を見た衛生兵は、

失礼します、と告げ、ダールトンの肩を支える。

「分かりました。将軍、共に行きましょう」

「……すまん」

「いえ、こんな将軍だからこそ私も共に戦えるのです」

会場にてユーフェニアを仕方がないとは言え撃つ事となつてしまつたことにゼロ、ルルーシュは後悔に苛まれていた。

(何故、ユーフェニアを撃たねばならなかつた？　私は彼女にギアスなど掛ける気は毛頭無かつた。それどころか彼女にならば協力しても良かつた。彼女の夢見た世界はナナリーの望んだ優しい世界そのものだつたといつのに！　だが、既に状況は動いている。後悔や自身への怒りなど後だ。考える、ルルーシュ！　この状況で私が打つべき至高の一手を！)

ルルーシュは後悔と怒りを抱えながらも、思考を進める。
そうしなければ潰れそつたから。
ギアスを掛けるつもりは無かつた、と言つても事実自分は掛けてしまつた。

それも最悪な物を。

じつしている間にも状況は刻一刻と変化していく。
そして、ルルーシュの決断は。

黒の騎士団のゼロとして動く事だった。

すなわちブリタニアの打倒。その為にはこの場にいるであらうコ
ーフェミアの実姉に

当たるコネリアの捕縛、ないしは殺害である。

だが、既に彼女の周りは数多くの兵士で囲まれている。

紅蓮などの主力戦力がない今ではあの壁を突破する事は出来ない。

ルルーシュがどうするか考えていると奥の方から声が聞こえてきた。

視線をそちらに動かすと、そこにはコネリアの騎士であり将軍
であるダールトンが
兵士の肩を借り、歩いていた。

ルルーシュはそれを確認すると、彼等の前に立つ。

「こんにちは、ダールトン将軍」

「貴様はゼロ！ よくも顔を出せた物だ。引っ捕らえて姫様の前に
突き出してくれる！」

「その様な体でかね？ まあ、私が言いたいのは唯一つだ

ルルーシュは仮面をスライドさせ、自身の田とダールトン達の田
を合わせる。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる！ コネリアを生きた

まま差し出せ!」

ルルーシュの命令が響くと同時に彼の目を見てしまったダートン達の顔から一瞬表情が消え、次の瞬間にはなんの疑問も持たずルルーシュに言つ。

「分かった。コーネリア殿下を連れてこよ!」

衛生兵とダートンはゼロの事など忘れてしまったかのようにコーネリアを目指し始める。

「コーネリアはユーフュニアが手術室へと運ばれていくを見届けた後、会場の混乱を治める為に指揮を取っていた。

「いいか。イレブン達が暴動を起こしたのならば即座に鎮圧しろ! KMFの使用も許可する。なにはともあれ場の收拾を第一としろ!」

「イエス、コア・ハイネス!」

「コーネリアの指示を聞いた兵士達が散つていく。

兵士達の背中を見送ったコーネリアの視界に一人の人物の姿が映る。

それは衛生兵に肩を貸して貰いながらじりじり歩いて来るダートンの姿だった。

「おお、ダールトン！ 傷はいいのか？」

コーネリアの言葉に対し、ダールトンは何も答えない。

それどころか主にあたる彼女の前に来たといつに表情の一つも変えなかつた。

それは普段の彼ならばあり得ない事である。

ダールトンの様子を訝しみながらもコーネリアは彼に近づく。

「姫様、至急来ていただきたいのです」

ダールトンはよつやく口を開いたかと思えば自分に付いてくるように行つてくる。

ますます彼らしくない、と思いながらもコーネリアは自身が絶対の信頼を置く將軍の事だ、何か意味があるのでないか、と考えた。

「私に来てもらいたい？ 何事だ」

「…………来ていただければ分かるかと」

ダールトンはそれだけ言つと、彼女に背を向け何処かに歩き出す。

「ギルバート！ 私はダールトンと少し出でてぐる！ 指揮は任せたぞ！」

コーネリアは自身の後ろにいた騎士に後を任せた事とした。

ダールトンの後を追い、辿りついたのは会場からそう離れてはいな開けた場所。

そこには一人の男の姿が一機の黒いKMFと共にあつた。

ダールトンはグイ、とコーネリアの腕を引っ張り前に押し出す。

「……連れてきたぞ、ゼロ」

「（）苦労だった、将軍。さて、久しぶりになりますかな？ コーネリア殿下」

「ゼロ！ ダールトン、貴様どうこうつもりだ！ 私を裏切ったのか！？」

「コーネリアの胸中は怒りで溢れていた。

信頼する将軍に付いてきてみれば敵であるゼロに引き渡されそうになつたのだ。

当然と言える。

怒りを向けられているダールトンは未だに感情の無い顔でその場に佇んだままであり、

コーネリアの言葉は届いていないようだつた。

そして、ゼロがコーネリアの手を取ろうとした時、彼の顔に表情が戻つた。

「……つ。ここなー？ ゼロ？ 姫様！？ これは一体！？」

意識を取り戻したダールトンはその場の状況に困惑の言葉を漏らす。

その様子に本来であれば思う所があつたであろうが、今のコーネリアにそこまで

落ち着いた判断は出来なかつた。彼女は一瞬の虚を突き、ゼロから距離を取る。

「ダールトン、何を白々しい事を!」

「姫様、何を……、何を仰つてゐるのですか?」

「貴様は私の身柄をゼロに引き渡そうとしたのだ!」

「私が? 何故、私が?」

ダールトンは頭を抱え、考え込む。

その様子に段々と冷静になつてきたコーネリアも思考を進める。何かがオカシイ、と。

だが、思考は後だ。

まずは田の前の敵を、ゼロに集中しろ。

「コーネリアは自身の喝を入れ、ゼロに向けて、銃を向ける。

しかし、その時には既にゼロはＫＭＦガウェインに乗り込んでいた。

ゼロ自身、コクピット内で舌打ちをしていた。

彼がダールトンに掛けたギアスは『コーネリアを生きたまま差し出す事』だった。

その為に彼がここまでコーネリアを連れて来て、彼に対し、押し出した事で達成した事になつてしまつたのだ。本来の彼であればもつとマシなギアスを掛けられたであろう。

それが自分でも分かつてゐるからこそ舌打ちをしたのだ。

「やはり、今の私は冷静ではない、と言つ事が。ひとまづはその命頂戴しておこう」

ゼロはガウェインに搭載されている武装を地上から一いつ眼を見上げる「一ネリア達に向ける。後はボタンを押すだけで、彼女等の命を奪える。

その時だった。

ガウェインのシステムから緊急警告が表示される。
反応は三機のKMF。場所はガウェインの上空。
ゼロがカメラを上に向けると、空に一機の大型輸送機が見え、
そこから大型パラシユートを着けたKMFが落下してきていた。

パラシユートは着地に問題の無い距離でページされ、三機のKMFがその姿を現す。

それは、ゼロの記憶にも新しい規格外のバケモノ、魔竜の姿だった。

「おらあ！俺、到着！」

「空からの無理やりの着地。寿命が縮んだわ」

「……相変わらず無茶」

ゼロは新たに現れた三機を見た瞬間に思考を「一ネリア達の殺害から如何様にしてこの場から撤退するかに切り替わっていた。

「まさか天下に名高きナイトオブラウンズの方々が三人も集つとは。ブリタニアは日本を完全に滅ぼすつもりなのかね？」

まずは情報収集だ。

ゼロはそう考へ、挑発とも取れる言い方を敢えて行つ。

ゼロの質問に対する彼等の答えはただ一つだつた。

「偶然だ」

「偶然ね」

「……偶然」

三人のナイトオブラウンズの答えにゼロは頭を抱えたくなつた。
ナイトオブラウンズ三人が集う事が偶然だと！？ そんな事があつてたまるか！
あつたとしたら私はどれだけ運がないのだ！

ゼロが混乱している中、通信が届く。
相手は魔竜。セグラントからだつた。

『よう、ゼロ』

「なにかな、ブリタニアの猛獸」

『……噛み碎かせもらひつぜ』

それは一方的な通告。

彼はそれを言つ為だけに通信をつなげたのだらう。

通信が切れると同時に魔竜、ブラッティ・ブレイカーの顎が大きく開かれる。

機械には必要ない筈の牙がゼロに恐怖を抱かせる。

しかし、彼はその恐怖をねじ伏せる。

（落ち着け、あの魔竜は近距離が専用の機体。ならば空を押せていふというのには

こちらの絶対的なアドバンテージだ。問題はその横にいる一機）

ゼロは自身を叱咤し、この場からの撤退を図る。

「怖いな。流石はブリタニアの猛獸と言つた所か。怖いな。コーネリアの命を奪えないのは参つたが、此処は失礼をせてもらおう」

ガウエインの出力を上げ、ゼロはその場から消えていく。ガウエインの姿が完全に消えたのを確認したセグラント達は安堵の息を漏らした。

「いや、危なかつた。正直言つてもう動かんのよな」

「ホントよ。ただでさえEJ戦線で消耗してたのに、こんな無茶をやるなんて」

そう、彼等の機体は既にエネルギーが切れかかっていたのである。EJ戦線からの帰りに無理やりエリア11に訪れたため、満足のいく補給と修理を行えていなかったのである。もしも、あそこでゼロが戦闘を選択していたら相当に厳しい

物となつていただろう。

「ま、なんにせよゼロは撤退したんだ。問題ねえだろ」

「貴方つて人は……」

セグラントの言葉にモニカは盛大にため息をついた。

ゼロを含む黒の騎士団は撤退したとは言え、問題は山積みだった。

ゼロに撃ちぬかれたユーフュニアの死。

それに伴う諸々の問題。

そして、ダールトンの謎の裏切り。

「さて、ダールトン。何か弁明はあるか？」

コーネリアはダールトンを睨む。

ダールトンの方も自身が何を行ったのかを知り、その顔を青くしていた。

彼は身に覚えがないと言つても、実際に自身の主君を敵に引き渡そうとしていたのだ。

「姫様、私には本当に覚えがないのです！ 私が覚えているのは状況を確認しようと

会場の端を出た所までなのです！」

ダールトンは何度もその事を説明するが、それを証明する者は彼に肩を貸していた衛生兵だけであり、その彼もそこからの記憶が無いと主張している。

そんな説明で「コーネリアが納得する筈もなく、彼女は銃をダールトンに向ける。

「姫様！」

「もう、何も言つな。私がゼロに引き渡されそうになつたのは事実。そしてそれを行つたのはダールトン、貴様だと云ひつつとも……」

「コーネリアは震える手でダールトンに対し、引き金を引いつくる。ダールトンはその様子に弁明は無駄、と理解し、目を閉じる。

「姫様、この身に覚えは無くとも、私は確かに反逆したのでしづ。無念です」

「……私もだ」

そして、引き金が引かれるその瞬間。

「その引き金、待つてもらいたい」

彼女等に待つたを掛ける人物が現れた。

その場にいた全員の視線が声のした方に向く。

そこにはセグラントがいた。

「セグラント卿、何故止める」

「「一ネリア殿下。まずは落ち着いて頂きたい。ダールトン将軍が御身をゼロに引き渡そうとしたのは事実だろ?。だが、彼の今までの忠誠から見てそれはあり得るのだろうか?」

「ダールトンの忠誠は良く知っているー。だが!」

「「一ネリア殿下、思い出してください。この様な事例が前にもあった事を」

セグラントの言葉に「一ネリアは眉間に皺を寄せた。
セグラントは説明をしようとするが、突如としてモニカの方を向く。

「わりい、モニカ。やっぱ敬語駄目だわ。チヨンジ」

「はあ……。貴方つて本当に。まあいいわ。一ネリア殿下、思い出していただきたいのはオレンジ事件です」

「オレンジ事件……」

「はい、あの事例でもジョンレミア・ゴットバルト辺境伯が突如として謎の行動を起こしたが為にゼロの逃走を許しました。そして、その後の彼の査問会において、ジョンレミア卿は

今のダーレトン将軍と同じ言葉を囁つてゐるのです。『覚えてない』、と。

何か、おかしくはありますか？ 今までブリタニアでも屈指の忠誠心を誇る人物が一人も謎の行動を起こす。しかも、ゼロが関わっているときには「

モニカの説明にコーネリアは冷静に考へる。

「……確かに。では、卿等はダーレトンもジョーニア卿も洗脳された、と？」

「証拠はありませんが、セグラントはそう感じたのです」

「セグラント卿、根拠は？」

「勘」

その場の空気が固まつた。

しかし、セグラントはそれを気にするでもなく、ダーレトンの前に立つ。

「ダーレトン将軍。何か、覚えている事はないか？」

セグラントの問いに、ダーレトンは必死に思い出そうとする。それからどれくらいの時間が経つただろうか。

ようやく何かを思い出した彼が囁つたのは一つの単語。

「……赤い鳥。そうだ、赤い鳥を見た」

「赤い鳥？」

「覚えてこるのは此処までです」

ダーレトンの言葉にますます訳が分からぬ、と場の空気が混迷の体をなす。

「コーネリア殿。どうじょうか、この件はダーレトン将軍を処刑する前にもう少し調査を行つべきではないでしょつか」

モニカの言葉に「コーネリアは唸る。
確かに、所々に疑問は残る。

「だが、お咎め無しにするわけには

「コーネリアは迷い始めた。

「コーネリア殿下。俺に案があるんだ、ですが

「セグラント卿、何かいい案でも？」

「今までのダーレトン将軍の忠義と功績を鑑みて、処刑では無く將軍職の剥奪。そして、
その身柄を真実が判明するまで俺が預かる。そして、真実ダーレトン将軍が裏切っていた
のであれば、俺が処刑する。これでどうだらう？」「

セグラントの意見にコーネリアは悩む。

そんな悩む彼女を見て、今まで口を開かなかつたコーネリアの騎

士であるギルバートや

「一ネリア付きの文官、武官が口添えをする。

「殿下、ダールトン将軍程の逸材を失うは我が国にとって大きな損失です。

セグラント卿の案を受け入れていただきたく」

「殿下！」

「殿下！」

その場にいる全員がダールトンの助命を願ひ。

そして、彼女の決断は。

「…………。分かった。眞実が判明するまでダールトンの処刑はない。しかし！」

セグラント卿、眞実ダールトンが裏切っていたのならば、

「分かつていいる

「ならいい」

彼女はそれだけ言うと執務室を出て行つた。

ギルバート達は彼女の後を急いで追う中、皆がセグラントに礼をしていく。

そして、残されたのはセグラント達、ナイトオブラウンズとダルトンだけとなつた。

「セグラント卿」

「ん？」

「感謝いたします！」

ダーレトンはそう言つてその場で深く、深く礼をする。

「頭を上げてくれ、ダーレトン将軍、あ、将軍じゃねえんだつた。
俺はアンタが裏切る

人間には思えなかつた。それだけの事だ」

「それでも卿に命を助けていただいたのは事実」

「そりゃかい。さて、問題はダーレトン元将軍のこれから立ち位置
だな」

「それなら、貴方の副官にすれば？」

モニカからの意見にセグラントはポン、と手を打つ。

「そりゃ。それでいいか。ダーレトン元将軍、俺の副官扱いで構わ
ないか？」

セグラントの言葉に対する彼の返答はただ一つだった。

「イエス。マイ・ロードー！」

歪められた忠義（後書き）

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

「おれはコーヒーミニア回を書こうと思つていたのに出来上がったのは
ダールトン回だった」

な… 何を言つてゐるのか わからぬーと思つが

おれも 何をされたのか わからなかつた…

頭がどうにかなりそうだつた… 催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もつと恐ろしこものの片鱗を 味わつたぜ…

本当にどうしてこうなつたんだしようね。不思議。
はい、すいません。コーヒーミニアに関しては完全に原作と一緒にです。
一期を見てた時、あのシーンでは深くにも泣きだつになりました。
あの感動を書こうと思つていたのに、本当にどうしてこうなつたん
だらう。

それではまた次回。

父の姿（前書き）

今日は少し短いです。
それではどうぞ。

父の姿

ダーレトンを「」の副官として登用したセグラントは本国へと戻っていた。

「一ネリアなどはそのままエリアーに残り、黒の騎士団への対策としたかったようだが、セグラント達は皇帝の騎士であり、彼女に命令権は無くセグラント達もまた皇帝に本国へと戻るようになつてゐる為、本国へと戻つたといつ事である。

帰還した彼等は直ぐに謁見室に来るより皇帝直属の文官から指示されていた為、機体を自分達の開発チームに預け、謁見室へと足を運んでいた。

「陛下、ナイトオブトウホールヴ帰還しました」

謁見室に入ると同時にモニカが頭を垂れる。それに続き、アーニャとモニカも帰還の言葉を告げ、皇帝シャルルの言葉を待つ。

「よく帰つた。我が騎士達よ。まずはエコドの戦ぶり見事、と言ふ」

「勿体無きお言葉」

「謙遜するでない。……まあ良い、それでは次の指令をお前たちに与える。お前たちはこれから自分の部隊を作れ。これは開発チームではない。お前たち

の手足となる部隊で

ある。人員に関しては個々の判断に一任するものとする。以上だ

「イエス、コア・マジュスティ！」

シャルルは返答を聞くと王座から立ち上がり、奥の間に消えていった。

残されたのは頭を垂れたままのモーカ達とビスマルクだった。

シャルルが完全に奥の間に消え、セグラント達も頭を上げる。

「……部隊を作れってよ。ビッグことだと思ひへ。」

「そのままの意味でしょ。近頃は敵方の戦力も充実してきているからこりからも戦力の

補強をするつて事じやないの？」

「……どうせよ暫くは本国に居る事になる」

「アーニャの言つとおりだな。まあ取り敢えず、だ。俺はクラウンに会つてくる」

セグラントはそう言い、謁見の間から立ち去つとしたが、それを止める者がいた。

それは今まで沈黙を保っていたビスマルクだった。

「セグラント、少し待て」

「ん、どうした親父」

「久々に帰ってきたのだ。共に飯でも、と思つてな」

「別に構わねえけどよ」

ビスマルクはセグラントの答えを聞くと、彼に先に屋敷に戻つている、
と告げ、去つていった。セグラントはそんな父の姿に肩を竦めながら後を追う。

「ビスマルク卿、随分と嬉しそうだつたわね。でも、
それと同時に何か迷いでもあるのかしら」

「……いつも通りだつたと思つけど?」

「そうでもないわよ。いつもより眉間に皺が寄つてたわ」

「モニカ、良く見てる」

「ふふ、いつも田を良くしていかなきやセグラントの厄介事に
巻き込まれるから」

そう言つた笑うモニカの顔は疲れきつており、彼女が今までどれだけセグラン트の厄介事に巻き込まれてきたかを雄弁に語つていた。

そんな彼女に対し、アーニャは心中で今度胃薬でもあげよつ、
決意していた。

「……エヒはビッグだった？」

ヴァルトショタイン家にて食事　いつも通り肉　を食べていると、ビスマルクが尋ねてきた。

「忠義の烈士達がいた」

セグラントの答えにビスマルクはその厳つい顔にニヤリと笑みを浮かべる。

息子がまた一つ戦場を学んできた事が分かったからである。それ故に聞くのだ。

「……強かったか？」

「ああ、強かった。機体でも、技量でも、肉体でも無い。魂が強かつた」

「勉強になつたか？」

「糧になつたさ」

「更なる高みが見えたか？」

「未だ頂点は見えず、だがな」

「それで良い。お前はまだ若い。焦らず頂点を目指せ」

ビスマルクの普段とは違う物言いにセグラントは疑問を覚えた。

普段のビスマルクであれば頂点などと言えば、十年早い、と一喝

してくるだらうと
いつのこ、今回せぬつてこない。

「親父、どうしたんだよ。らしくないぜ?」

「らしくない、か。私も歳を取ったのかもしれんな」

そう言つてため息をつく。

一体何だつてんだ。

本氣で今の親父はオカシイ。
セグラントはそう思わずにはいられなかつた。

「親父?」

「……セグラント。私はな、騎士だ。」この帝国で最強の看板を背負う騎士だ。私に敗北は許されない。自惚れかもしけんが私の敗北は帝国の敗北だ。故に、私は勝ち続ける。
そしてこの剣は帝国とシャルル皇帝陛下に捧げると決意してこる。
だがな……」

ビスマルクはそこで一皿薬を切り、涙を堪えるかのように俯く。

「だが、近頃思つのだ。陛下の世界に私の剣はいるのだらうか、と」

「親父、一体どうこいつ事だ。親父はこのブリタニアを支える支柱じやないか。

どうしたつてんだよ。何が親父にそこまで言わせるんだよー?」

「セグラント。戦の無い、嘘の無い、涙の無い世界に……」

……私たち軍人の、戦士の居場所は存在するのか？」

父の言葉にセグラントは心臓を驚撃みにされたような気分になつた。

父、ビスマルクの言つたシャルルの望む世界、それは以前会つたアーニャの中に存在するマリアンヌの言つ世界だつたからだ。

ビスマルクの帝国への忠義はセグラントが一番良く知つてゐる。その背中を、雄姿を誰よりも間近で見てきたのだ。
誰よりも強く、誰よりも誇り高い自慢の父。
その父が弱音を吐いている。

ヤメテクレ、そんな姿を見せないでくれ。

親父、アンタのそんな姿を俺は見たくない。

セグラントはガタリと席を立ち、ビスマルクの前に立つ。

「親父、弱音を吐かないでくれよ！ アンタがそんなんじゃ俺はアンタを超える意味が無くなつちまう！ 今のアンタを倒して超えたなんて言つちまつたらエディに笑われる！」

叔父貴の考えている事なんてさっぱり分からねえさ！ でも、親父、俺たちは騎士だ！

主君の望む道を血風の中を進んで切り開くのが仕事だ！ そのトップのアンタが迷わない

でくれよ！ アンタが迷つちまつたら俺たちはどう進めばいいんだ！ 親父いい！」

セグラントの叫びにビスマルクは俯く。

そして、再び顔を上げた時に彼の顔にあつたのは弱々しいが笑みだった。

「ヒリッコが、言いよるわ。そつ、だな。私は少し弱気になつていたようだ。主君の望む

世界の為に血風を突き進むが騎士、か。まさかお前にそんな事を言われるとは、な」

「親父があんまりにも情けないからよ」

「ふ、ふはは。そうか、そうだな。セグラント、先程の私は忘れる。些か弱氣になつていたようだ。さて、冷めてしまつた食事を再開しよう」

普段と同じ様子に戻つた事に安堵を覚えながら、セグラントも席につく。

冷めてしまつた肉を口に運びながらも他愛の無い話に花を咲かせ、時間は過ぎていく。

後年、セグラントは語る。

『あの親父の弱氣な姿を見たのはアレが最初で最後だつた』と。

ビスマルクは内心で考えていた。

戦い方は獸なれど、その精神、その心は正に騎士であつた息子。いつか、いや近いうちに胸を張つて言えるだらう。アレは自慢の息子だ、と。

陛下、若い風が吹こじしてあります。

古き者を吹き飛ばし、世界を支える新たな風が。

貴方の目的を知りながらも、

この若き風の行く末を見たい、と思つのは不忠でしょうか。

それでも、私は.....。

父の姿（後書き）

今回はビスマルクの心中でした。原作ではよく分からぬ内に死んでしまつた彼ですが、本当の所シャルルの計画をどう思っていたんだろう、と考えたところから今回の話が出来上がりました。

それではまた次回。

三者三様（前書き）

遅くなりましたが投稿します。

今日は日常です。

三者三様

その日、セグラントは自身の主君にあたる皇帝シャルルの側近であり、特務総監を務めるベアトリス・ファランクスに呼び出された。

特務総監の執務室まで辿りついた彼は重厚な扉を軽く叩く。

扉を叩くと同時に奥からベアトリスの声が返ってくる。

「開いています。入りなさい」

扉を開け、ベアトリスの前に立つと、彼女は机の上に大量に積まれた書類の塔に印を押し続けていた。

ベアトリスはセグラントが自身の前まで来たのを確認すると印を押す手を止め、じっと彼を見据えて言った。

「ヴァルトシュタイン卿、有給を取りなさい」

「は？」

突然のベアトリスの言葉に呆然となるセグラント。

「は？ ではありません。貴方はナイトオブラウンズに就任してから一度も有給を取りていません。故に言っているのです。有給を取りなさい」と

「こやいやいや。ナイトオブランズに有給なんであるのか？俺らは叔父貴、

皇帝陛下の剣であつて、有給とか取れる立場じや無いはずじや……」

「何を言つてゐるのです。騎士といえど社会人。そして、部下に有給を取らせないなど

何処のブラック企業ですか。いいですか、これは皇帝陛下直属のお言葉であります。

さあ、さつさと有給を取つてください。私は忙しいのです。有給の申請はキチンと書類

に書いて、規定の場所に提出してください。……もう退出してください

わざつて結構です」

ベアトリスは要件のみを伝えると再び印を押す作業に戻る。

既にセグラントの事など意識に無いようだつた。

何処か納得が行かないが、どうしようもないでの部屋から退出する事にした。

「……有給つて。何をすりゃいいんだよ」

ブツブツとボヤきながら廊下を進んでいくと、反対側からモード一カトアーニヤが歩いて

来るのが見えたので、一先ず声を掛ける事とした。

「よひ、どうしたんだ？」

「あひ、セグラント。別にどいつも無いわ。やつこつ貴方こじめどいたのよ。そつちは

特務総監の執務室だけだ」

モニカの質問に「イツに相談してみるのも良いか、と思い、先程のベアトリスの言葉を一字一句漏らさず記つと、

「有給ねえ。といつか騎士に有給つて」

モニカは頭を抱えてしまった。

どうやら彼女も有給を使つたことはないだつたので、アーニヤに聞くと、

「……ジノはよく休んでた。有給の事なら彼に聞くのが一番。彼なら多分サロンにいる」

「それだ！ 他のラウンズに聞いてくりやいいんだよな！」

アーニヤの言葉を聞くやいなや駆け出すセグラン。

彼の背中は直ぐに見えなくなつた。

そんな彼の走つていつた方向を見ながら、アーニヤは思ひ出した
ように呟つた。

「あ

「え、ビハしたの？」

「……やうこえさせつきサロンにナイトオブテンも入つてこへのを
見た」

「え」

ラウンズ達が集まり、休憩する場として提供されているサロンはとても嫌な空氣で満ちていた。その原因は一人の人物にあった。

一人がジノ・ヴァインベルグ。ナイトオブラウンズの第三席にあたる青年であり、そのモデルのような容姿に加え、明るい性格で万人に好かれる好青年である。

そしてもう一人をルキアーノ・ブラッドリーと言つた。

ルキアーノはナイトオブラウンズの第十席である。好戦的で残虐な気性を持った男であり、ブリタニア帝国に所属している理由も合法的に殺しが出来るから、という

ものであり、大凡騎士とは言い難いその生き方から味方からも恐れられている人物である。それ故に、騎士としてあらうとするジノとの仲は険悪である。

二人はお互に目を合わせようとせず、「だが立ち去ろうともしない。

ルキアーノは軍服からナイフを取り出し、磨き始める。

「ブラッドリー卿、サロンで武器は出さないでいただきたい」

「別に構わんだろう？ それともヴァインベルグ卿は”たかが”ナイフ一本が怖いのか？」

安い挑発だ、と分かつていながらもジノの米神に青筋が浮かぶ。ギュウッと拳を握るが、それを抑えるように両手を組む。

「安い挑発だな。それが吸血鬼殿の限界かな？」

「なんだと？」

「何か？」

両者の視線が合わさり、火花が散る。
お互の一拳一動を見逃さないようこしながらも直ぐにでも立ち上がれる様に姿勢を
変える。一触即発の状況だった。

サロンにて応対をする為に配備されているメイドや執事は生きた心地がしなかった。
誰でもいいからこの状況を何とかしてくれ、それが彼等の心境だった。

その時、サロンの扉が開かれる。

「うーーっす。ジノはいるか？」

入ってきたのはセグラントだった。

突然の客にメイド達は一瞬だが反応できなかつたが、直ぐに自身の職務を思い出し、
応対に当たる。

「ヴァルトシュタイン卿、何かお飲みになられますか？」

「あ～、適当」

セグラントは手をぱりぱりと振り、睨み合っているジノ達の下へ赴き、

「よひ。何やつてんだ？ そんなに殺氣をまき散らしてよ」

「これはこれは猛獸殿のお出ましか。なに、少しお話を聞いていただけだよ」

ルキアーノはわざとらしい程に肩を竦め、ナイフをしまへ。それを見たジノも拳を緩める。

「まあ喧嘩すんのはいいけど。……よひじませど

セグラントもこの両者の仲が悪いのは知っている為、敢えて一人の真ん中に位置する

席に座る。セグラントが座った事で事態は治まったかと思えば、「そういえばセグラント卿、どうしてヴァインベルグ卿を探してたのかな？」

「おお、そうだそうだ。ジノに聞きたい事があつたんだった」

「なんですか、先輩」

「おお。有給つて何すりやいいんだ？」

セグラントの質問にジノはおうか、その部屋にいた全員が固まつ

た。

まさか、天下のナイトオブランズの第二席からそんな質問が飛び出すとは誰も

考えていなかつたのだろう。ジノはいち早く立ち直ると尋ねる。

「有給ですか。それはまあ故郷に帰るとか、好きな事をするか、ですかね」

「故郷、な」

ジノの言つ故郷にセグラントの眉間に皺が寄る。

セグラントは今でこそヴァルトシュタイン姓を名乗つてゐるが、物心ついた時には

砂漠で軍相手に追い剥ぎをやつていたような人間であり、故郷と呼べる物は砂漠位しか

無いのである。軍に入った当初はその事を口性ない貴族に陰口を叩かれもした。

その事を思い出したのかジノは失言だつたかと自身の発言を後悔するが、

セグラントは気にするな、と言い笑う。

「ヴァルトシュタイン卿、有給の使い方に悩んでいるのなら適当に狩りでもどうかな？」

そう提案したのはルキアーノだつた。

彼は再びナイフを取り出し、その刃に指を這わせる。

指から血が流れるが、ルキアーノは気にするでもなく会話を続ける。

「狩りは良い。獲物の命を奪つあの瞬間がたまらない。ヴァルシリ
ュタイン卿にも
是非、知つてもらいたいと思つてね」

ルキアーノの言葉にジノは我慢ならなかつたのか、椅子から立ち上がり、

「命を奪つ事を愉しみとするのか？ それは騎士ではない！」

ルキアーノに叫ぶが、ルキアーノは飄々とし、それを受け流す。

「先程貴君も言つていただろう？ 私は吸血鬼だ。騎士じやあない」

両者の間で再び火花が散る。

「おい、お前ら。やめとけ」

「先輩は黙つて下さい。もう我慢なりません」

「ヴァルシリ・シュタイン卿は邪魔だ。ヴァインベルグ卿、お前の大
な物はなんだ？」

「貴様には到底奪えん物だ」

「くくく。言つてくれるんじゃないか」

「おい」

一人を止めようとするが、

「どいてください」

「邪魔だ。猛獸」

「ああん？」

逆に喧嘩に参加しそうな勢いになってしまった。

セグラントも拳を構える。

その様子を見たメイド達は顔を青を通り越して白くする。

そんな均衡を破つたのは一人の男の大喝だった。

「何をやつておるか！馬鹿者どもがあ！」

扉の前にはビスマルクとアーニャ、モニカが立っていた。

「げ、親父」

「今度はなナイトオブワンの登場か。今日は人が集まる日だ」

ビスマルクの登場に三人は構えを解く。

ビスマルクは彼等の前に立つと、まずはセグラントの頭に拳骨を落とし、そのまま流れ

るような動作でジノ、ルキアーノの頭にも拳骨を落とす。

三人は頭を抱え、床を転がる。

「いってええええ！ 僕は仲裁しようとしただけだってのに！」

「くおおおお。この私が、吸血鬼が拳骨をくらうとは……ッ」

「つおおおおおお。痛い！ 頭が割れそな程痛い！」

「馬鹿者どもが。これで一件落着としろ」

ビスマルクは床をのた打ち回る三人を見た後、去つていった。

残されたのは未だ痛みで立ち上がれない三人と、どうしようとも頭を抱えるモニカ、

そしてのた打ち回る三人を携帯で写真に収めるアーニャだった。

三者三様（後書き）

ルキアーノが可笑しなキャラに……。こんなでしたつけ？ ブリタニアの吸血鬼って。

それはそうと皆様にお知らせです。ヒロインが定まりません。モニカかアーニャ、どちらにするか未だに悩んでいます。次回はこのどちらかと絡ませようと思っております。そこでどちらの話が見たいか、感想で教えてください。

よろしくお願いします。

それではまた次回

有給の使い方（前書き）

パソコンが帰ってきたので早速投稿します。

アンケートの結果ですが、モニカの勝利です。

有給の使い方

ナイトオブラウンズに与えられる部屋の中でモニカは一人コーヒーを飲んでいるとノックの音が響いた。

「開いてるわ」

それだけを言うと、扉はギィという重厚な音を立てながら開き、尋ねてきた人物の姿を露にした。尋ねてきたのはセグラントだった。彼はいつもナイトオブラウンズの装束になぜか花束を抱えていた。

花束を持ったセグラント、余りの似合わなさに一瞬コーヒーを吹きかける。

「どうしたの、セグラント。は、花束なんて持っちゃって」

「……折角の有給だからよ。アイツの所に顔でも出しこそへか、と思つてな」

「アイツ。その言葉だけでモニカは全てを察した。

「……そうね。ちょっと待つて、すぐに準備を終えるから」

神聖ブリタニア帝国の帝都ペンドラゴンから車で数時間。

小高い丘の上にセグラントとモニカの姿があった。

彼等の前には一つの石碑、墓標があり、墓標にはセグラントとモニカの親友であった人物、『エディ・マクシミリアン』の名が刻まれている。

セグラント達は墓標の前に立ち、持ってきた花を捧げる。

しばらくの間、二人の間には何の会話も無かった。

時折聞こえてくるのは鳥の鳴き声と木々や草が風で揺れる音。

「よお、また来たぜ」

セグラントがよつやく口を開き、墓標に手を添えながら言つ。その口調にいつもの様な粗暴さは見えず、優しく落ち着いた聲音だった。

セグラントは着ていたナイトオブロウンドのマントを墓に見せつけるように広げる。

「見ろよ、このマント。お前が逝つしまつた後に任命されたんだ。すげえだろう?

俺の戦いが叔父貴、皇帝陛下に認められたんだ」

ポツポツと今まで起きた事を語る。

まるで田の前にエディが居るかのよう。

最初は静かにその様子を見ていたモニカだが、途中からは彼女も話に参加し、

色々な事を墓標に語る。

そうして如何ほどの時間が経ったのだろうか。
高く昇っていた太陽は沈みかけていた。

段々と肌寒くなってきた所で、

「ちょっと外すわ」

そう言って丘を降りていった。

残されたセグラントはソレに軽く手を振るだけで、再び墓標に語りかける。

「なあ、エーティ。俺はお前に話した夢の通り最強を田指すぜ。親父を超えて、まだその上
がいるってんならそいつも超えてやる。そこで最強になつた後はお前と話した通り世界を旅してやる。どうだ、羨ましいだろ？　お前がやりたかった事を全部やってやるー。」

腕を大きく広げ、自慢するかのように報告を続ける。

気がつけば空は既に暗くなりかけており、太陽は沈み、月がその顔を覗かせていた。

月の光が優しくセグラントと墓標を照らす。

セグラントはスッと立ち上がり、墓標に背を向け歩き出す。

『またいつでも来いよな。相棒』

懐かしい声が聞こえた気がして、振り返る。
当然のことだが、そこには誰もいない。

だが、確かに聞こえた。

「ああ、今度来る時は俺は親父を超えてみせるや。じゃあ、またな。
……相棒」

モニカは不思議な光景を見ていた。

少し、エディと一緒にしてあげようと思いついた席を外したのだが、
やっぱり少し
気になって丘の麓からセグラントの様子を見ていた。

彼はまるでそこにエディが居るかのように、身振り手振りを加え
ながら今まで
起きた事を語り、楽しそうに笑顔を浮かべている。

彼のあんな笑顔は久しく見ていなかった。

軍学校にいた時や、エディが生きていた時ぐらいの物だろ。

セグラントにあんな笑顔を見せられるのはエディだけ。

そう思つと少し悔しい。

一緒にいる時間ならば私も同じ位だ。

それでも何かが違う、といつのなら性別の差だろう。

女である以上男にはなれない。

女にしか分からない事もあれば男にしか分からない事もある。

あれはそういう所の違いなのだろう、と自分を納得させる。

それから如何ほどの時間が経ったのだろうか。
月が昇り、セグラントと墓標を照らす。

その時だった。

セグラントが墓標に背を向けた時、目の錯覚だろうか。

だが、そこには確かにエディが立っていた。

思わず声を上げそうになつたモニカにエディは人差し指をソッと
口に添える。

いつもの悪戯小僧のような笑顔で。

エディはセグラントに何を話しているのだろうか。

聞こえはしないが、大体の予想はつく。

セグラントが振り向いた時にはもうエディの姿は無かつた。

セグラントは墓標に向かつて何か言い、手を軽く振り、丘を降
りてくる。

エディの姿を見たことを言つべきか迷つたが

「……化けて出てきやがつた。まつたくよお、さうと成仏しやがれってんだ」

そう言つて笑う彼を見たら自然と口は閉じており、何も言ひ氣にならなかつた。

見えなくとも、そこには確かに絆があつた。

「……なんだかズルイな」

「何がだよ」

「あなた達がよ。まつたく軍学校では三人組だつたはずなのに……」

ブツブツと愚痴を零すモニカにセグラントはどうしたものか、と鼻の頭を搔く。

そんな彼を見たモニカは微笑みながら、彼に手を差し出す。

「ふふ。まあいいわ。さあ帰りましょ」

「そうだな、帰るか」

セグラントはモニカの手を握る事は無かつたが、彼女の横に並び歩く。

空から月が一人を照らし、二つの影が並ぶ。

エディの墓参りを終えてから一日程経つ頃、セグラントは一人シャルルに呼び出しを

受けていた。ナイトオブランズの正装に身を包み、謁見の間へと続く廊下を歩く。

「ナイトオブリー、只今参上しました」

「よぐぞ來た、我が騎士よ」

決められた挨拶をこなし、シャルルからの次の言葉を待つ。

「セグラントよ、顔を上げよ」

「せつ」

セグラントが顔を上げるのを確認すると、シャルルは一呼吸置いてから告げた。

「これから密命を『』える。これは他の者に知られてはならぬ」

「…………」

密命。その言葉にセグラントは皿鳥の体に力が入るのを感じた。

「よこか、セグラント。これからお主はエリヤーへと再び赴き、ある者を我の前に連れてくるのだ。ただし、生きたままでだ」

「分かつ、分かりました。それで、その人物の名は?」

「その者の名は、ナナリー。ナナリー・ヴィ・ブリタニアだ」

有給の使い方（後書き）

こんな区切りで下さいません。

次の話を終えてから段々とR2に向かいます。

もうやくやじたかった場面が近づいてきました。

それではまた次回。

密命と少年（前書き）

お久しぶりです。取り敢えずグダグダとは言いません。投稿致します。

楽しんでいただければ幸いです。

ナナリー・ヴィ・ブリタニアを連れてこい。
シャルルからの密命としてこれを引き受けたこととなつたのは良いのだが、シャルルはエリアーにいるところの事しか彼に言つてこない。

シャルルは後は同伴する者に聞け、とだけ告げ去つていってしまったためこれから の事をセグラントは知らなかつた。一応集合場所は告げられていた 為、取り敢えずは そこに向かう事にしたセグラント。

集合場所として指定されたのはとあるヘリポートだつた。
ヘリポートに向かう途中の通路を歩いていると、そこに見慣れた 顔があつた。

「アーニャじやねえか。どうし……」

セグラントは声を掛けよつとしてやめた。

何故なら、今のアーニャは喜悦に満ちた笑みを浮かべていたから である。

「……叔母御か」

「叔母御か、とほ」挨拶ね。そんな子に育てた覚えは無いのだけれど?」

「俺は貴方に育てられた覚えはありませんよ」

「マコアンヌはそんな彼の反応を楽しんでいたのが、口元に手を添え「ロロロ」と笑つ。

「当たり前じやない。今のは様式美みたいなものよ」

そういうった彼女を見て、やはり田の前の人物は苦手だと再認識をするセグラント。

「それで、今何で出でてこるんですか？」

「何故つて、決まつているでしょ？ 私の愛しい娘を迎えて行く騎士様の見送りよ」

「愛しい娘、ナナリー・ヴィ・ブリタニアの事か。

そう言えば、彼女は叔母御の実子だったな、と思いつ出す。

「それはどうも。じゃあ俺は急ぎますんで、失礼しますよ」

「ふふ、そんなに邪険にななくていいでしょ？ まあいいわ。そうだ、セグラント。

一つだけ言つておくわ」

「……なんでしょうが？」

「同伴者には気をつけなさい」

「は？ それは、どうして……」

彼女の言葉の真意を確かめようにも彼女は答える気は無いつで「ちらりと手を振るだけ

だつた。マリアンヌはそれだけを叫び、セグラントに背を向け去つていった。

ヘリポートに辿りついた彼を迎えたのは10歳程の少年だった。だが、セグラントは感じていた。

目の前にいる少年に対し、自身が言い知れぬ恐怖を感じているのを。

姿は少年である筈なのに、そう思えないのは一重に彼の目にあつた。

全てを見抜かんとする鋭い眼光。こちらを品定めするかのような視線。

それら全てが彼がただの少年ではない事をセグラントの本能が告げていた。

「僕は↙・↙。君が、シャルルの言つていた騎士かい？」

鈴のような声が投げかけられる。

皇帝であるシャルルの事を呼び捨てにしている↙・↙と名乗る少年が何者かは分からぬ。分からぬのならば考へなればいい。

「は。皇帝陛下から命を受けたナイトオブツー、セグラント・ヴァルトシュタインです」

一応の敬語で答える。

セグラントの答えに納得したのか、どうかは不明だが少年は彼から視線を外し、
ヘリポートに止まっているヘリコプターに乗り込む。

セグラントも彼を追う形で乗り込んだ。

Hリアーへと向かうゝの中で↙・↙との会話はなく、ひたすらに時間のみが過ぎていく。そんな中、ふと↙・↙が口を開いた。

「君はシャルルの騎士だったね」

「……は」

「…………君はシャルルの為なら命を捨てられるかい？」

「は？」

「答えてよ

↙・↙の目には危険な光が宿っていた。

それは一切の虚偽を許さない、という意志の表れか。

故にセグラントは答える。

「俺は皇帝陛下の、帝国の騎士です。それが帝国の為ならば捨てられるでしょう」

「」の答えにある程度満足がいったのか、VVVは頷き、視線を外す。

セグラントは内心で安堵していた。

先程彼はああ答えたが実際の所は少し違う。

セグラントは帝国の為に身を粉にするつもりは毛頭ない。
彼が戦働きをするのは単純に義父であるビスマルクの為である。

セグラントはシャルルを叔父貴と呼び慕つてはいるが彼が一番に
慕っているのは
ビスマルクである。億が一にも有り得ないが、もしもビスマルクが
ブリタニアを見限つた
場合はセグラントもそれについていくことだろう。

普段は決して口にする事はないが、それほどまでにセグラント
の中のビスマルク
に対する想いは大きい。浮浪児であつた彼を拾い上げ、騎士まで育
ててくれた人物。
彼がいたからこそ今の自分がある。その義父の為であるならば彼は
どのような任も
こなす気持ちでいた。

そこに叔父貴と慕うシャルルに対する忠義が入る余地は無い。
もしも、VVVの質問がビスマルクとシャルルどちらになら命を
賭けられるか、という
問い合わせがあったならばセグラントは迷わずビスマルクと答えていただ
ろう。

しかし、だからといって完全に忠が無いわけではなく、単に一位
と二位という優先順位
の違があるだけである。故に、先程の質問の答えに虚偽は入つ

ていなかつた。

「……そりいえば対象の所在地をまだ聞いていなかつたのですが」

再び静寂に包まれた機内の中で尋ねるセグラント。

彼の問い合わせし、VVVは視線を向けることなく答えた。

「目的地はエリアーにあるアッシュフォード学園。そこにはいるよ

その日、ナナリーはアッシュフォード学園の一角に存在するクラブハウスにいた。

兄であるルルーシュは近頃何かを始めたようで忙しく動き回っているため、此処にはいない。そして、彼等の世話役としているメイドの咲世子もまた席を外していた。

そのため、彼女は今一人だった。

そんな折り、クラブハウスの呼び鈴が鳴る。

本来ならば咲世子が応対するのだが、今彼女はいない。

ナナリーは車椅子を巧みに動かし、玄関に向かう。

「……はい、どちら様ですか？」

いきなり扉を開ける事はしない。
まずは相手を確認する。

「ナナリー・ヴィ・ブリタニア様ですね？ 僕、私はブリタニアの者です。

皇帝陛下の命令によりお迎えに上がりました」

そう聞こえた瞬間、ナナリーは自身の心臓を驚撃みにされた気になつた。

ナナリーは震える声で返す。

「そ、それはどなたでしょうか。人違いではありませんか？」

なんとか振り絞った声に扉の奥の人物はどこか困ったような声で、「あ～、やっぱさう言われるよな。というか叔父貴の考えが分からんしな。

まあ、取り敢えずだ。すまんね、ナナリー様。こっちも命令なんだ」

そう言つと、扉がミシミシと音を立てて。

そして、ボギンという大きな音と共に扉が壊された。

壊された扉から風が吹きこむ。

扉を破壊した人物、セグラントはナナリーの姿を見て驚いていた。

前情報としてナナリー・ヴィ・ブリタニアは身体に障害を抱えていると聞いていたが、まさか足と皿の一つだとは思わなかつたのである。

見えない、逃げられない、といつのは如何ほどの恐怖であらうか。

だといつのに、彼女はナナリーは氣丈に振舞おつとする。

そんな彼女の様子を見たセグラントは笑う。

(なるほど、確かに叔母御の子だ。肝が座つてやがる。まあだから
といって連れて
行かない訳にはいかないんだが)

「ナナリー様、ちょっと失礼するぜ」

セグラントはさう言い、彼女を車椅子」と持ち上げる。

「離して！ 離して下さい！ 助けて、お兄様！」

車椅子の上で大声を上げるナナリー。
流石にこれはマズイ、と思つたのかセグラントはナナリーを地に
下ろす。

すると↙・↘がこじらにやつてきた。

彼はすばやく黒服に指示を出し、ナナリーにハンカチを当てる。
すると彼女は意識を手放した。

恐らくは睡眠薬の類を染みこませていたのだらつ。

「なにをやつてるんだい？ 早く彼女をつれてこくな

「……了解」

セグラントがナナリーを↙・↘に渡し、去るつとした時、何かの

飛び道具が彼の頭
めがけて飛んできた。セグラントはそれを避け、投げてきた方向に
田をやる。

そこにはメイド服を着込んだ一人の女性が殺氣にみちた視線でこ
ちらを見ていた。

「ナナリー様から離れなさい!」

「……ヴァルトショタイン卿。僕達は彼女を連れて先に行つてゐるよ
く・くはメイドを一警すると、すぐに興味を無くしたのか黒服に
指示を出し、
その場を後にじよつとある。」

メイドはさりげなく追おつとすが、セグラントがその前に立ちは
だかる。

「悪いな、メイドの姉ちゃん。いつも命令でな。邪魔しないでく
れるか?」

「……もう一度言います。直ぐにナナリー様をひきこむ

「……ふうー。いちももう一度言はず。邪魔しないでくれるか?」

既に場は一触即発。
だが、どちらも動じない。

セグラントはボクシングのファイティングポーズの様な構えを取
り、メイド、咲世子

は見たことの無い短剣のような物を構える。

そして、風で流れた一枚の葉がセグラントと咲世子の間を流れた瞬間に場は動いた。

咲世子は一瞬にしてセグラントの視界から消え、消えたと思つた瞬間ににはセグラントの死角から右手に持つた短剣を頭めがけて振るつてきた。

それを振り向く事でかろうじて左手で弾くが、それによつ左手から血が溢れる。

「おこおこ、速いな。本当にメイドかよ、アンタ

「…………語る事はありません」

咲世子はそう静かに告げると、今度は真っ直ぐにセグラントに向かい走りだす。

真正面から来るならば、動きを見ながらカウンターを狙つべきか、そう思ったのだが、

それは彼女が脱ぎ捨てたメイド服が彼の視界を奪う。

「んなー!?

セグラントはいきなり脱ぎ捨てられたメイド服に驚きはするが、直ぐに拳を突き出す。

突き出された拳はメイド服の裏にいるであらう咲世子を貫いたかのように思えたが、

「…………ひつ

それは拳がぶつかつた瞬間に血の後に飛び飛ばされた事でダメージを取れるには至らない。

速いな。

それがセグラントの感想だった。

義父であるビスマルクはセグラントと同じパワー型であるため真っ向から勝負となる事が多いのだが、目の前のメイドは違う。

ただ純粹に速いのである。

そして、その速さを卓越した技術により更に昇華させていた。

宙を舞っていたメイド服が地に落ち、視線の先には黒一色の軽装に身を包んだ女性が立っていた。その姿は正にエリヤーの漫画でみた忍者だった。

「メイドの姉ちゃん。アンタ、エリヤーだったのか

「……答える義理はありません。次で決めます」

メイド改め、忍者咲世子はまたもや姿を消す。

時々、地を蹴る音が聞こえるといふから完全に消えたのではなく、走っているのだろう

ということは分かる。だが、捕らえる術がない。ならば、やつするのか。

そう、捕らえようとしなければいい。

彼は構えを解き、ただ待つ。

そして、再び死角から短剣を振るうと咲世子が姿を表す。

振るわれる短剣を今度は弾こつとせずに左腕で受け止める。

深々と刺さった短剣はセグラントの強靭な筋肉によつて抜けない。

咲世子はセグラントの行動に驚き、ほんの一瞬だが隙を造つてしまつた。

「……あなたの敗けだ」

セグラントはそう言い、咲世子の腹に右の拳を叩きつける。

「か、はつ。……な、ナナリー、様」

咲世子は最後までナナリーの名を呼び、その意識を手放した。

地に伏す彼女を一瞥し、セグラントはその場を去つていった。

咲世子さんは生身の戦闘では相当な上位にいるのではないだろうか。
そう思った時にこの話を思いつきました。スザク？ あれはチート
ですよ。

それではまた次回

皇姫と皇女（福井美）

今日はナナリーの話です。では、アルバ

「私をお兄様の下に帰してください！」

貴賓室の一つにナナリーの怒声が響く。

セグラントとレ・レによつてブリタニア本国へと連れてこられた彼女は、ずっとそう叫んでいた。最初の方は監視と護衛を兼ねた兵士達も彼女を何とか宥めようとしたが、

彼女は聞く耳を持たなかつた。

次第に兵士達も彼女を宥めようとする事はなくなつていた。

ナナリーは自身の置かれた状況に涙を零す。

ナナリーという少女の過ごしてきた日々は過酷だつただろう。それでも彼女は耐えられていた。

何故ならば彼女の隣にはいつも敬愛する兄が傍にいてくれたからだ。

兄がいたからこそ耐えられた。

兄がいたからこそ本来ならば暗く閉ざされる筈の心を保つていら

れた。

だがしかし、今の彼女は囚われの身となつてしまつた。

この事を兄が知ればどのような想いに囚われてしまうのか。

その事を思つだけで、彼女の胸は張り裂けそつだつた。

溢れそうになる涙を必死に止めていると、扉の奥から話し声が聞こえてくる。

また兵士が監視の交代に来たのだろう、と思つていたが耳をすませてみれば

いつもとは様子が違つよつだつた。

扉がノックされる。

ナナリーは急ぎ田元を拭う。

「ナナリー様、失礼するぜ」

ナナリーが入室の許可を言つ前に扉は開かれ、聞き覚えのある声が彼女の耳に届く。

(この声は私を攫いに来た人……。確か名前はヴァルトシュタインつて呼ばれていた。

ヴァルトシュタイン姓と言えばナイトオブワントだった筈

「囚われとは言え女性の部屋に許可を得ずに入つてくるなんてブリタニアの誇る

ナイトオブワント様は随分と無作法ですね」

ナナリーは恐怖に震える心を無理やりしまい込み精一杯の虚勢を張る。

無意味だと笑われよつともこの虚勢だけは崩してはならない。

そんな決意を固めたナナリーの耳に届いたのは、

「あー、なんか勘違いしてるみたいだが、俺はナイトオブワントじゅゃ

がない。

ナナリー様が言つてるのは親父の事だろ？ 僕はナイトオブツーをやらせてもらつてるセグラント・ヴァルトショタインってんだ

どこかやりづらそうな声だった。

「え？」

ナナリーは思わず声を零してしまった。

必死の決意でナイトオブワーンと対したつもりだったといつに田の前の人人物はナイトオブワーンでは無いという。思わず力を抜いてしまいそうになるが、それも何とか耐え、強気の態度を維持する。

「どうせよナイトオブワーンズといつのは無作法といつ事ですね」

「それを言わると辛いな。まあ、こんなのは俺だけだ。……多分な

声音に困ったような響きが入り始める。

ナナリーはこの短い時間の中でナイトオブツー、セグラントがどういった人物なのかなが分かった気がした。このセグラントという男は正直なのだ。

自分はこの人物に攫われたのだと分かつていても不思議と嫌いに

はなれなかつた。

ナナリーは自分がこのよつた考へに至つた事に自分自身で驚いた。

恐らくだが、田の前の人物を嫌いになれないのは彼が纏う空氣のせいだらう。

幼少の頃より權謀術数の嵐に巻き込まれ、今の現状へと陥つてしまつた彼女にとって正直である、といつてはそれだけでとても素晴らしい美德なのである。

またナナリーといつう少女は幼少時のある出来事により田が見えなくなつてしまつた。

だからこそ彼女は人の感情の動きに敏感になつた。

そして、その卓越した感覚が囁くのである。

彼は本当に敵なの？　と。

ナナリーはその考へを忘れる爲に無理やりに平淡な声を出し、本題を問う。

「…………それで何の用でじょつか」

「ん、そうだつたそうだつた。叔父貴、陛下がお前さんをお呼びなんでね、俺はその道中の護衛兼監視役。そんじや行きますか」

いかにも今思い出した、といつ感じで手を打つ音が聞こえたかと

思えば、

「そんじやま、失礼しますよ」と

セグラントが後ろに回り、車椅子に付けられている取つ手を握つたのだろう。

車椅子が動き出した。

車椅子での移動を始めてからはじかも一言も喋る事はなかつた。

ナナリーはこれから父に会つといつ緊張で喋ららず、セグラントは何を話せばいいのかが分からぬ為喋らざるにいるのである。

そして、それから暫くがたつた所で車椅子が止まつた。

「ナイトオブツー、只今皇女ナナリー殿下をお連れしました」

「……うむ。入れい」

謁見の間の重厚な扉が開かれる。

その奥には皇帝の椅子があり、そこにナナリーの父であるシャルルがドッシリと座つてゐる。今は目が見えないとは言え、ナナリーはその存在を肌で感じていた。

ナナリーはキュッと自分の服の裾を握る。

「……我が騎士セグラント。」苦労だった。ひとまずは下がつて良

い

「イエス、コア・マジエスティ」

セグラントは深く一礼をすると謁見の間から出ていく。

残されたのはナナリーとシャルル、そして護衛の兵だけとなつた。

「……幾年ぶりか。我娘ナナリーよ」

「…………今の私はナナリー・ランペルージです。断じて貴方の娘ではありますん」

気丈に振る舞うナナリーを見てシャルルはその顔に笑みを浮かべる。

「氣丈よな。だが、貴様がいくら否定しようとも貴様が我が妻マリアンヌの娘である」という事実は消える事は無い。……まあいい、本題に入ろう

シャルルは一呼吸置き、傲慢に不遜に厳かに告げる。

「ナナリー・ヴィ・ブリタニアよ。貴様にはこれより我が帝国にて皇女としての責務を果たしてもらひ」

「それに私が領ぐとでも思つていらっしゃるのですか?」

「貴様に拒否権など無い。だが、どうしても理由が必要だと嘆いたのであれば、それを

作ってやるわ」「ひひ

シャルルはニヤリと笑いながら言ひ。

「兄の命は大事だろ？？」

ナナリーはその言葉だけで理解してしまった。
理解させられてしまった。

シャルルはなんら恥じ入る所は無いと言わんばかりに堂々と彼女の兄、ルルーシュを殺すぞ、と脅しをかけてきたのである。

「卑怯者！」

ナナリーは思わずそう叫んでいた。

だが、その言葉がシャルルの心を叩く事はない。

「ふは！ 卑怯う？ それは弱者の強者に対する言ひ訳よ！ 我が帝国では力こそが全て！ 力持つ者の言葉に弱者は逆らう事は出来ん！ 我が言葉を避けたければワシ以上の力を持ってい！」

堂々としたシャルルの宣言にナナリーは今度こそ言葉を失ってしまった。

そんなナナリーの様子を見て、シャルルは更に追い打ちをかける。

「皇女としての責務を果たせば、貴様の敬愛していたゴーフュニアの汚名を晴らせるかもしけんなあ？」

その言葉にナナリーの指がピクリと動く。

目が見えないとは言え、耳は聞こえる為、ナナリーもゴーフュニアが現在エリアーでどのように呼ばれているかは知っている。

曰く、『虐殺皇女』

行政特区日本といつまでも甘い餌で日本人を集め、虐殺した血塗れ皇女。

幼少の折りとは言え、少なからずゴーフュニアと親交のあったナナリーは彼女が

そのような真似をするとは到底思えなかつた。

シャルルはその汚名を晴らす機会を与えてくれるといつ。

「……私が皇女としての名に戻れば、本当にお兄様の命は保証してくれるのですね？」

シャルルは笑みを深くする。

「ああ、皇帝として確約してやう。貴様の兄、ルルーシュの命をワシから

狙う事はしない、と」

「分かりました。それで私はまずどうすれば？」

「貴様にはこれから皇女として必要な知識を修めてもらひおつ。後的事情は全て派遣される

人物に聞くと良い。ワシからの話は終わりだ。……セグラント！」

「は

「この者を元の部屋に戻しておけ。その後はもう一度ワシの下に来い」

「イエス、コア・マジエスティ」

シャルルに呼び出されたセグラントは再びナナリーの車椅子を運び出す。

謁見の間から出て、数分後。

ナナリーは大きくため息をついた。

セグラントはそんな彼女の様子を見ながら思つ。

「（叔父貴相手にあそこまで気丈な態度をとれるとはな。流石は叔母御の娘か。

将来は叔母御みたいになるつてか？……考えるのはよそう。健康に悪い）」

皇帝と皇女（後書き）

さて、皇女伝説の始まりだ！「めんなさい。石を投げないで。

次回はブラッククリベリオンの顛末を軽くと、いよいよR2へと進む第一期最後の話となるかと想います。R2からはセグラントもKMで大暴れ、の予定です。

元々暴れてたじやん、という意見は受け付けません。

それではまた次回

榎木スザク（前書き）

今回は物凄く短いです。『めんなれい。

枢木スザク

後に「ラッククリベリオン」と呼ばれる一大事件があった。

これは神聖ブリタニア帝国第三皇女コーフュニアによる日本人虐殺事件を切っ掛けと

してゼロ率いる黒の騎士団がトウキョウ租界へと攻撃を仕掛けた。

最初こそは黒の騎士団が優勢であったのだが、ここで一つの問題が起きる。

黒の騎士団のリーダー、ゼロが突如としてその姿を消したのである。

頭を失った事により黒の騎士団率いる暴徒達は瞬く間に鎮圧され、黒の騎士団もまた

殆どの主要人物が捕縛され、残された人員も潜伏、逃亡をよぎなくされた。

後世の歴史家達は考える。

何故、この時ゼロは消えたのか。

いくら議論を重ねようとしても答えが出るのは無かつた。

何故なら、この時の真実を知る者は全て口を閉ざしたのだから。

世界はある一つの知らせに沸き立っていた。

それは悲しい報告でもあり、喜ばしい報告でもあった。

その内容とは黒の騎士団のコーダーであるゼロが捕縛されたというものであった。

ゼロを捕縛した人物の名を枢木スザクと言った。

捕縛されたゼロは直ぐに本国、皇帝シャルルの下へと護送される事となつた。

シャルルはゼロを直ぐに自分の前に連れてくるようにと叫び、加えてその場の人払いを行つた。これには流石に反対意見が出たが、シャルルの皇帝の命である、という一言により封殺された。

そして、謁見の間の外の扉には万が一の時の為に護衛としてビスマルクとセグラントが配置されることとなつた。

「なあ、親父」

「なんだ」

「なんで叔父貴は人払いをしたんだろうな」

セグラントの疑問も最もなものだろう。ゼロと言えば神聖ブリタニア帝国に反旗を翻した数ある組織の中でも最も大きな勢力を持つていた黒の騎士団のリーダーである。

本来ならばそういうた人物を捕らえた場合は公開処刑へと直行するはずだというのに、
今回はその範疇では無かつた。これを気にするな、といつのは無理があつた。

それに対するビスマルクの答えは、

「陛下が仰つた事に異を唱える事などあつてはならない。陛下が人払いをしたのならば、我等はそれに従うだけである」

といつ實に彼らしい答えであつた。

半ば予想していたのかヤレヤレと肩を竦めるセグラント。

「……といひでセグラント。今、陛下の事を叔父貴と言わなかつたか？」

今は公務の最中であり、プライベートではないのだぞ？」

「……あ。いや、あれはだな、その、つこといつか何と言つか」

「あれほど……。あれほど騎士としての心意氣を持てと言つたのに貴様と言う奴はあ。

セグラント、そこになおれい！」

ビスマルクはそう叫ぶと、一瞬にしてセグラントの背後に回り逃げられないようにな
ベアハッグの態勢になり、そのまま後方に投げた。いわゆるベアハ
ッグスープレックス
である。

「げばりあああああ！」

セグラントは父の巧みな技に受け身を取る事も出来ず、床をのたつち回る。

「！」の糞親父いい！ 何が騎士としての心意気を持てだ！ 公務の最中に同僚に
技を極めるのが騎士のやることか！」

「ふん。今のは父から子への愛ゆえにいいのだ」

「そんな暴論ありか！？」

「私はナイトオブワーンで、お前はナイトオブツー。何か文句でも？」

堂々と言ひのけたビスマルクに流石のセグラントも開いた口が戻らなかつた。

実に清々しいまでの職権濫用であつた。

一人がそのまま大喧嘩という名の語り合へと移行する直前だつた。

謁見の間の扉がギィイという重厚な音を立てて開かれた。

出でたのは、ゼロを捕らえた枢木スザクだった。

「ヴァルトシュタイン卿、何をしているんですか？」

「……何事も無い。それより陛下との謁見は終わったのか？」

「はい。それでは自分は失礼します」

スザクはそう言い、ビスマルクとセグラントに一礼しあつていつた。

この時、ビスマルクはシャルルの護衛へと戻つていった為きづいていなかつたが、セグラントは見ていた。

スザクのビスマルクを見る目が剣呑な光を抱いている事に。

「……枢木」

気がつけばセグラントはスザクに声をかけていた。

「なんでしょうか？」

「…………いや、やっぱなんでもねえわ

何かを言いかけた様子にスザクは首を傾げるが、今度こそ去つていつた。

セグラントはそんな彼の背中を静かに見送った。

その目に多少の懷疑を混せながら。

榎木スザク（後書き）

ようやくR2へと行けそうです。ここからが本番です。頑張っていきたいと想います。

それではまた次回

鶴^{つる}迅^{じん}（前書き）

今日はあの人を中心のお話です。

ゼロ、処刑される。

この話題はまたたく間に世界に広まる事となつた。
ゼロという人物は反ブリタニアの象徴であつたために、その情報
が世界にもたらした
影響は計り知れないものであつた。

そして、それに伴いゼロを捕縛、処刑した神聖ブリタニア帝国の
力の証明ともなつて
いた。当然の事ではあるが、この情報がこんなにも早く流れたのに
は裏でブリタニアに
が関わっている為である。
ブリタニアはゼロの処刑といつ出来事を持つて世界に対し、自國
の強さを見せつける
事となつた。

しかし、ゼロを処刑したとは言えそれで世界から紛争や戦争が消
えるという事は無い。

世界には未だに反ブリタニア勢力は存在する。

その為、ブリタニア帝国の皇帝の剣であるナイトオブラウンズ達
は世界中に散らばり、
ブリタニアに仇なす者達との戦いへと赴いていた。

セグラントは戦場を眺めていた。

彼の視線の先には土煙が立ち込めており、肉眼では上手く視認す
ることは出来ないが、

ブラッディ・ブレイカーに搭載されている高性能能力メラを用いれば、そこでは戦闘が繰り広げられているのが分かる。

ナイトオブロウンドであるセグラントが戦わずにはいるのであれば、今、土煙の中で戦っているのは誰なのか。その疑問は直ぐにセグラントによつて解消される所となつた。

「お、また一機墜とした。やっぱり相当出来んな。ダーレトンは」
セグラントの咳きに、彼の横に立っていた20代前半程の若者が反応する。

「当然です。何せ私たちの義父上なのですから!」

そう自慢気に話す青年の名をクラウティオ・S・ダーレトンと言つた。

彼はダーレトンの養子の一人にあたる男である。

自身の父を誇らしく思つ氣持ちはセグラントにも十分分かる為、セグラントも僅かではあるがそれに微笑みを返す。

それから暫くすると、数機のKMFが編隊を組んでセグラントの下に帰還してくる。
先頭に立つKMFからダーレトンが降りてきて、セグラントに対し敬礼を取る。

「セグラント卿。敵先行部隊の殲滅滞り無く終りました」

「『苦労、流石は『瞬迅』のダーレトンだ』

「瞬迅、その名で呼ばれるのは未だに背中がむず痒くなりますな」

ダーレトンはその厳つい顔をほんの少し朱に染め、頬を搔く。

『瞬迅』のダーレトン。

それはダーレトンがセグラントの副官となつてから暫く経つてから付いた彼の二つ名であった。彼が瞬迅と呼ばれる所以は敵機を素早く墜とす事に由来されるが、一番の理由を上げるのならば、彼の駆る機体であらう。

ダーレトンは傍に立つ自身の機体を見上げる。

彼がいつ機体を手に入れたのか、それを知るにはある程度時を要す必要があるだろう。

ダーレトンがセグラントの副官となつてからある程度経った日の事だった。

彼はクラウンから呼び出しを受け、彼の研究室へと足を運んでいた。

「アーキテクト博士。入るぞ」

ダーレトンは適当に声を掛け、中に入り唖然とした。

何故なら部屋の中は足のふみ場が無いほどに紙が散乱していたのだから。

床に散らばる紙にはクラウンの手書きと思われる数式と何らかの図面が書かれていた。

「相変わらず汚い部屋だ。少しは片付けたらどうだ？」

「これでも片付けてくる方わ」

ダールトンの言葉にもじり吹く風と飘々と答えるクラウン。
そんな彼の様子にダールトンは肩を竦める。

「……それで博士。今日は一体どのよつな相談だ？」

「呼んだ理由か。そうだな、君もセグラント君の副官なつたからこそ戦場に出る事も

多くなるだろ？ そんな君へプレゼントを渡すため、かな」

プレゼント。

本来ならばその単語に喜ぶといつだが、その送り主がクラウンであるという事が

ダールトンに不安を抱かせる。

そんな彼の胸中をまつたく気にする」となくクラウンは手に持つていた分厚い本を
ダールトンに投げ渡す。

渡された本に視線を落とす。

その本の題名を『大動物図鑑』と言った。

「……なんだ、これは

「何つて動物図鑑さ。そんな事も分からぬのか？」

「そんな事はわかっている。私が聞きたいのは何故、これを私に渡したのかだ」

ダールトンの言葉にヤレヤレとため息をつくクラウン。

「動物図鑑を渡す＝好きな動物は何だ？　に決まってるじゃないか。こんな事も分からぬとは。……嘆かわしいな」

彼の言葉に思わず携帯している銃に手を伸ばしかけるダールトン。しかし、彼はそれを長年の軍人生活で培ってきた強い意志で抑えこむ。

「……それで分かるのは貴様と同じ変人だけだ。それで好きな動物だったか？」

ダールトンはパラパラと適当に図鑑をめくる。
そして、その手があるページで止まる。

「……私が好きな動物はコイツだな」

ダールトンがそう言つてクラウンに見せた動物は、

「ほう、狼か。なるほどなるほど。規律を重んじ、仲間の為に戦う君らしい答へだ」

クラウンはウンウンと頷く。

「それで?」この質問に何の意味があるのだ?」

「何つて、君の機体だよ」

「は?」

クラウンはやつぱり、近くにあつたパソコンにある映像を出す。

それは狼だった。

体を機械で構成された狼。

セグラントの駆る専用機ブラッディ・ブレイカーと同じ獣型のMF。

「これか……」

「ふん、驚いたか。これが君へ贈る機体。その名は『パマンドワルフ』」

「パマンドワルフ……」

画面を食いつぶすように見るダーレトン。

しかし、そこで端と気がつく。

「これは専用機ではないのか? 通常一般の兵がこういった機体を持つことは禁止されているはずだが?」

「そこは問題ない。君はセグラント君専属部隊の人間だからな。ある程度はこういった事は許される。それに、この機体は量産を目的としているからな。

それを見据えての試作機体と言えば許可も下りた」

「うつ言ひて許可証をヒラヒラと見せてくる。

何の問題もない。

そう理解すると同時にダールトンは自身の体の内から熱を感じる。

「ふは！ 我ながら現金なものだ。問題ない、と分かつた途端に血が滾る！」

皿をギラギラと輝かせるダールトンにクラウンは満足そうに頷く。
「……機体のロールアウトは一週間後だ。造りあげたら直ぐに君用の調整を行う」

「ああ、頼む」

ダールトンはうつ言ひて足早に部屋から立ち去る。

彼の背中を見送りながら、クラウンは小さく呟いた。

「あの男もセグラント君と同じ生糸の戦人か……」

それから一週間後。クラウンは言葉通りに一週間でコマンドウルフを作りあげ、

ダールトンはそれを受領する事となつた。

今までのＫＭＦとは明らかに違つ挙動に最初は苦戦したが、流石に長い時を戦い続けて戦士であるダールトンは直ぐに機体を自分の体のように動かすようになつた。

そして、彼は戦場でセグラントと共に数多くの戦果を上げ、『瞬迅』の二つ名を持つに至つたのである。

「それでセグラント卿。次はどうしますか？」そのまま敵本陣を潰しますか？」

ダールトンはコマンドウルフから視線を外し、問つ。

「いや、後は後詰に任せて俺たちは本国へと帰還する。先程そつ命令があつた」

「本国、ですか。皇帝陛下ですか？」

「ああ、ラウンズの殆どに招集を掛けたらしい」

「それはまた……。何か起きたのでしょうか？」

ダールトンの言葉にセグラントは苦笑をもつて答える。

「ある意味何かが起きたのかもな。何せ、新しいラウンズの誕生らしいからな」

黙想（後書き）

そう、答えは皆の親父ダーレトンです！
私の誰のダーレトンへの愛は100%である…………。○。
次回からアラジンの話になります。

騎士の食事（前書き）

ほほー！一ヶ月ぶりの更新です。本当にすいません。中々書けませんでした。

これからは何かと/or 更新速度を上げられればと思つていますのでよろしくお願ひいたします。

騎士の食事

神聖ブリタニア帝国の帝都であるペンドラゴンは連日、一つのニュースで騒がしくなっていた。そのニュースとは長い間空席であったナイトオブブラウンズの第七席、ナイトオブセブンの就任というものであった。

ナイトオブセブンに任命したのがブリタニア人であれば、ここまでの騒ぎにはならなかつたであろう。しかし、ナイトオブセブンに任命されたのは日本人。

ブリタニア人達がイレブンと蔑称するナンバーズの人間だったからである。

その日本人の名を枢木スザクと言った。

「枢木スザク。汝、ここに騎士の誓約を立て、我が騎士として戦う事を願うか？」

「イエス、コア・マジエスティ」

「汝ら、私情を捨て、我、シャルル・ジ・ブリタニアの正義を貫く為の剣となり、盾となる事を望むか？」

皇帝シャルルの言葉にスザクは深く頭を垂れ、自身の剣を捧げる。

「イエス、コア・マジエスティ」

「よからう。これより汝、枢木スザクをナイトオブセブンとして我が騎士とする」

叙任式を終えたスザクは一人、佇んでいた。

彼の眉間に皺が寄つており、今何を考えているかは分からないが、近寄りがたい

空氣を出しているという事だけは分かる。

そんな彼に一人の男が近づく。

「よつ、ナイトオブセブン」

それはジノだった。

回りの人間が近寄らない中、それでも近づける彼は大物なのかもしない。

「……貴方は確かナイトオブスリー、ヴァインベルグ卿でしたか」

「固いなあ。ジノでいいさ。俺もスザクって呼ばせてもらうからさ。これからは同僚なんだ。いいだろう?」

邪氣の無い笑顔でそういったジノはスザクの肩をバシバシと叩く。少し力が強かつたのか、スザクはよろけそうになるが、それを堪え笑顔を浮かべる。

「それじゃあ、ジノ。僕に何か用かい?」

「そう、それそれ。スザク、お前つてあれだろ？ エリアーーを騒がせてたゼロを捕縛した功績でラウンズに入ったんだね？」

「……そうだよ」

ゼロ。

その名が出ると、スザクの顔に苦々しい物が浮かぶ。

「ゼロってどんな奴だったんだ？ ゼロの処遇は陛下が全て処理したからな。ゼロに関する情報は一切回ってないんだよ。でも、捕縛した本人なら知ってるだろ？」

「なるほど。そういうとか。ゼロは、ゼロは……酷い奴だったよ」

スザクはそのまま口を開ざす。

これ以上は聞けない、と判断したジノはすぐに話題を変える。

「スザク、これから一緒に飯でも食いに行かねえか？」

「これからかい？」

「ああ。ちなみに拒否権は無いからな。もう店予約してあるから」

有無を言わぬスザクの背中を押し、歩き始めるジノ。スザクはその無理矢理さにっこ笑ってしまった。

「ジノ、自分で歩けるから肩を離してくれないか？」

「……それで、お前はどう思つた？」

スザクの叙任式を終えた後、セグラントはビスマルクと共に食事を取つていた。
食事を始めてから十数分経つた辺りでビスマルクはそう尋ねてきた。

「どうして、何がだよ」

「わかつてゐるだらう。榎木スザクの事だ。奴はお前の田にまどつ
写つた？」

「……くそ真面目。そんで結構強いんぢやないか？　体捌きとかか
なりの物だつたしな」

セグラントの答えにビスマルクは頷く。

「そうだな。だが、私が聞きたいのはそこでは無い。奴は眞に陛下
に忠誠を誓つてゐるか
どうか、という話だ」

「……そんな事を聞かれてもな。答えはアイツしか知らねえだらう

セグラントの言葉にビスマルクは何も言わない。
ビスマルクもわかっているのだ。

この様な質問に答えを返せるのは本人以外にありえないという事
ぐらいは。

だが、それでも聞かずにはいられなかつた。
枢木スザクという男を見た時に感じたナニカ。

「……そう、だな。今の質問は忘れる」

「親父？ なんからしくねえな。ビツしたんだ？」

セグラントの自身を心配する間にビスマルクは首を振る。

(やれやれ、息子に心配されるよりではいかんな)

「なんでも無い。馬鹿息子の今後を考えたら少し頭が痛くなつただ
けだ」

誤魔化す様に笑うビスマルクにセグラントは気づいていたが、敢
えてそれに乗る。

この話は続けるべきでは無い、と判断したから。

「ひでえな、親父」

そういうて一人は食事を再開する。

ビスマルクは食事の手を進めながら考える。

(そうだ、何を弱気になつてゐる。奴が陛下に忠誠を誓つていよう
といまいと関係は
無い。奴が陛下に仇なす者だと分かつた時に斬ればいいだけの事だ)

騎士の食事（後書き）

短くて本当に申し訳ありません。

正直に言つて、ラストと一番書きたいシーンはもう書いてあるんですけど、そこにたどり着くまでを中々書けません。コードギアスの知識も抜け落ちてしましますし……。

それではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9175p/>

コードギアス 猛き獣

2011年11月20日11時00分発行